

中世大友再発見フォーラムⅡ

府内のまち 宗麟の栄華

大友宗麟の光と影

宗麟を支えた武将たち



大友館跡から出土した金細工破片(大分市教育委員会)

大友義鎮(宗麟)は行動の粗暴さなどを理由に廃嫡寸前となりましたが、家臣のクーデターにより復権し、弱冠21歳で大友家の当主となりました。世に言う"二階崩れ"の変です。家督を継いだ後は加判衆とよばれた重臣たちに支えられ、北部九州六カ国の守護として領国を拡大していきました。なかでも、豊州三老と呼ばれた戸次鑑連・臼杵鑑速・吉弘鑑理の三名の活躍は著しく、宗麟の全盛期をつくりだした立役者といえます。とくに戸次鑑連は、若いころ雷に打たれて下半身不随になったが、駕籠に乗って出陣し、猛将の名をとどろかせたという人物です。大友氏が筑前博多の立花城を攻め滅ぼしたのち、宗麟の命によって立花氏を継ぎ、立花道雪と名乗りました。耳川の戦いで大友氏が島津に敗れ、しだいに弱体化していったとき、豊後にいる13名の武将たちに檄を發し、宗麟や義統に諫言をしたのも立花雪道でした。



大友宗麟朱印(福岡市博物館)

大友宗麟画像(京都大徳寺瑞峯院) 宗麟の菩提寺である京都の大徳寺瑞峯院に伝えられる画像。

てんかびと
天下人

宗麟は父義鑑と同じく、積極的に中央の室町將軍家とのつながりを深めていきました。義鎮(宗麟)の「義」の字は時の將軍足利義晴から元服の際に一字をもらったものです。その一方で、織田信長とも親交を深め、信長が天下人となる以前にうるし製の高価なお盆を贈っています。信長の死後、天下人となった豊臣秀吉とは、島津氏が秀吉の停戦命令に背き豊後へ迫ったことを受けて宗麟自身が大阪にのぼり、秀吉と面会しています。



織田信長朱印状(柳川・御花史料館)
1579年(天正7年)に織田信長が義統に与えた文書 天下布武の朱印がある。



せきへきふすぼん
赤壁賦図盆(名古屋・政秀寺/写真提供・根津美術館)
大友宗麟が織田信長に贈った盆。



めいぶつほねはみとうしろう
名物骨喰藤四郎(京都・豊国神社/写真提供・京都国立博物館)

びやくだんぬりあさきいとおとしはらまき
重要文化財 白檀塗浅葱糸威腹巻(柞原八幡宮)
大友氏の寄進と伝えられる。兜は椎突形をし、南蛮兜の影響がみられる。
なお表紙も同じものである。



ほりみしまちやわん
彫三島茶碗 (大分県教育庁埋蔵文化財センター)
朝鮮半島産の茶碗



茶道

戦国時代、茶の湯をたしなむことは京都の公家や武家にとっての教養のひとつでした。宗麟も30歳のころ、茶の湯をたしなみ、その手並みは京都の公家にまで知れわたるほどでした。宗麟は、その繁栄にともない、しだいに高価な茶席を飾る道具や名品茶道具の蒐集に奔走するようになります。宗麟の全盛期には、新田肩衝・上杉瓢箪などの名物茶入れをはじめとする数々の名品を所有していました。しかし、大金と多大な労力をかけて集めた宗麟の茶道具コレクションは、権力の衰退に伴い次々と手放すことになりました。



うえずきひょうたん
上杉瓢箪 (京都 野村美術館)

大友宗麟旧蔵の茶道具。古くは大友瓢箪と呼ばれたが、のちに豊臣秀吉から上杉景勝に伝来したため上杉瓢箪と名付けられた。



てうしもんいりわちがいもんほきまくら
フランシスコ合字紋入輪違文時絵鞆 (京都大学総合博物館)

キリスト教

宣教師フランシスコ・ザビエルとの出会いののち、宗麟はキリスト教を熱心に保護します。しかし、自ら信者となることには躊躇し、はじめ宗麟は京都大徳寺瑞峯院の怡雲宗悦ちゆうんに師事し禅を学びます。ところが宣教師の記録によると宗麟は心の安定を得ることができなつたとして、1578年(天正6)7月に臼杵の教会で洗礼を受けることになります。若いころ初めてその教えを聞いたザビエルにちなんで洗礼名はフランシスコ。皮肉にも日向高城の戦いと同年であり、この戦いで敗戦を機に大友氏の支配体制は弱体化していきます。

さんぽく

金箔土師器皿 (大分県教育庁埋蔵文化財センター)

かわらけ(土師器)の表面に漆を塗り、その上に金箔を貼っている。大友館に隣接するまち跡から出土した。儀式に使用されたのだろう。



大友館跡出土金属製品 (大分市教育委員会)
銅の表面に金を貼っている。



大友館跡出土金製飾り金具 (大分市教育委員会)
金製の金具の一部である。表面には細かな模様がみられる。

大友館と府内のまち

大友館

大友館跡の大きさは、200m四方(方二町)あり、日本でも最大規模の館です。この館は、宗麟が息子義統に家督を譲るにあたり、義統のために造営されたことがわかってきました。大友氏の約400年の歴史の中で最も光輝いた宗麟の時代、全国的にみても最大級の館の建設は、まさに大友氏の^{えいげ}栄華を象徴するものでした。



ガラスの小皿 (大分市教育委員会)
ガラス製小皿の破片である。表面は風化し白濁する。割れ口に透明な部分を見ることができる。酒盃などに使用されたものか。大友館跡出土。



土壁片 (大友館跡出土)
大友館の周囲を囲う平行する2本の溝の中からは、土壁片が出土する。文書史料に記された「土圍廻屏^{どいまわりべい}」の一部であろうか。



玉砂利 (大友館跡出土)
館内からは緑色や白色の玉砂利が出土する。館の建物の周囲や池庭にはこうした玉砂利が敷き詰められていたようだ。

道路跡の断面写真
府内のまちの道路は粘土と砂を丁寧に積み上げ路面を築いていた。特に館正面の道路は幅11mの大きさがあり、まさに当時のメインストリートであった。



南蛮屏風(神戸市立博物館) 狩野内膳筆。日本に到着した南蛮船と港町での荷揚げ、カピタン(船長)一行の行列と出迎える宣教師たちを描く。

かなんさんさいちようかもんごしこ
華南三彩貼花文五耳壺(勝光寺)

勝光寺に伝わるもので、イギリス人コレクターであった
ジョン・トラディスカントが好んで蒐集したことからトラディスカント壺
とも言われる。中国華南(福建・広東地方)で作られた
緑・黄・紫の釉で彩られた陶器壺。南蛮貿易により
日本にもたらされ、府内のまち跡からも出土する。

南蛮貿易都市

府内のまちは、堺・博多とならぶ戦国時代の日本を代表する国際貿易都市でした。当時5000軒の町屋が立ち並び、通りには多くのポルトガル商人・宣教師をはじめ、中国人や東南アジアの人々が行き交う国際色豊かな都市であったと考えられます。まちには異国から持ち込まれた珍しい品々があつまり、活気にあふれていました。

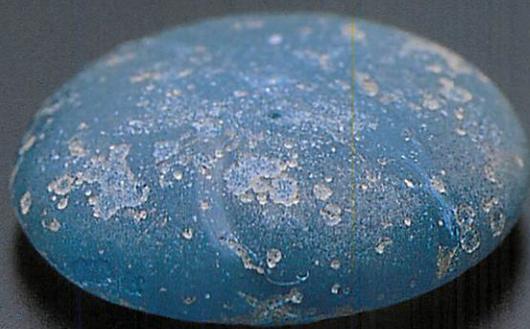


府内古絵図(個人蔵)
大友宗麟時代の府内を描いた古絵図であり、現存するものの中で最も古く、当時の様子を忠実に伝えていると考えられる。





丁銀
 当時の輸出品の主なものは銀であった。
 商取引には丁銀が使用された。写真は江戸時代のものである。



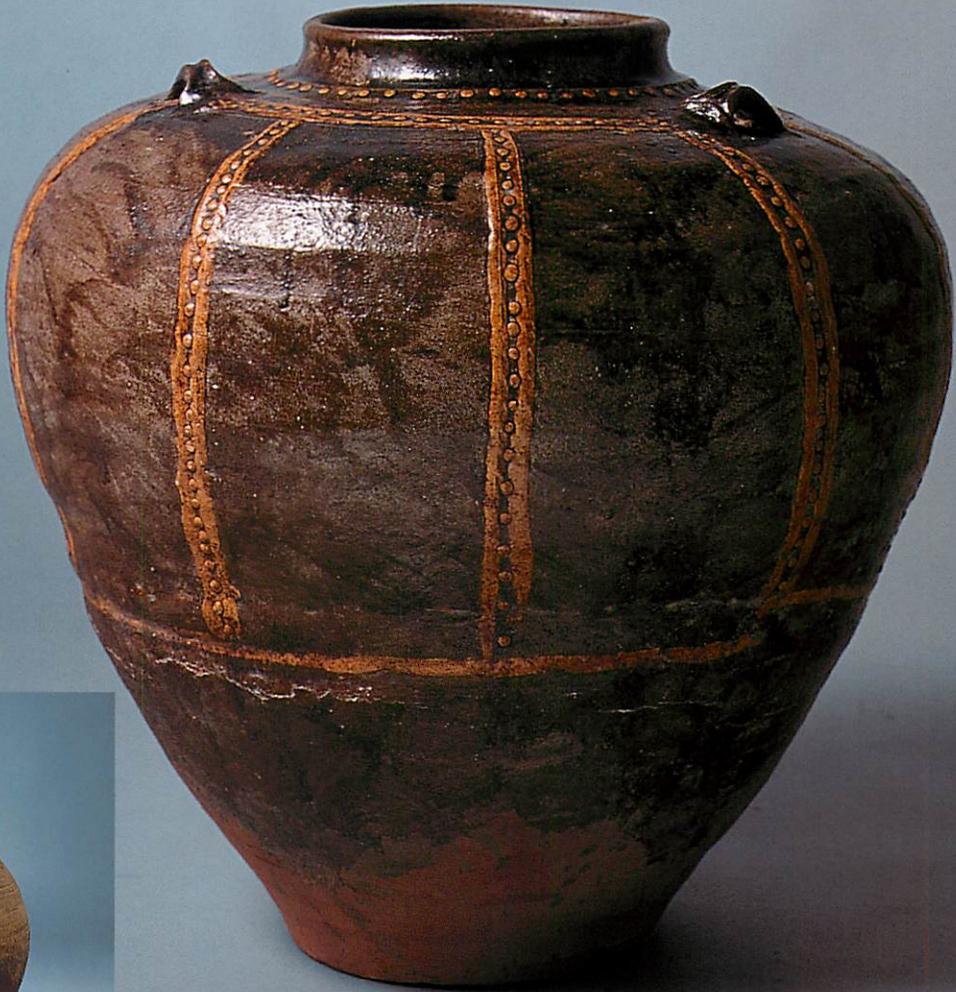
ガラス玉(大分市教育委員会 府内町跡出土)
 ガラスは南蛮貿易によりもたらされた。
 ブルーに輝くガラスの玉に当時の人々は南蛮への憧れを強く抱いたに違いない。



ガラス玉(大分市教育委員会 府内町跡出土)
 全面が風化して乳白色となっており、透明部分はみられない。
 青いガラス玉とともにガラス製品の装飾の一部であったと考えられる。

こくゆうざんじこ
ミャンマー産黒釉三耳壺 (大分市教育委員会)

府内の町跡からも同種の壺が出土する。
南蛮貿易により東南アジア地域(タイ・ベトナム・ミャンマー)の製品が数多く持ち込まれていた。



やきしめとうきしじこ
タイ産焼締陶器四耳壺 (大分市教育委員会)

東南アジア産の陶器の壺は硝石(火薬の原料)や砂糖などの入れ物として府内に持ち込まれた可能性がある。



かちようまきえらでんようびつ
花鳥蒔絵螺鈿洋櫃 (津久見市教育委員会)

当時、日本からヨーロッパへ輸出されていた工芸品の代表であり、
南蛮漆器と呼ばれた。ポルトガル人の好みにあわせた注文品である。



かなんざんさいりよくゆうばん
華南三彩綠釉盤 (大分市教育委員会)

中国華南で焼かれた陶器皿である。
府内のまち跡からは、壺、皿、水注など多彩な華南三彩陶器が出土する。



うえすぎほんらくちゅうらくがいずびょうぶ
国宝 上杉本洛中洛外図屏風 (米沢市上杉博物館)
戦国時代の京都を描いた屏風の一部。
府内のまちもこのようなくらしぶりであったと考えられる。

鉄砲の弾 (大分市教育委員会)
ひなせしゅう
火縄銃の弾で、鉛製である。
府内のまち跡から出土する。



銅製鍵 (大分市教育委員会)
ちやんす
茶車筒などの鍵と考えられ
様々な形の鍵や錠前が出土する。



まちのくらしとにぎわい

府内のまちは、中央に大友館が置かれ、4本の南北道路と数本の東西道路で区画されており、40あまりの町々に分かれていました。町の境には木戸が設けられ、商家と武家地が混在していました。この姿は当時の都である京都に似ています。府内のまちは、守護城下町山口に堺や博多などの国際貿易都市の特徴をそなえた、当時としては最も進んだ都市であったようです。



甍蔵跡(大分市教育委員会)
備前焼の大甍10基を並べた蔵跡。有力な商人の屋敷跡とみられる。



せいじんぶつしょうくたい
青磁人物燭台(大分県教育庁埋蔵文化財センター)
人物燭台の顔の破片である。
中国製であり、万寿寺の堀跡から出土した。

金と力を持つ大商人

府内の商人や職人の活躍はまちの活力源となっていたようです。南蛮貿易による大変な富により、京都や堺の商人を凌ぐともいわれるような大商人が現れました。府内の商人として有名な^{なかやそうえつ}仲屋宗悦は、そうした大商人のひとりでした。また、南蛮船の府内への入港がなくなったあとは、豊後の商人は多くの銀をたずさえ、長崎にまで絹の買い付けに向かっていた。発掘調査では、^{かじ}鍛冶にかかわる工房跡や遺物も見つかっており、府内のまちに多くの職人が住んでいたようです。宗麟は日本で最も早く大砲を手に入れ、大砲の^{ちゅうりゅう}鑄造も手がけました。日本ではじめて大砲を鑄造したのがここ府内だったのです。府内職人の技術力の高さがうかがえます。また、まちには、唐人町・魚之店・小物座町・^{たくみざ}工座町など、ある程度の職種のまとまりをもった町の存在もうかがえます。



かなんさんさいうまがたすいてき
華南三彩馬形水滴(大分県教育庁埋蔵文化財センター)
中国華南で焼かれた陶器水滴。様々な形のものがあるが、馬の形をしたものは他に類例がない。



かなんさんさいとりがたすいてき
華南三彩鳥形水滴
(大分県教育庁埋蔵文化財センター)



りょくじきんらんでさら
緑地金襴手皿(大分市教育委員会)



せいかわん
青花碗(大分市教育委員会)
中国景德鎮で作られた磁器碗。見込みに人物が描かれる。



青花皿(大分市教育委員会) 中国景德镇で作られた磁器皿。



中国青磁碗(大分市教育委員会)



中国白磁皿(大分市教育委員会)



ひぜんやきすりばち
備前焼搥鉢(大分市教育委員会)



備前焼壺(大分市教育委員会)



ひぜんやきとっくり
備前焼徳利(大分市教育委員会)

しんちゅう
真鍮製チェーン(大分県教育庁埋蔵文化財センター)

メダイ[表](大分県教育庁埋蔵文化財センター)
金属製の平たい円盤状の形をしており、
ロザリオに付けられた。
ヴェロニカと呼ばれるキリストの顔をかたどる。



メダイ[裏](大分県教育庁埋蔵文化財センター)
聖母子像(マリアとキリスト)の姿をかたどる。

コンタ(大分県教育庁埋蔵文化財センター)
しぼり
数珠のことであり、
ロザリオの一部。ガラス製。



指輪(大分県教育庁埋蔵文化財センター)

様々な信仰

府内のまちには、町人による民間信仰も多く、神社仏閣による宗教活動もさかんにおこなわれていました。神道、そして
仏教、禅宗をはじめ、さまざまな宗派があり、これにキリスト教が加わりました。



じぞうぼさつざそう
地蔵菩薩坐像(大分県教育庁埋蔵文化財センター)

型作りによる土製の地蔵菩薩像。府内のまちに暮らす人々の祈りの対象となった。



おにがわら
鬼瓦(大分県教育庁埋蔵文化財センター)
万寿寺跡から出土。万寿寺は大友氏の菩提寺のひとつであり、
大友館よりも広い寺域をもち臨濟宗の道場として大いに栄えた。

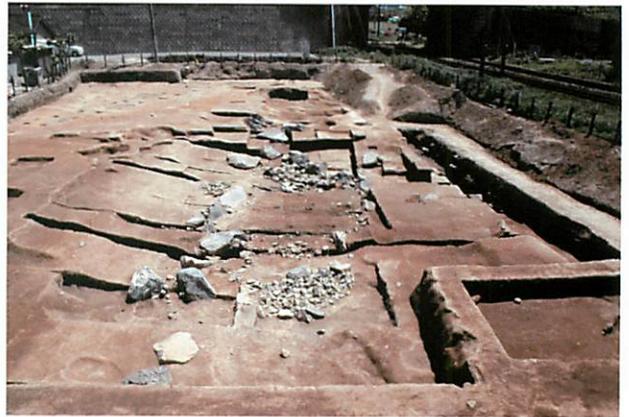


いぬがたどせいひん
大形土製品(大分市教育委員会)
犬をモチーフとしたミニチュア土製品。犬は安産多産の象徴といわれ、
こうした土製品は安産のお守りではなかったかという説がある。
豊臣秀吉の造った大坂城では、100点以上まとまって出土した例がある。

大友館 これまでの調査でわかったこと

大友義統よしみねにより著されたとされる「とうけねんちゆうさほうにっき富家年中作法日記」などによると、館東面には正門である「大門」があったようです。この大門とまちの中央を走る南北道路との間には、約10mの空地があり、これが日記に記された「馬立所」の可能性がります。主人を乗せてきた馬は、供の者とともに館の中には入れず、この馬立所で待機しました。8月1日の「八朔」の儀礼の際には馬立所が混雑して困っていたようですが描かれています。館の中央部では、建物の柱を支える基礎となる石（礎石）を安定させる根締石が見つかっており、その規模からかなり大きな建物があったことがうかがえます。また、館の南東部では、東西幅が約66mの巨大な池を伴う庭園跡が姿を現し、いずれも、戦国大名の館としては、全国屈指の規模であったことが分かりました。

大友館の正面（東側）には町屋が建てられました。町屋の発掘調査では、道路にそって間口3～4m、奥行き約30mの区画が認められ、区画の奥には数区画ごとに井戸が造られていました。いわゆる「うなぎの寝床」状の地割は、当時の店舗の跡とみられ、礎石や転がし根太といった基礎の建物があったと考えられています。



庭園跡(巨大な池の跡)



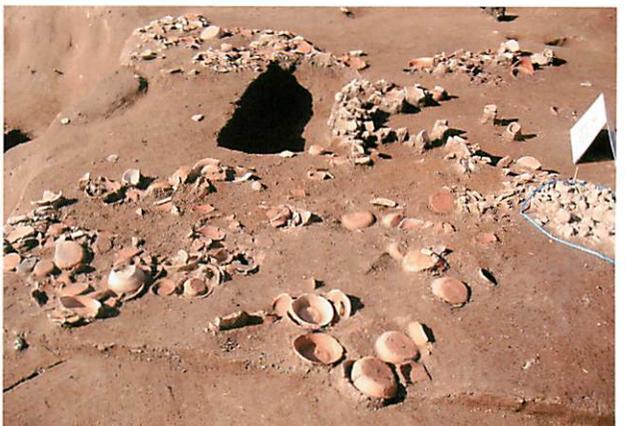
大型建物の柱の基礎(主殿か)



館を囲む施設跡
2本の溝の間には積土がみられる。「土圍廻屏」の基礎部分か。



空からみた現在の大友館跡



儀式などに使われ、捨てられたかわらけ

府内のまち これまでの調査でわかったこと



これまでの発掘調査の成果から、府内のまちは東側と西側の南北道路が最も古く造られ、これを基軸に他の道路がしだいに整備され、最終的に戦国時代末期の府内古絵図に描かれた姿になっていったことが分かりました。府内のまちには、40あまりの町があり、町の境には木戸が設けられていました。発掘調査の結果、まちの中央には大友館が造られ、館の周りには、武士の屋敷と商家が混在していたようですがうかがえます。

目次

解説編

I. 大友宗麟の光と陰

- 1. 宗麟を支えた武将たち…………… 2
- 2. 宗麟と天下人…………… 3
- 3. 宗麟と茶の湯…………… 4
- 4. 宗麟とキリスト教…………… 5

II. 府内の館とまち

- 1. 大友館…………… 7
 - 大友館の建設…………… 7
 - 大友館での行事…………… 8
 - 大友館の施設…………… 10
- 2. 府内のまち…………… 12
- 3. 南蛮貿易…………… 13
- 4. まちのくらしとにぎわい
 - 商人と職人…………… 16
 - 祭り…………… 17
 - 飲食…………… 19
- 5. 府内のまちの人々と様々な信仰…………… 20

資料編

- 府内関係史料リスト…………… 24
- 「日本一鑑」にみえる豊後関係の記録…………… 27
- 「當家年中作法日記」に見える大友氏の儀式・祭礼…………… 30
- 『大友興廃記』…………… 33
- イエズス会宣教師の主な記録…………… 36

解 説 編

1. 本冊子の取り上げる時代は、約 400 年近くに及ぶ大友氏の歴史の中で特に第 21 代大友義鎮（宗麟）の生きた時代（1530 年～1587 年）に限定しており、府内のまちについては、南蛮貿易等により「まち」が最も繁栄した天正年間、グラビアページに掲載している「府内古絵図」に描かれた時代を対象としている。この府内古絵図は、記載内容の時代考証から 1581 年（天正 9）ころから 1586 年（天正 14）までの府内の姿を描いたものであると考えられる。
2. 本文中の大友館は、府内古絵図に描かれ、史料や発掘調査成果から 1573 年（天正元）前後に造られたと推定される時期の館に限定しており、同時期に上野台地に所在した館は上原館（うえのはるやかた）と記した。
3. 通常、「府内」は沖の浜まで含めた府内古絵図に描かれた範囲を対象とすることが多いが、今回は南北 2.1km、東西 0.7km の府内の中心町域に限定し、記述にあたっては当該範囲を「府内のまち」と便宜上記述している。
4. 本文中で記載している年月日は旧暦（和暦）を使用している。
5. 文中で「作法日記」とあるのは、資料編で紹介している「當家年中作法日記」（とうけねんちゅうさほうにつき）のことである。

I 大友宗麟の光と陰

1. 宗麟を支えた武将たち

【宗麟の誕生と父義鑑】

大友宗麟^{おおともそうりん}（義鎮^{よししげ}）は1530年（享禄3）20代義鑑^{よしあき}の長男として生まれ、将来家督を相続すべき立場にあった。しかし、その地位は安泰ではなかった。1550年（天文19）2月、父義鑑は斎藤・小佐井・津久見・田口の重臣4名を呼び寄せ、宗麟^{はいちやく}の廃嫡と宗麟の異母弟で三男塩市丸^{しおいちまる}への家督相続を申し渡した。4名はこれに同意せず、怒った義鑑は斎藤・小佐井両名を殺害、難を逃れた津久見・田口が反撃に出て、大友館にいた塩市丸とその母を殺害し、義鑑に重傷を負わせ、義鑑は2日後に絶命した。いわゆる二階崩れの変である。父義鑑が宗麟の廃嫡を言い出したのは、宗麟の行動が粗暴で、大友家の将来に不安を覚え、加えて義鑑の側近入田親誠^{にいゆた ちかざね}が塩市丸の母に頼まれ、塩市丸への家督相続を画策した結果だと言われている。事件の原因や背景ははっきりしないが、宗麟は家臣による父義鑑の殺害という一種のクーデターの結果、大友家21代当主となったのである。時に21歳の青年であった。

【大友氏加判衆】

戦国大名と聞けば、独裁者をイメージする人が多いのではなかろうか。しかし、当時の大名は独断で物事を決定することはほとんどなく、重臣たちとの合議が行われ、決定事項も重臣たちの連名で伝えられた。鄭舜功^{ていしゆんこう}の「日本一鑑」には大友氏の家臣たちは日中にみんな集まって会議を開くとあり、重要事項を重臣の合議により決定していたことがわかる。この重臣たちの組織は大名によって呼び名が異なるが、大友氏の場合は加判衆^{かはんしゆう}と呼ばれていた。

宗麟が家督を相続して以後の主な加判衆は、1550年（天文19）から1557年（弘治3）ころまでが小原鑑元^{おぼらあきもと}・田北鑑生^{たきたあきなり}・雄城治景^{おごはるかげ}・臼杵鑑続^{うすきあきつぐ}・吉岡長増^{よしおながます}・志賀親守^{しがちかもり}、1558年（永禄元）から1570年（元亀元）ころまでが吉岡長増^{そうかん}（宗歆）・志賀親守^{うすきあきはや}・臼杵鑑速^{よしひろあきまさ}・吉弘鑑理^{べつきあきつら}・戸次鑑連^{とくじあきつら}、1571年（元亀2）から1579年（天正7）ころまでが吉岡鑑興^{よしおかあきおき}・志賀親度^{しがちかのり}・臼杵鑑速^{うすきあきはや}・吉弘鑑理^{よしひろあきまさ}・朽網鑑康^{くたみあきやす}・田原親賢^{たわらちかかた}（紹忍）^{じょうにん}・佐伯惟教^{さいこのり}（宗天）^{そうてん}、1580年（天正8）から1587年（天正15）までが志賀道輝^{しがどうき}（親守）^{しんしゆう}・戸次鎮連^{べつきしげつら}（宗傑）^{そうれき}・朽網宗歴^{そうれき}である。これらの家臣が宗麟の政治を支えていた。

【豊州三老】

加判衆の中でも最重要人物として特記されるのが、「豊州三老」と称された戸次鑑連^{とくじあきつら}・臼杵鑑速^{うすきあきはや}・吉弘鑑理^{よしひろあきまさ}である。いずれも大友氏一族で、宗麟が北部九州六カ国守護として領国を拡大させ、毛利氏や龍造寺氏と覇権を争っていた時期に加判衆として宗麟の全盛期を支えた。

戸次鑑連^{とくじあきつら}（道雪）は1516年（永正13）の生まれで、宗麟のほぼ一回り年長であった。1561年（永禄4）から加判衆として活動している。若いころ雷に打たれ下半身不随となったが、駕籠に乗って出陣し、猛将として名をはせた。筑前国博多を守る要害、立花城主立花鑑載^{たちばなあきとし}が大友氏に背き滅ぼされた後、1571年（元亀2）宗麟は鑑連に立花氏を継がせた。以後北部九州支配の要として龍造寺氏や島津氏との戦闘に奮闘した。筑前の地で獅子奮迅^{ししふんじん}の活躍をしながらも、1578年（天正6）の日向高城・耳川合戦での敗戦以後、豊後本国では、田原親宏^{たわらちかひろ}・親貫父子^{ちかつら}の反乱、田北紹鉄^{たきたじょうてつ}の反乱と大友家の弱体化が進んでいった。これをみかねた鑑連は、1580年（天正



立花道雪画像（柳川市・福厳寺）

8) 2月豊後国大野・直入郡に本拠を持つ13名の武将に大友氏領国の危機的状況を訴え、宗麟やその長男義統への諫言や重臣たちへの訓戒を述べた檄文を発している。1585年(天正13)島津氏方についた筑後の領主たちの鎮圧に従事する中、高良山(久留米市)の陣中で病死した。

【田原紹忍】 田原紹忍は宗麟の義兄にあたる。1571年(元亀2)戸次鑑連が筑前に移り、吉弘鑑理が亡くなり、残る三老の臼杵鑑速も1575年(天正3)に亡くなると、大友氏中枢での紹忍の権勢は強まった。戸次鑑連の檄文では宗麟が紹忍を特別扱いしており、家臣内部での軋轢を生んでいるとしている。また、1577年(天正5)フロイス書簡では、紹忍は兵力・権勢・富・政治において大友氏領国内で第2・3番目に位置しているとされ、翌年の書簡では「国中第一の大身」と記している。その権勢は外国人宣教師の目にも明らかであった。

1578年(天正6)日向国北部の領主土持氏攻略に成功すると、紹忍は本格的な日向攻略を主張し、同年9月総指揮官として出陣した。しかし、11月高城合戦で敗北、その責任を問われ加判衆を離れて、一時豊前国妙見城(宇佐市院内)に退いた。しかし、フロイスの『日本史』では1579年(天正7)に府内を統治する最高権力者であったとされており、1586年(天正14)まで豊前方面担当官も勤めていた。加判衆からは離れたものの、大友氏中枢で隠然たる権力を保っていたようである。皮肉にも、紹忍が権勢を誇った時期に大友氏領国は弱体化していった。

2. 宗麟と天下人

【室町将軍とのつながり】 宗麟の父義鑑は積極的に室町将軍家と関わりをもっていた。1524年(大永4)足利義晴の12代将軍就任祝いに太刀と銭1万疋を贈り、「義」の一字をもらい親敦から義鑑と改名している。翌年には太刀・鎧・銭1万疋を献上、「桐紋」の使用が許可されている。このような関係は宗麟にも受け継がれた。元服前から塩法師の名で祝儀を贈り、元服に際しては将軍義晴から一字をもらい義鎮と名乗っている。

幕府との密接な関係は家督相続後も続いた。宗麟は家督を相続した時点で豊後・肥後・筑後三カ国の守護職を持っていたが、1553年(天文22)には13代将軍足利義輝に太刀・銅銭・火縄銃を献上し、翌年肥前国守護職を与えられた。さらに、1556年(弘治2)には前将軍義晴の七回忌の仏事料として銭2万疋、1559年(永禄2)には御殿普請料として銭3千貫を献上している。このような献金の結果、1559年に豊前・筑前国守護職(計六カ国守護)と九州探題職を与えられ、さらには1560年(永禄3)、武家では畠山氏・朝倉氏しか得ていない左衛門督の官職まで得た。義鑑と宗麟は、実権は失われたものの、武家社会において最高権威であった将軍家とつながりを深めることで自らを権威づけていった。

【織田信長】 宗麟と織田信長の関係は、信長が美濃を攻略した1567年(永禄10)から始まっている。斎藤氏の旧城を新しい本拠に定めた信長は禅僧宗恩沢彦に命じ、その名を岐阜に改めた。この名を気に入った信長は沢彦に黄金10枚を宗麟から贈られた名盆に載せて与えたという。この盆は「赤壁賦図盆」といい、信長が沢彦を開山として創建した政秀寺(名古屋市)に現在も伝わっている。宗麟は早くから信長の実力と勢いを見抜いて名高い盆を贈ったのであろう。一方信長からは「鬼月毛」という名馬が宗麟に贈られた逸話が『大友興廢記』にみえる。

また、信長が上洛を果たした1568年(永禄11)に宗麟は、畿内での信長の軍事行動と政治情勢を詳細に三老の一人臼杵鑑速に伝えており、正確に中央の情勢を把握していた。信長の台頭



織田信長の「天下布武」朱印
(御花史料館)

を見抜いたことといい、宗麟は京都の政界にかなりの情報ネットワークを築いていたものと考えられる。

そのころ宗麟は、山口の大名大内氏を滅ぼし、中国地方随一の大名に成長した毛利元就もうりもととなりと筑前・豊前をめぐる戦いを繰り広げていた。将軍足利義昭あしかがよしあきの後見人として中央政権の実権を握っていた信長は、1570年（元亀元）義昭とともに宗麟に毛利氏との和平を勧めている。さらに、1573年（天正元）信長は義昭を京都から追放し、武力による天下統一を進め、毛利氏と敵対するようになった。そのような中、信長は1579年（天正7）に大友氏に周防・長門両国の支配権を与えるという朱印状を出し、島津氏と和睦するよう勧告している。これは九州で覇権を争っている大友氏と島津氏を和睦させた上で自己の勢力に取り込み、当時信長にとって最大の敵であった毛利氏を後方から包囲させる狙いがあったのである。信長にとって大友氏はぜひとも友好関係を結ばなければならない相手であった。

【豊臣秀吉】 豊臣秀吉とよとみひでよしは1585年（天正13）関白となり、名実ともに天下人に登りつめた。そして、その年の10月大友氏と島津氏に対し、同じ文面の書状を届けた。これは大友氏と島津氏の争いを天皇に背く行為とし、即時停戦を命じ、従わなければ秀吉により制裁されるという停戦令であった。

1578年（天正6）日向高城・耳川合戦で勝利し日向をほぼ掌中におさめた島津氏は、以後肥後を攻略し、筑後・筑前へ勢力を伸ばし始めた。1582年（天正10）ころの北部九州では肥前の龍造寺氏が台頭し、大友氏と勢力を争っていた。そこに第三勢力として島津氏が割って入り、1584年（天正12）島津氏は龍造寺氏を滅ぼし、筑後・筑前制圧を本格化させ、大友氏は窮地に立たされていた。秀吉の停戦令はこのような状況下で発せられた。

大友氏は停戦令の翌1586年（天正14）4月に宗麟自身が大坂にのぼり、これを受諾することを表明した。ちょうど大坂城が新築されたばかりで、宗麟訪問を喜んだ秀吉は自ら城内を案内し、この様子を宗麟は長文の手紙にしたため、国許に知らせている。一方、島津氏は秀吉が示した領土裁定案を不服とし、停戦に従わず、北部九州での攻勢を強め、大友氏本国豊後への侵攻準備を進めた。領土裁定案への返答期限が切れた7月、秀吉は当初の文面どおり島津氏「征伐」のための軍事動員令を発令し、9月には第一陣である四国の長宗我部ちゆうそ・仙石軍が豊後へ到着した。

従来、宗麟の秀吉との面会、四国軍の豊後派遣は、窮地に立たされた大友氏が秀吉に救援を求め、これを秀吉が受け入れた結果と説明されてきたが、秀吉による即時停戦、領土裁定を受諾しない場合の制裁という首尾一貫した天下統一のための停戦令に基づく軍事行動であった。

3. 宗麟と茶の湯

【数寄者宗麟】 戦国時代、茶の湯をたしなむことは、京都の公家や武家にとって必須の文化的教養であった。宗麟も遠く離れた豊後の地で茶の湯をたしなんでいた。1559年（永禄2）京都の公家久我晴通こがはるみちが宗麟に出した書状には「ぜひとも、あなたの茶の湯のお手前を一度拝見したい。必ず豊後へ下向したい」と記されている。当時宗麟は30歳、いつころから茶の湯を始めたのかわからないが、すでに茶の湯への傾倒ぶりが京都の公家にまで知れわたっていた。

また、1586年（天正14）4月、宗麟が大坂城に豊臣秀吉を訪問した際、秀吉が「宗麟は茶が好きか」と尋ね、千利休せんりきゆうが「なかなかの数寄者すきものです」と答えている。茶の湯という数寄者とは、茶の湯の心を理解し、道具揃えや茶席の設定でそれを表現できる者を意味する。宗麟の茶の湯は当時の第一人者千利休に「数寄者」と言わしめるほど優れていた。

【茶道具コレクション】 茶の湯をたしなむには茶席を飾る道具と絵画・墨蹟のコレクションが不可欠であった。『大友興廃記』には宗麟所持の茶道具が14点、絵画・墨蹟が19点記されている（資料編参照）。これらの内、現存しているのは新田肩衝（水戸・徳川博物館）、瓢箪茶入（大友瓢箪・上杉瓢箪、京都・野村美術館）、玉潤作の絵（「山市晴嵐図」、東京・出光美術館）の3点に過ぎないが、上記2点の茶入は「大名物」に格付けされ、「山市晴嵐図」は現在国指定重要文化財である。その他の茶道具・絵画も当時名だたる名品ばかりであったと思われる。

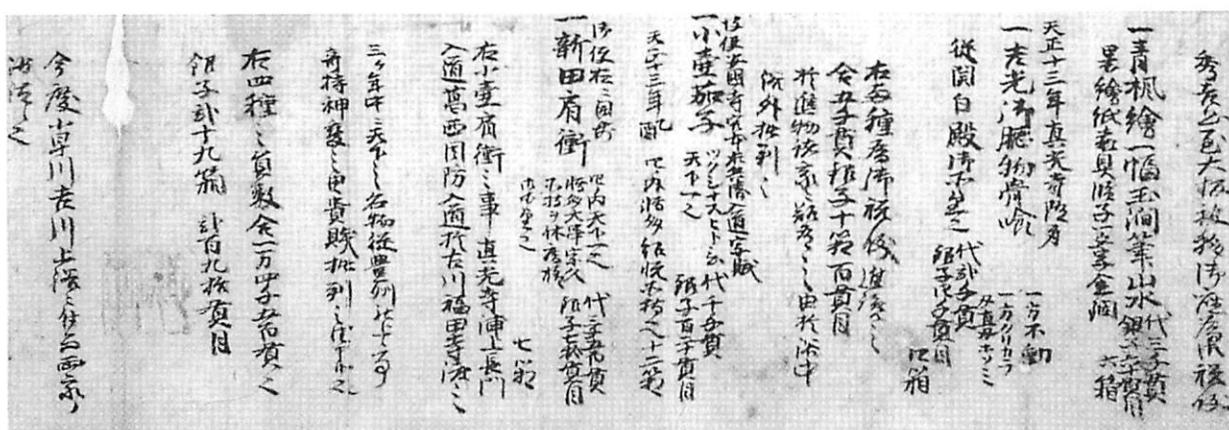
これだけの茶道具・絵画などを集めるにはかなりの財力と苦労が必要であり、信じられない逸話が残されている。その代表が瓢箪茶入である。この茶入は初め8代將軍足利義政の所持で、茶の湯の創始者村田珠光・武野紹鷗を経て、山口の大内義隆に伝わった。義隆は家臣陶隆房に滅ぼされ、大内氏には宗麟の弟義長（大友晴英）が養子に入った。1557年（弘治3）毛利元就が義長を攻めた時、元就は義長の処遇を兄宗麟に問い合わせた。ところが、宗麟は弟の助命を請わず、瓢箪茶入を望んだという。

名器となれば価格も高騰する。似たり茄子は初め銭100貫であったが、宗麟が博多の商人塩屋氏から購入した時は5,000貫であった。そして、宗麟が豊臣秀吉に売却した時の価格は6,000貫まで跳ね上がっている。

一方、いくら金を積んでも手に入れない名器もあった。宗麟は博多の島井宗室が持つ天下三肩衝の一つ檜柴肩衝という茶入が欲しくてたまらなかった。宗麟はこれも名器の誉れ高い志賀の茶壺に銀40貫（銭で2,000貫）を加えての交換を申し出たが、宗室は拒絶し、入手できなかった。

【散逸した茶道具】 宗麟が大金と労力をかけた茶道具コレクションであったが、大友氏領国が危機を募らせた1583年（天正11）以降徐々に手放さざるを得なくなった。

宗麟は豊臣秀吉が大坂城に移った祝儀として、玉潤作の青楓図、名刀骨喰藤四郎、小壺茄子（つくし茄子）、新田肩衝を献上したとされる。しかし、その覚書（松野家文書）には代価額が記載されており、実際は秀吉が大坂に移る前に、合計銭14,500貫文、銀にして290貫目で秀吉に売却されたのである。1585年（天正13）のフロイス書簡によれば、領国支配が弱体化し収入も減少したため、宗麟は有名な茶入を堺（大阪府）で売りに出し、秀吉が聞きつけ15,000クルザードで購入した。先の覚書では同じ年に小壺茄子が銭6,000貫、新田肩衝が銭3,500貫で秀吉に売却されており、フロイス書簡に見える茶入とは小壺茄子か新田肩衝のことであろう。一方、瓢箪茶入、志賀の茶壺、玉潤作の「山市晴嵐図」などは秀吉に献上され、宗麟の手元を離れていった。宗麟の茶道具・絵画コレクションの行方は現在ほとんどわかっていない。



秀吉公至大坂被移御座為御祝儀（大友松野文書 西寒多神社）

4. 宗麟とキリスト教

【ザビエル、府内訪問】

宗麟はキリスト教を熱心に保護し、自らも信者となったキリシタン大名として有名である。その第一歩は1551年（天文20）に山口にいた宣教師フランシスコ・ザビエルを府内に招いたことに始まる。宗麟は館でザビエルと面談、布教を許可し、宿舎を与えた。ザ

ビエルは2カ月足らずで府内を離れてしまうが、翌年ガーゴ神父一行がインドから到着し、布教を進めていった。宗麟は彼らにあらゆる援助を約束し、教会用の敷地を与えている。ここに1553年(天文22)6月ころまでに礼拝堂、宣教師の住む修院・大きな十字架・菜園・共同墓地からなる教会が建てられ、「わが慈悲の聖母の教会」と名付けられた。その場所は大友館の西側、「中町」から少し奥まった所で、現在の大分市顕徳町2丁目付近と推定されている。この教会を拠点に宣教師たちは、府内はもちろん豊後各地へ布教に赴き、次々に信者を獲得していった。宣教師の記録によれば1587年(天正15)豊後の信者は5万人を超えたという。同じ時期日本国内の信者数が30万人前後とされており、豊後の信者で約6分の1を占めていたことになる。

【宗麟の信仰】

熱心にキリスト教を保護する宗麟であったが、自ら信者となることは躊躇^{ちゅうちよ}していた。それどころか一方では、自らが創建した大徳寺瑞峯院^{だいたくじずいほういん}の住職怡雲宗悦^{いうんそうえつ}について禅を学び、1562年(永禄5)入道して宗麟と号した。さらに、1571年(元亀2)には宗悦を開山として招き、白杵^{じゆりんじ}に寿林寺を創建した。キリスト教の保護と禅宗への傾倒という矛盾した行動は、後に洗礼を受ける直前に宗麟が語ったことによると、心の平安を得るため「多額の費用を投じて寺院を創建し、京都から僧を招いて学び、長年禅宗が説く黙想を実践したが、その深遠に入れば入るほど秘儀が浅はかであることに気づき、心は乱れてしまった」とある。キリスト教に親近感を覚えながらも、精神の安定を禅宗に求めたが、結果が得られず、キリスト教こそが自分の宗教だと信じるにいたったのである。



怡雲宗悦画像(大徳寺瑞峯院)

【宗麟の受洗と軋轢】

1578年(天正6)7月、宗麟は白杵の教会で洗礼を受け、キリスト教信者となった。洗礼名はフランシスコ、初めてその教えを聞いたザビエルにちなんで、自ら選んだ。そして、10月新天地日向でキリスト教理想国家を建設すべく、海路白杵を出発し、日向国無鹿^{むしか}(延岡市)に本陣を構えた。しかし、11月大友本隊が高城合戦で大敗すると、宗麟も命からがら豊後へ帰ってきた。これ以後、大友氏は島津氏の軍事的攻勢の前に窮地に追い込まれていった。戸次鑑連は1580年(天正8)の大檄文の中で、大友氏領国内でキリスト教信者が増加し、寺社を破却し、仏神を川に投棄するなど敬わなくなったから天罰が下り、領国が衰退し始めたのだと、暗に信者となった宗麟を批判している。寺社破却などの行動は宣教師たちの書簡にも記されている。宗麟の周囲に、九州きっての名門武家の当主がキリスト教という外来の宗教の信者となったことを快く思わない人々が多くいたことは事実であろう。

豊後におけるキリスト教の隆盛は、宣教師たちから「日本最大の庇護者」と称された宗麟の存在抜きには語れない。1587年(天正15)5月、島津義久^{しまづよしひさ}が豊臣秀吉に降伏し、九州の戦国時代に終止符が打たれたのを見届けるかのように、宗麟は5月23日津久見で病死した。直後の6月豊臣秀吉がバテレン追放令を発し、キリスト教禁圧が始まるのは、偶然とはいえ歴史の皮肉のようである。



大友宗麟の「FRCO」朱印
(国立歴史民俗博物館)

II 府内の館とまち

1. 大友館

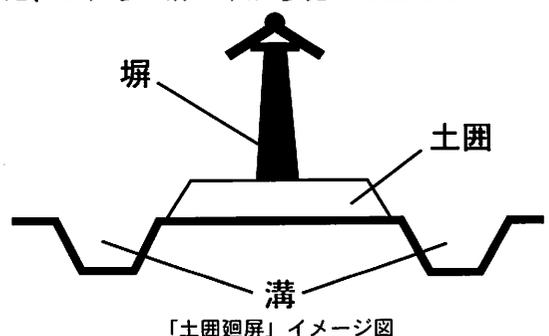
大友館の建設

大友館は、府内のまちのほぼ中央に位置している。府内古絵図に描かれた時期、すなわち天正年間（1573年～）には、一辺約 200m 四方（方二町）の方形の館に整備されていたことが発掘調査の成果により明らかとなっている。「府内古絵図」には館東辺にふたつの門が描かれ、調査では館東南部分で巨大な庭園跡が発見されている。これらのことによって大友館は当時としても日本最大級の規模をもっていたと推測される。大友館の建設は、大友宗麟が北部九州六カ国の守護権を得、支配地の拡大に加え、貿易による莫大な利益により繁栄の極みをむかえた時にはじめられた。このように宗麟の栄華と権威の粋を集めて造られた巨大な大友館は、息子義統への家督相続にあたり建設したものであった。

【調査結果から想定される館の整備時期】 館が一辺約 200m 四方（方二町）の規模に整備された時期は、出土する土師器をはじめ、備前焼、瀬戸美濃製陶器、中国製輸入陶磁器などの年代観から 1573 年（天正元）前後であると推定される。館正面（東側）の南北道路もほぼ同じ時期に整備されており、さらに時を置かず、その東側に「桜町」等の町屋が造られたと考えられる。調査では土取り穴と考えられる大形の掘り込みが確認されており、「桜町」はこの掘り込みを改めて埋め戻した後に造られている。土取り穴は出土した土師器から館の整備時期に極めて近い時期に掘られたと推定され、館の整備に関連する可能性も考えられる。

【「土圀廻屏」の普請とその築造年代】 大友氏が豊後国内の武士達に対して「土圀廻屏」の普請を命じた文書がある。差出人は宗麟、義統、加判衆とそれぞれ異なるが、同様のものが 6 点ほど確認できる。それらの文書に共通することは、諸郷庄に申し付けた普請役であり、本来こうした臨時の役を免除された武士に対しても例外なく命じられている点にある。このことから、「土圀廻屏」の普請が大友氏にとって特別な意味をもつ工事であったことが分かる。そして上記書状のいずれもが、この普請に関わって出されたものと考えられる。その中で唯一、義統が出した文書は、花押の形状から 1573 年（天正元）に比定ができ、「土圀廻屏」の普請が同年に行なわれたことが知られる。

【「土圀廻屏」とは？】 豊後国内の諸郷庄に課す普請のあり方から、それは大友氏の中核的施設に伴うものとみられる。近年の発掘調査で、これに類するような施設の跡が大友館の調査で確認されている。館の外周には幅 1.5～2.0m の平行する 2 本の溝による区画が北辺、西辺、南辺において確認されており、北辺では、幅約 4.0～4.5m の 2 本の溝に挟まれた空間に粘質土と砂質土を交互に積み上げた土層の堆積を確認でき、土塁等の施設の存在が想定される。また、これらの溝の中から焼けた土壁片が多数発見され、館外周に土壁が使用されていたことを窺い知ることができ、しっかりとした土台を築いた上に土壁づくりの塀が館の南辺・西辺・北辺にかけて廻る様子が想定される。上記文書に記された「土圀廻屏」の普請とは、おそらくこの施設の築造を意味するものと考えられる。「土圀廻屏」をめぐる一連の史料をみると、数週間の差をもうけて植田庄、安岐郷、笠和郷、荏隈郷、直入郷、佐賀郷の諸郷庄に出されており、



普請にあたって郷や庄を単位に工事を分担し進められていったとみられる。

【大友館の完成時期】

大友氏が「土圀廻屏」の普請を命じた文書で義統の発給のものをみると、「この度の事、馳走肝要」と自身の命令を伝える表現がなされている。この文書が出された1573年(天正元)は、義統が父宗麟から家督を譲られたとする年で、まさに本文書は大友家の当主としての立場で出された内容といえよう。これに対して、加判衆の発給のものは「御所望のため御馳走」として、大友家当主すなわち義統の望みのためとある。宗麟発給のものも「この度の事は所望のため、直に馳走悦」とあり、「御所望」と「所望」の表現の違いはあるが、同じく息子義統の望むところという意味で出されている。「土圀廻屏」の普請を命じた義統は当時15歳の少年であり、当主の立場にあるものの、実際の政務は宗麟の後見のもとに行なわれたと思われる。こうした政治状況下、「土圀廻屏」の普請も行なわれた。恐らく宗麟の主導のもと、新国主の義統のため、宗麟の威信を示す今までにない大規模な大友館の建設が進められ、「土圀廻屏」はその最終段階の工事であったと考えられる。

1571年(元龜2)5月、宗固なる人物が中江周琳に宛てた書状によると、同年公卿の久我晴通が大徳寺怡雲宗悦、薬師の吉田牧庵、絵師の狩野永徳、金工の後藤徳乗といった「めいじん(名人)」らを同行して豊後へ下向しており、その目的の一つに当時建設途中にあった大友館の襖絵や飾り金具などの製作があったのかも知れない。

ところで、大友義統が税所氏に宛てた書状によると、「東の築地」から外通りにかけて町人を召移すように指示したものがあつた。これは義統の花押の形状から1575年(天正3)から1579年(天正7)ころのものと考えられ、館の正面玄関となる「東の築地」が遅くとも1574年(天正2)から1578年(天正6)の段階には完成していたものと考えられる。「東の築地」が完成した後、その外通りに町人が移されて出来た町が「府内古絵図」に描かれている「桜町」・「御内町」などに想定され、当該地の発掘調査の成果に基づく町の成立の年代とも照合できる。

【館の附属施設】

8月1日、方々から支配地の武士が贈答のため大友館にやって来た。下位の者が上位の者へ贈物をする「八朔」という儀礼で、使者を通して太刀や馬が大友氏へ献上されている。これに伴い近年「馬立所」が混雑し、宿老らに対応に困惑している状況が「作法日記」に語られている。馬立所とは武士達が乗って来た馬をつなぐ所と考えられ、ここが大変混雑しているということであろう。『大友興廢記』の「大友家政道之事」によると、「大手門」から館の中に輿や馬で乗り入れることができるのは志賀・佐伯・田村・臼杵の四家のみとされており、また、「作法日記」には由原(柞原)八幡宮の宮師が参賀のため塗輿で館の大門の前まで参るという記述もあることから、前の四家以外の者は館の外に輿や馬を留め置く必要があつたとみられる。近年の発掘調査では、大友館の大門があつたと考えられる正面には幅約10mの空閑地(空地)が確認されており、「作法日記」にある馬立所などに利用されていた可能性がある。

【大友館の終焉】

「府内古絵図」に描かれた館は1586年(天正14)の島津氏侵攻時に焼失した。その後再建されることはなく、館敷地の一部は町屋となっていたことが発掘調査の結果から明らかとなっている。館の再興が果たされなかったのは、キリスト教宣教師の記録にみえる、大友氏が1578年(天正6)の高城・耳川の合戦以後、茶道具名物を売却せざるをえないほど弱体化していた点などがその理由として考えられよう。また、宣教師ガスパル・コエリュの書簡によると、1582年(天正10)に万寿寺が全焼し、宗麟の助言によって同寺の収入を義統が貧しい兵士たちに分け与え、その土地も一人のキリシタン武士に与えられたとある。ルイス・フロイスはこの事件を、高城・耳川の合戦の敗戦で九州の四カ国の支配を失い困窮していた大友義統が密かに火を放たせ、戦場で自分に仕えた貧しい武士にその収入を分け与えたと記している。

大友館での行事

「作法日記」には、府内の大友館で行なわれた行事や儀式のことが毎月のように記されている。その行事の動きを表に示す。ここでは行事の内容についてすべてを紹介しきれないが、その主なものをみると、まず、正月参賀では、地位や役割によって参賀の順番や日時、対面する場所が分けられていた。参賀の対応は15日まで続いたが、諸侍に対しては「出頭」や「着到」として扱われており、なかば参賀は義務化されて大友氏への恭順の意を確認する機会としても利用されていた。また、豊後の諸郷庄に対して大友氏は行事や儀式に必要な椀飯（食料など）を提供させている。1月1日は直入郷が調べ、2日は緒方庄が、3日は高田庄が調べている。7日には笠和郷、15日には山香郷、3月3日の上巳の節句(桃の祝い)には宇目村、5月5日の端午の節句には緒方庄が調べている。こうした諸郷庄を行事に奉仕させることで、大友氏はその支配関係を意識させ恒常化していったものといえよう。

「作法日記」にみえる大友館の主な行事

月日 (旧暦)	行事の内容	月日 (旧暦)	行事の内容
12月31日	・大歳の夜納 (正月祝物の飾りつけ)	1月16日	・評定始 (仕事はじめ)
1月1日	・せんす万歳 ・対面 (年寄衆・親類衆など) ・諸侍が参賀に訪れる (この日より15日まで) ・祝三献 ・謳初	1月19日	・簾中かた節 (婦人方の祝い日)
		1月20日	・犬追物
		1月29日	・大おもて節 (大おもての祝い日)
		3月3日	・草餅を着に飲食 (上巳の節句)
		3月10日頃	・方々の狩
1月2日	・馬乗初 ・船乗初	5月5日	・粽を着に飲食し、軒に菖蒲や蓬を飾る (端午の節句)
1月3日	・対面なし (赤日にあたるため対面をさける)	6月15日	・祇園会
1月4日	・諸寺家衆らが参賀に訪れる	6月28日	・御祓
1月5日	・簾中方へ宿老・間次衆の使いが参賀	7月7日	・七夕 (七夕の節句)
1月6日	・鬼のまめ (豆まき) ・方違	7月8日	・生見の祝 (生身魂の祝い)
		7月12日	・大風流 (12. 26日の両日)
1月7日	・由原宮師が参賀に訪れる ・白馬が大門より参る	7月14・15日	・先祖供養 (盂蘭盆)
		8月1日	・八朔規式
1月9日	・対面なし (赤日にあたるため対面をさける)	8月8日	・秋あわせ (衣替え)
1月11日	・吉書 ・斧立 (惣大工) ・正月の祝い飾を取り除く	8月14日・15日	・放生会
		8月15日	・名月祝 (お月見 9月13日も同様)
		9月9日	・菊酒の飲酒 (重陽の節句)
1月13日	・蔭山へ行初	10月亥の日	・亥の子 (新穀でついた餅を食べて祝う儀式)
1月14日	・花のおこない (由原から花が献上される)	12月13日	・評定おさまり (仕事納め)
1月15日	・歳男参上 (歳男の勤役を解き盃を給う)	12月27日	・煤払い

注 行事名については、文中の言葉をできるだけ採用したが、それだけで意味がわからないものはその内容を要約して記した。また、() で補足説明を行なった。

【様々に利用されるかわらけ】

大友館跡から多くのかわらけ (素焼きの土器) が出土している。儀式に用いられるかわらけは、通常一度使われると二度とは使用されずに棄てられた。館跡から大量に出土するかわらけの多くは、こうした儀式や祝宴に用いられたと考えられている。しかも、大友館跡や府内のまちから出土するかわらけは、手びねりにより作られた京都のかわらけを真似たものが多い。「作法日記」によれば、館には酒奉行という役職が置かれ、酒をともなった儀式・祝宴が頻繁に行なわれていた。また「作法日記」には、儀式の道具としても利用されている様子が記されている。まず正月飾においては、かわらけを一重ねにし、上のかわらけに米を入れ、下のかわらけには裏白 (シダ) が下に敷かれた。同様



大友館跡での「かわらけ」出土状況



様々な大きさの京都風の「かわらけ」

に一重ねにした上のかわらけの上に梅干を入れ、新しいまな板の上に乗せるとある。また、正月の祝膳に飯を盛るための道具としても利用されている。8月15日と9月13日の名月祝いには、かわらけ一つに御酒を入れ、別のかわらけに新米を入れて供え、芋も別のかわらけに入れて供えられた。年末には一年間に灯すための油代が公文所から支払われているが、その油を灯すための灯明皿としても利用された。発掘調査でも酒盃や灯明皿として使用されたと考えられるかわらけや供えものを盛った大型のかわらけ（皿）をはじめ様々な大きさのものが出土している。

大友館の施設

【大おもて】 「作法日記」によると、「大おもて」の中に鎧や魚・昆布・餅・

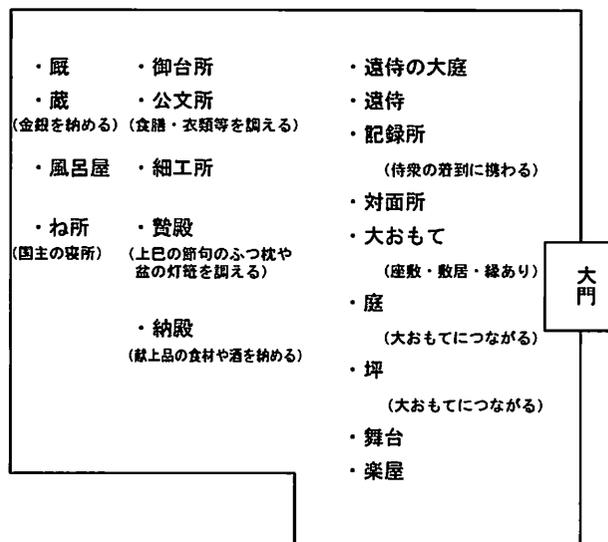
栗などの正月の祝い飾が据えられている。特に1月29日の「大おもて節」の祝いでは多くの武士がここに列席し儀式と会食を行っている。この「大おもて節」の祝いでは一番座・二番座・三番座の3つの座が設けられ、当日500人分の膳が用意されている。一番座では、宿老・聞次ききつぎの主だった武士200人程が一同座敷に会して、式三献しきさんこん（酒盃を三回まわす）などの儀式を執り行っている。また、二番座では一番座を除く武士たちに対して、三番座では「間々の番衆ままばんしゅう」や与力といった館に勤務する武士に対して同様に座が設けられており、三番座においては「遠侍とぞむらい」を会場に行ったとある。二番座の場所について何ら記載はないが、一番座の式三献の儀式が終わった後に能一番が演じられ、これを二番座・三番座の者たちも一緒になって観賞している状況が読み取れ、二番座も三番座と同様に、一番座の座敷とは別の場所で行なわれたと思われる。ただ、二番座の給仕を一番座の者がするということなので、間続きか、あるいは別棟であったとしても極めて近い場所であったと考えられる。一番座の会席者が200人ほどなので、当日用意された膳の数から二番座と三番座で300人ほどが出席したことになり、「遠侍」の三番座を除いても、「大おもて」には1度に200人以上を収容できる大きな座敷に加えて、その近く、あるいはその内部に同規模の人員が収容できる施設があったと考えられる。なお、「大おもて」には、縁えんが備わり、庭や坪と接し、そこからさほど遠くない距離に舞台があったようである。

【その他の施設】

1月7日の祝日に、由原の宮師が塗興で「大門」の前まで来て参賀を行なったとある。同日夜には、吉祥を意味するものか、白馬がこの門から入れられている。1月14日には由原から花が献上される儀式が行われているが、やはりこの門から献上の花が届けられている。「大門」は館の正門（礼門）とみられ、門を入ると、遠侍の建物や大庭があったようである。蔵には金銀が納められていたようで、それを取り扱う侍1人と局つばね（女官）1人の両者立会いのもとで、正月の蔵ひらきが行われている。また、舞台では能や猿楽さるがくなどが演じられた。

なお、「當家年中作法日記にみえる大友館の施設」の図中に示した施設のすべてが独立した建物であるのか同一建物の中にあるものなのか判断できないものもある。

「當家年中作法日記」にみえる大友館の施設



注 施設のなかに「よろひ門」があるが、場所ははっきりしない。また、大おもての座敷の中には、「御前」・「次の間」とよばれる座敷が二間つづきであったようである。

【館の発掘と建物】 「作法日記」にみえる館内の建物には「大おもて」などかなり規模の大きなものがあつたと推定され、戦国時代末期にあつて、そこには江戸時代の大広間や御殿を彷彿とさせる姿も考えられる。館の中核部と考えられる場所で発見された根締石ねじめいしの規模から想定される大友館の礎石そせきはかなり大きいものであり、「作法日記」の記載内容との関連が注目される。また、館東南部で発見された巨大な庭園跡は、回遊式庭園を思わせる規模と配置を示しており、こうした点にも当時の最先端の建物構造をいち早く取り入れたと考えることができよう。

【館に勤める人々】 「作法日記」によると大友館には、様々な人々が入り出し、それぞれの役割を果たしていた。その筆頭が宿老で、領国支配の重要事項を決定するため館に集まり、合議を繰り返していた。ここでの決定内容を大友家の当主に伝えたり、その意向を宿老に伝達したりする間次が置かれていた。また、当主が出す公文書を作成する右筆ゆうひつや、食事・祝宴を取り仕切る椀飯奉行・酒奉行、寺社の取次ぎを行う寺奉行・社奉行、御台番・蔵番といった建物施設の勤番に携わった者たちも館に詰めていた。その他、座敷などの室内飾りに関わった同朋衆どうほうしゅうや猿楽衆といった芸能集団、中間衆・御厩衆など雑事や馬の世話に関わった者たちもいた。さらには当主の妻子に仕え奥向の仕事に携わった局・女房衆・女中などもいた。館に勤める侍たちは、基本的に館の外に屋敷を有して交代で勤務に当たっていたものとみられる。また、桶結御作おけゆみつくり・塗師御作ぬしみつくりといった館で使う桶や漆器の製作に携わる職人、土器作どきつくりといった儀式で使ういわゆるかわらけを作る職人なども抱えていたことがうかがえる。

「作法日記」にみえる大友館に関わる人々

役職名	備考	役職名	備考
宿老衆		覚悟衆	
間次衆		賛殿衆	
椀飯奉行	人員5人	伽衆	
酒奉行	人員3人	小納殿衆	
寺(家)奉行		中間衆	対面は数居の外
社奉行		別當	馬に関わる
申次		御厩衆	対面は数居の外
内証の衆		力	
右筆衆		執當	対面は数居の外/諸事切盛り
(奥の)蔵番衆	人員3人	兄部	
御台番衆	人員6人	局	一の台局あり
おもて番衆		女房衆	
おくの番衆		女中	宿老・間次衆・公文所女中あり
間々の番衆		惣大工	館の建物に花をかざる。(由原宮や祇園宮の音頭に関わる)
宿老の与力		桶結御作	対面は数居の内
公文所の与力		匠(工)御作	対面は数居の内
猿楽衆		塗師御作	対面は数居の内
同朋衆	間々の火を扱う	土器作	

注 役職名については「作法日記」の表現のまま記した。

「作法日記」にみえる行事に関わる臨時の役職

役職名	行 事	備 考	役職名	行 事	備 考
祝物番衆	大歳の夜	蔵番がつとめる	猪奉行	方々の狩	
奉行	円寿寺僧衆の接待	奥の番衆がつとめる	鹿木奉行	方々の狩	
奏者	1月15日の祝	内証の衆一人に申付ける	侍屋奉行	方々の狩	
膳取次	1月15日の祝	後に御台番を申付ける衆に申付	棧敷奉行	祇園会	
奏者	評定始め	間次に申付ける	番衆	(孟蘭盆)	灯笼の屋の番
奏者	大おもて節	御台番衆、分限通之衆へ申付ける。	奉行	(孟蘭盆)	灯笼に火を灯す。奥の番に申付ける。
政道奉行	大おもて節		判紙奉行	八朔	
狩奉行	方々の狩		太刀奉行	八朔	
猪鹿奉行	方々の狩		八朔奉行	八朔	
法式奉行	方々の狩		政道奉行	放生会	6、7人申付ける
勢子奉行	方々の狩		畳奉行	煤払	近辺の若き衆5、6人に申付ける

2. 府内のまち

【府内のまちの規模】

「府内古絵図」に描かれた府内のまちには、大友館を中心に道路が東西南北に格子状に配置され、その道路に沿って40あまりの町が形成されていた。その規模は『大分市史』中・付図「戦国時代の府内復原想定図」によると、南北約2.1km、東西約0.7kmの範囲におよぶ。「府内古絵図」には、1581年(天正9)ころの創建と伝えられる善巧寺ぜんぎょうじが描かれている。また、古絵図に描かれた大友館が、1586年(天正14)の島津氏侵攻による府内焼失後に再建されていないことが発掘調査結果から明らかになっていることから、「府内古絵図」に見える府内のまちの姿は1581年(天正9)ころから1586年(天正14)までの様子を描いたものと考えられる。加えて永禄年間(1558年～1569年)に府内のまちから沖の浜に移転した称名寺しょうみやうじが記載されていない点などもこの古絵図の年代観を裏付ける証拠となる。平成10年度から本格化した府内のまちの発掘調査では、「戦国時代の府内復原想定図」において想定した場所とほぼ同一地点で道路跡や町屋跡などが確認されている。発掘調査の結果から判明する府内のまちの姿は、武家地と商家が混在する「洛中洛外図屏風」に描かれる戦国時代の京都の町に似たものであったことを示している。

宣教師の記録によると、戦国時代末期の日本を代表する都市である「堺」「大坂」「安土」と同じように「府内」も扱われている。

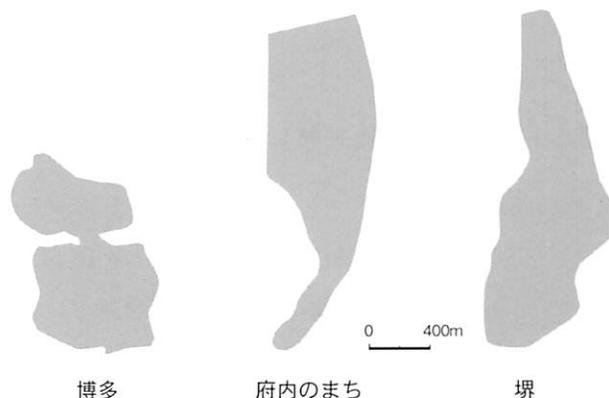
【府内のまちの構造と変遷】

これまでの発掘調査の成果等を参照すると、府内のまちの4本の南北道路のうち、東側の南北道路の築造年代が最も古く、15世紀中頃には造られていた可能性がある。万寿寺は、この道路が造られる前に建てられており、南北道路は万寿寺との関係の中で整備されたものと考えられる。次いで整備されたと考えられるのが、府内のまちの最も西側の南北道路である。今のところ15世紀後半～末頃には道路として整備されていたことが想定されるが、今後の調査の進展によってはさらに遡る可能性もある。最末期に館正面に通された南北道路の造られた時期は、大友館の整備とほぼ同じ1573年(天正元)前後であり、府内のまちの道路では最も新しい。すなわち、15世紀後半から16世紀中頃の府内のまちは最も大分川寄りの南北道路と西側の南北道路を基軸に構成されていたのである。この段階に両道路を繋ぐ動線として、古川町を貫く最も北側の東西道路が造られていた可能性が考えられるが、現状では発掘調査による検証はおこなわれていない。もう一本南側に位置する「西小路町」「横小路町」を通る東西道路は、発掘調査により16世紀前半ころに造られたことが判明している。したがって、府内のまちは先述の2本の南北道路を基軸としながら、徐々に新たな道路の施工がおこなわれ、最終的には天正元年前後の大友館整備を契機とする、新たな南北道路の敷設と町屋の配置を伴う府内のまち中央部の改変をもって、

「府内古絵図」の姿へと変貌していったと想定される。

【府内のまちの特徴】

商業貿易都市として栄えた「博多」・「堺」、城下町として発展した「安土」・「大坂」。これらは当時の大都市である。また、当時の府内のまちと「堺」・「博多」のまちの広さを比べると、府内のまちは堺とほぼ同規模であり、博多よりも広い。府内のまちは、奈良時代以来の国府が置かれた地に造られ、守護大名から成長した戦国大名の拠点として発展した。府内のまちの特徴は、戦国大名の館を中心とするまちと商業貿易都市が融合した都市という点にあり、いわば戦国大名の館を中心に発展した都市である「山口」に「堺」、「博多」の要素を兼ね備えた都市であったと考えられる。



府内のまち・「博多」・「堺」町の面積比較

【府内の混乱と焼亡】

南蛮貿易により隆盛を極めた府内の都市も、島津氏の侵攻により焼亡する。宣教師の記録によると、島津氏の脅威が迫る1586年（天正14）12月、府内では国主大友義統が府内の住人に家財道具の持ち出しや避難を禁じていた。勝利を確信しての沙汰か、あるいはパニックを恐れてのことか定かでないが、大商人などの一部の富豪層は賄賂を駆使して財産の大半を持ち出していた。こうした中、島津氏への敗北を察した義統等が、住民になんの通告もせず府内を逃走したため、府内のまちは大混乱に陥った。あるものは船で避難し、他の者は死に物狂いで山中に逃れたが、敵に捕虜として連行された人々も甚大な数にのぼった。島津氏の侵攻により、府内のまちは焼失した。当時の貿易港であった沖の浜も焼け落ち、火災はますます拡大し、府内のまちは夜通し燃え続け、三寺院以外はすべてが焼きつくされたという。

こうした府内のまちは焼きつくした火災の痕跡は、発掘調査によりいたるところで確認されている。当時の「横小路町」にあたる町屋跡の発掘調査では、備前焼の大甕10基を地中に並べた甕蔵跡が発見されている。ここでは島津氏の侵攻による火災の後片付けの痕が確認されており、焼け落ちた蔵の中には、国産のものに混じり、多くの中国・朝鮮半島・東南アジア産の陶磁器が火を受けた状態で発見されている。また、当時の「桜町」で調査された礎石建物跡でも多くの陶磁器が火災にあった状態で見つかっている。これらの中には優品も多く、急な避難の必要からそのまま残されたと考えられる。

その後府内のまちは復興を遂げるものの、1593年（文禄2）の大友氏の豊後除国後、江戸時代初期には府内城（現城址公園）を中心とする近世城下町にまちは移転させられ、大友氏によって造られた府内のまちは終わりを迎えた。

3. 南蛮貿易

【南蛮貿易】

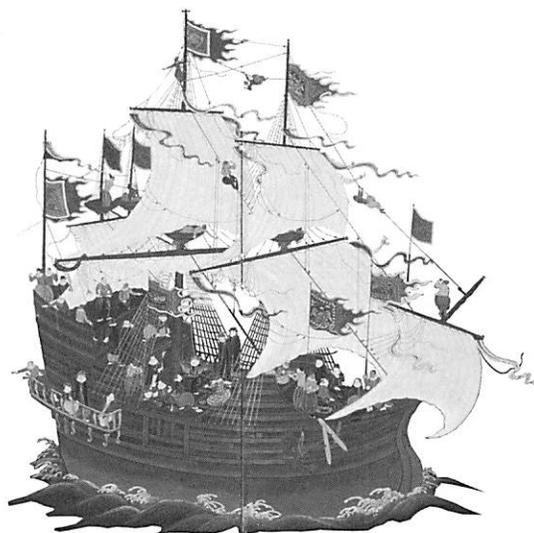
南蛮人と呼ばれたポルトガル人、スペイン人との貿易を「南蛮貿易」という。1543年（天文12）、種子島にポルトガル人が同乗した中国船が漂着し、火縄銃を売ったのがきっかけとなり、貿易が開始された。その後ポルトガル人との貿易に伴いフランシスコ・ザビエルをはじめとするイエズス会の宣教師を受け入れるようになった戦国大名があらわれた。その代表的な例が大友氏である。

主な輸出品には生糸・絹織物・鉄砲・硝石・砂糖・薬品・ガラス製品・望遠鏡・時計・ワイン・インド産更紗・木綿・水銀・鉛・砂時計・革製品・菓子などのビン詰・伽羅などの香木類・コショウなどがあり、主

な輸出品には銀・硫黄・刀剣・海産物(フカヒレなど)・漆器・指物類さしものなどがあつた。なかでも硫黄は15世紀後半の日明貿易でも輸出品として大友氏から出されており、刀剣類は「日本一鑑」にも豊後の特産品として記載されている。

【ポルトガル人の豊后来航】

宗麟がキリスト教へ入信する直前にキリスト教宣教師に対して昔のことを回顧した話によると、ポルトガル人が初めて府内へ来航したのは、自分が16歳(数え年)のときと語っている。宗麟は1530年(享禄3)の生まれであることから、それは1545年(天文14)のことになる。このとき中国のジャンク船に乗ってポルトガル商人6、7名が府内に近い港に入港したとある。府内に近い港とは、当時府内の外港であった沖の浜港のことと考えられている。以後、1551年(天文20)にポルトガル船が直接府内に来航し、その後数回に渡って来航したことを記録の中で確認できる。



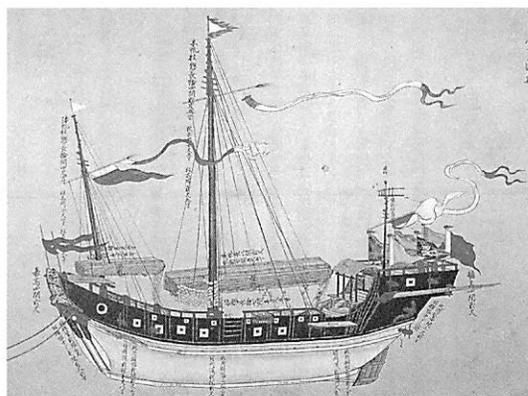
南蛮船(南蛮屏風 神戸市立博物館)

【南蛮船のルート】

中国(明)船は、1541年(天文10)ころから府内へ度々来航するようになっていた。そうした中国船の府内来航の具体的な事例に、中国の使節として大友宗麟のもとへ派遣された鄭舜功ていしゅんこうがある。彼は1555年(弘治元)に広州を立ち、琉球を経て九州の東海岸を北上して豊後に至っている。彼が帰国後に著した「日本一鑑」にはその海上ルートは夷海右道いかいどうと名付けられ、硫黄島、屋久島、種子島、さらに鹿児島県・宮崎県・大分県の諸港の高島・坂関(これとは別に佐嘉関という島があるが、同じ場所か)などを経て澳浜(おきのはま)に到着したとある。それから馬に乗り、府内の大友宗麟のもとを訪ねている。澳浜から府内までは陸路5~6里(中国の里で計算すると約2km)の距離と記されている。この3年前の1552年(天文21)、中国の港を出航し府内に来航したガーゴ神父一行の船も同様に種子島を経由し九州の東海岸を北上するルートをとっていた。日本へ向かう中国船やポルトガル船の多くは、初夏から夏にかけて吹き始める南西からの貿易風を利用し、帰りには秋ころに吹き始める北からの季節風に乗って航海したが、ちょうどこのころは台風シーズンにもあたり危険がともなった。このこともあり、ポルトガル船の多くは距離が遠く危険も多い夷海右道のルートよりも距離が短くリスクが少ない西九州の港へ寄港するようになり、1562年(永禄5)当時日本布教長であったトルレス神父が活動の拠点を横瀬浦(長崎県)に移したのを契機に豊後へのポルトガル船の来航は途絶えてしまった。

【中国・明、朝鮮国との貿易】

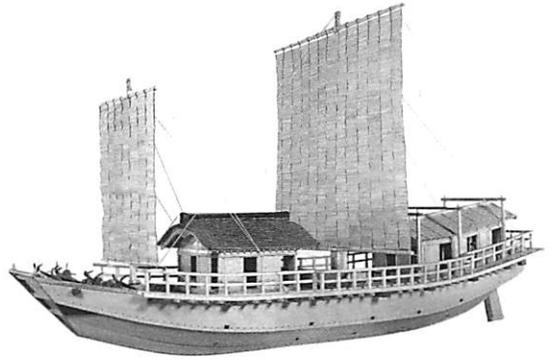
日本と明との貿易は、足利将軍を主体とした遣明船による勘合貿易が1401年(応永8)から1547年(天文16)までの約1世紀半にわたって19回おこなわれた。大友氏は15代親繁ちかしげの時にこの日明貿易に初めて参入している。以後、船数や乗員の制限によって正式には派遣に加わっていないが、幕府の命によって貿易品である硫黄の調達や船の警固をおこなっている。なお、最後の遣明船派遣がおこなわれた1547年(天文16)の第19次以降、大友氏は独自に対明交渉を行い、実際に義鑑(20代)や宗麟(21代)が大型船を派遣し、貿易の再開を図つたとされている。



寧波船(唐船絵図 松浦史料博物館)

このあたりの事情は「日本一鑑」や『明世宗実録』の中にも1557年(弘治3)に義鎮(宗麟)が僧徳陽を派遣して来貢させたことや義鎮が大型船を建造し、僧善妙ら40人の使節を派遣して、中国商人王直と同伴させ貿易しようとしたことなどが記されている。

朝鮮国は中国・明と同じように海禁政策をとっており、形式的に朝貢貿易だけを認めていた。そのため、日本からは使節派遣という形で貿易が行われた。この朝鮮国と大友氏の貿易は、1429年(永享元)、大友持直(12代)により始まる。持直は、博多の大商人を介して使節を派遣し、活発な貿易を展開した。しかし、15世紀後半以降の貿易は、博多の支配権をめぐり、九州探題渋川氏、少弐氏、大内氏との抗争が続いたため不安定であった。その後、博多の支配権をにぎった大内氏の滅亡後、毛利氏との抗争をへて戦国時代末期には宗麟が博多の実権をにぎり比較的安定した貿易がおこなわれたとみられる。府内のまち跡から出土する戦国時代末期の朝鮮半島産陶器、茶碗などはこうした状況を示しているものと考えられる。



遣明船模型 (広島県立歴史博物館)

【外国人の居住】
戦国時代の府内のまちには、ポルトガル人宣教師や商人ばかりでなく、多くの外国人が逗留、居住した。岡山県の餘慶寺にある梵鐘には1571年(元亀2)に中国浙江省の台州府の慮高と温州府平陽県の陽愛有という人物が「大日本国九州豊後国大分郡府中今小路惣道場」にこの梵鐘を寄進した内容の銘が彫られており、中国東南岸地域からきた人々がいたことを示している。また、豊臣秀吉の方広寺(京都市)大仏造立の際に漆喰塗りの技術をもつ仏師として活躍した中国系技術者である陳元明の祖父にあたる覚明が1515年(永正12)に豊後国府内に居住し、その後、1588年(天正16)に臼杵唐人町に移住するまで、元明の三代にわたり府内に居住したと同氏の系図は伝えている。さらに、「天正16年参宮帳」(伊勢参宮者名簿)の中には、1589年(天正17)の府内唐人町に「ゑんはい」「けんさん」の名がみえ、1591年(天正19)には「ふくまん」等の中国の人々と考えられる名前を確認することができる。また、遺跡から出土する遺物の中には、中国南部で焼かれた陶器播鉢を散見することができる。当時、夥しい量の備前焼播鉢が府内のまちに流通しており、こうした中国産の播鉢をわざわざ商品として府内に輸入する必要はないことから、府内に居住した外国人の生活用具として持ち込まれた可能性が高い。府内のまちから出土しているタイ産のクンディ(水差し)も同じような理由で持ち込まれたと考えられる。これらは外国人の府内居住を示す証拠のひとつといえるだろう。

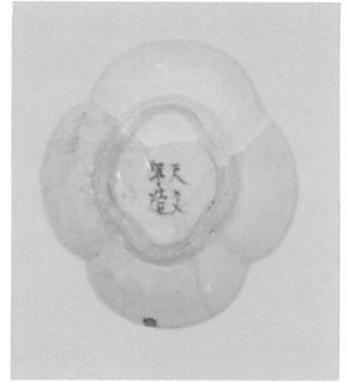
【南蛮貿易を具体的に示す出土遺物】
府内のまち跡からは、南蛮貿易の実像を具体的に示す中国、朝鮮半島や東南アジア産の陶磁器が大量に出土する。出土する東南

アジア産陶磁器の原産国にはタイ、ベトナム、ミャンマーがあり、ポルトガル船や中国船などが持ち込んだものである。まち跡から出土する中国や東南アジア産の陶磁器には、茶の湯などに使用するために器そのものが商品として輸入されたものがある他、商品としての内容物を運搬・貯蔵するための容器として持ち込まれたものもある。東南アジア産の多くの陶器壺は、火薬の原料となる硝石や当時極めて貴重であった砂糖などの容器として府内にもたらされたと考えられる。



【「天文年造」銘の木瓜皿】

府内のまち跡からは、底面に「天文年造」と書かれた型作りによる木瓜形^{もっこう}の中国製の皿が出土する。「天文年」は日本の年号であり、中国への注文品と考えられており、府内の他、堺などでも出土が確認されている。1556年（弘治2）の約半年間、宗麟のもとで豊後に滞在した鄭舜功の「日本一鑑」には、「悪徳中国商人が通訳などを介して、貿易にきた日本人と交渉し、資金を得て、景德鎮に行き、陶磁器を買い、その底に日本の年号を入れさせて暴利を得ている。」とあり、この木瓜皿のことを指していると考えられる。同種の皿は府内近郊にある尼ヶ城跡^{りょうご}（永興）からも出土している。



尼ヶ城跡出土木瓜皿（大分市教委）

【鉄砲と大砲】

南蛮貿易を代表する輸入品に火縄銃がある。1556年（弘治2）に豊後に来た鄭舜功は「日本一鑑」の中で「火縄銃 初めはポルトガルで作られた。その国の商人が種子島の日本人に作り方を教えた。その後坊津（鹿児島県）、平戸（長崎県）、豊後、和泉（大阪府）などに伝わり、製造されている。日本の鉄は脆くて、適していない。多くはシャム（タイ）産の鉄を買って作っている。また、福建産の鉄も適しており、密貿易で手に入れている。」と記しており、1556年ころには、豊後ですでに鉄砲の生産がはじまっていた。府内のまちの発掘調査では、火縄銃の部品や鉛製の弾が発見されている。

鉄砲の使用に際して最も重要なのが火薬の確保である。1567年（永禄10）の『イエズス会日本報告集』には、宗麟が、毛利氏に勝利するよう、火薬の原料である硝石を毛利側に輸出せぬように依頼するとともに、同時に豊後への硝石の安定供給を希望する旨の書簡が掲載されている。

硝石の確保とあわせて、宗麟は大砲の入手についても執着した。1568年（永禄11）にはイエズス会の司祭らの仲介によりインド副王から大砲1門が贈られるが、マラッカからの航海中に失われ入手に失敗している。宗麟が石火矢^{いしびや}と呼ばれた大砲を獲得するのは、1576年（天正4）ころのことであり、現在の熊本県玉名市にあたる高瀬津から陸揚げをおこなった。後の島津氏侵攻に際し、臼杵丹生島城において威力を発揮した「国崩^{くづし}」である。また、1578年（天正6）ころの『イエズス会日本報告集』には、豊後国主（大友宗麟）が小型の数門の砲をすでに自ら鑄造していたことを記しており、このころにはすでに豊後での大砲鑄造がおこなわれていたことを示している。宗麟は日本で最もはやく大砲を所有し、鑄造も手がけたのである。

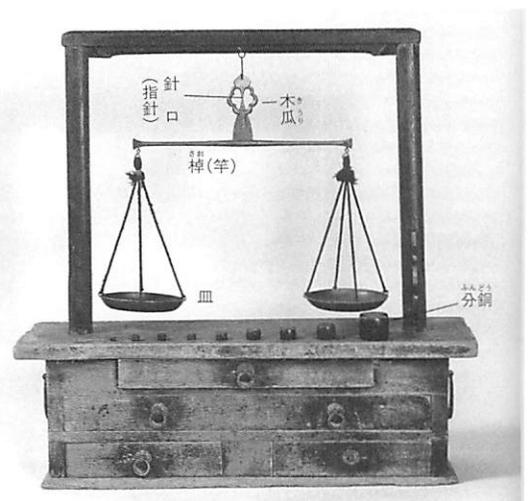
4. まちのくらしとにぎわい

商人と職人

【府内商人】

島津氏による豊後侵攻時、秀吉の命により豊後に来た仙石氏の記録によると府内のまちには約5000軒の家屋が立ち並んでいた。また、府内のまちは、40あまりの町々に分かれており、その町ごとに「おとな（乙名）」と呼ばれた町人頭がいた。

南蛮船の府内への入港の記録がみられなくなる 1559年（永禄2）以降、南蛮船の寄港地は横瀬浦（長崎県）に移るが、豊後の商人達は、横瀬浦まで商品の買い付けに赴いており、その商魂のたくましさを宣教師等の記録は伝えている。宣教師によれば、このころ最も裕福な商人が豊後（府内）商人であり、多くの銀によりポルトガル船がもってくる絹を一番多く買っていったという。また、由原（柞



天秤（福岡市博 1992「堺と博多展」図録より）

原) 八幡宮でおこなわれる祭礼に際しては、府内の「下役人」から銭を預かった「府内商人」が、京都で必要な物資を購入する習わしがあり、当時の権力者との密接な関係を物語っている。

府内のまちには商取り引きに使われる代銀を、天秤を使って計量する「計屋」と呼ばれる商人がいた。当時の文書には「上市町」に岩田与三兵衛入道という計屋商人がいたことが記されており、府内商人の中でも有力な商人のひとりであったと考えられる。

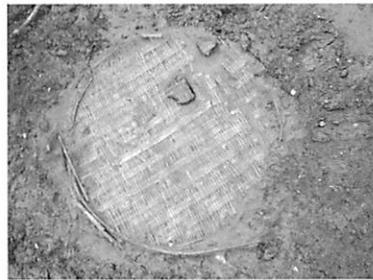
『大友興廢記』によると仲屋宗悦(越)という大商人がいた。宗悦は大坂・堺・京都の中心部に屋敷をもち、中国船が入港した時には最初に船荷の口開きを担当し、普通京都や堺の大商人が共同で買い取ることを宗悦(越)ひとりで大半を買い取るほどの豪商であった。府内のまち跡から出土する天秤の皿や分銅などは、これらの府内商人の活発な活動の様子をうかがわせる。

【府内のまちの商工業者】

「府内古絵

図」にみられる

町名の中には、商売のために住みついた中国人の町と考えられる「唐人町」、海産物などを扱っていたと思われる「魚之店」、さらに「小物座町」、「工座町」などの町名もあることから、ある程度の職種のまとまりをもった町の存在を連想させる。大友家の年中行



ザル



ゲタ

府内のまち跡からの出土遺物 (大分県教育庁埋蔵文化財センター)

事について記した「作法日記」には、諸職人として工御作、桶結御作、塗師御作に加え、鍛冶、番匠、惣大工などがみられる。他の古文書には、府内に居住していた中国江蘇省揚州府の出身である陳氏(覚明・義明・元明)の三代目にあたる陳元明が漆喰塗りの技術をもった仏師として活躍したことが記されている。発掘調査によって発見された鍛冶場の跡や、染物屋とも考えられる甕蔵跡などは、各種の古文書によって示される府内の職人の存在を伝えている。特に大友館の正面にあたる当時の「桜町」では、鍛冶関連の遺物に加えて分銅の未完成品も出土しており、鍛冶職人、分銅の製作工人などがいたことをうかがい知ることができる。

当時のメインストリートであった館正面(東側)の南北道路沿いには、このような工房をはじめ、様々な店舗が軒を並べていたようである。

祭り

【祇園会】

府内のまちを代表する祭りが祇園会であった。6月15日に、京都の祇園会を模し、祭神を乗せた神輿が練り歩き、山とよばれる山鉾(曳山)が府内のまちの中を巡行した。祇園会の祭神である牛頭天王は、都市災害のひとつである疫病を鎮める神として広く信仰されたもので、それを大友氏は府内の鎮守として京都の八坂神社から勧請し祀ったといわれている。疫病の流入を防ぎ、災疫を追い払うことを期待し、天文年間(1532~1554年)ころには府内のまちの出入口にあたる岩屋寺の境内に社殿が築かれていたと



京都の山鉾 (「上杉本洛中洛外図屏風」 米沢市上杉博物館)

考えられる。その後、1618年(元和4)大分市上野律院の地に移され、^{やさかじんじや}弥栄神社として現在にいたっている。

「作法日記」によると、戦国時代末期の祇園会において、「四町」から4本、万寿寺大工の山1本、山崎1本、惣大工1本の、計7本の山が決まって巡行したとされている。フロイスの『日本史』によると、^だ山車には木の塔、様々な作り物が載せられているとあり、『大友興廢記』には^{つくりやま}作山は京都に同じとある。京都祇園会の山鉾と同様なものであったのであろう。「作法日記」には、これら恒例の山車以外にも願い次第で山車が出され、古くは大友氏も飾山1本を出したと記されている。江戸時代の歴史書『豊府聞書』^{ほうふききぎ}によれば、最盛期の状況を物語るものか、12基(本)の飾山が出ていたとも記されている。「作法日記」の「四町」とはどの町であったか、あるいはどういう単位の町であったかは明記されていない。恒例の万寿寺大工の山とは、万寿寺に仕える寺大工の集団が出した山であろう。山崎とは、「作法日記」によれば、由原(柞原)八幡宮に関係し、大友館で使用する灯明用の油の調達に「山崎」が関わっており、その油を取り扱う商人の座的集団であったのかもしれない。惣大工とは、「作法日記」などの内容から、大友館の行事に携わっており、由原(柞原)八幡宮や祇園宮の普請にあたっていた集団と考えられる。また、「作法日記」によれば町々の乙名^{おとな}と山の世話役である頭人が大友館の役人の前^{くじ}で籤を引くとある。恐らく山鉾巡行の順番を籤で決めていたのであろう。

こうした山鉾等の巡行を見物するため、大友氏の専用の^{まじよ}棧敷「屋形棧敷」が作られた。「作法日記」によると、その棧敷は祭りに先立つ6月1日から奉行の指導のもと万寿寺に向き合う通り沿いに築かれたとある。完成したものは長さ10間(約20m)にも及び、そこに大友氏の当主をはじめ宿老以下主だった家臣たちが列席し、簡単な食事や汁物・饅頭などを食しながら見物したとある。この「屋形棧敷」の建設には笠和郷・山香郷が一年交代で当たっており、諸寺院や小身の者たちまでが同様に棧敷を築いて祭り見物を行なったとある。この山鉾巡行が行なわれる前、大友氏による社参行列も執り行われた。赤漆を塗った輿に当主が乗り、その前後を着飾った馬や弓や刀を持った従者が随った。府内の祇園会は、まさに府内のまちの最大のイベントとして多くの観衆が興じたことがうかがえる。

【大風流】 7月12日と26日の両日、先祖供養をかねた^{だいふうりゅう}大風流という集団踊りが府内で催された。趣向を凝らした^{はやし}仮装と囃子を伴った踊りで、その熱狂は大友義統に傾国の危機感を抱かせたほどであった。「作法日記」によると、府内の大風流は、中衆・市衆・町衆の3風流に、本庄・寒田の2風流、町人の5風流の合計10の風流集団と、囃子を行なう集団からなっていた。中衆の風流は「屋形風流」と書かれており、大友氏が主体となった風流かとみられる。市衆・町衆の風流は「殿中衆」が行ったものとあり、大友館に仕える「侍衆」・「小人衆」らが町の者に扮して参加したものだろうか。また、本庄・寒田の風流は、本庄氏・寒田氏などの武士が主体となり参加した風流とみられる。町人の5つの風流とは、祇園の山を出す「四町」と「古川町」が行なったものとある。それに戸次衆による囃子集団が加わった。囃子集団では、50人府内の程の者たちが扇や獅子を舞い、その周りを^{とりかぶと おおぐち そぼつき}鳥甲に大口・傍続姿の100人程の者たちが大鼓で囃し立てるとある。大風流とは、このように武士や町人が一諸になっておこなう府内の大きな「あそび」であった。風流では度を越えた過分な振舞いが良しとされたようで、豊作の年には特に^{けんぶ}金銀の絹布や中国・天竺・南蛮・高麗の^{あやらんしゅう}綾羅錦繡を用いて飾り立てたとある。

【放生会】 8月14日、15日の両日に^{いくし}生石で行われた由原(柞原)八幡宮の祭りで、ルイス・フロイスの書簡に祇園会とともに豊後国を代表する祭りとして紹介されている。「作法日記」では、大友氏と放生会との関わりを次のように記している。14日に大友氏の当主は輿に乗り着飾った供衆を随えて社参を行う。その後、輿に乗ったまま生石の浜で近辺の者が汲んだ潮で手を洗い、一の坂付近の「わなれ木」の近く^{なわて}の囀に畳を敷いて座し、宿老や供衆とともに由原の神が神輿に乗って生石の浜の^{おたびしょ}御旅所へ下る(神幸)を迎える。15日に再び社参行列が行われ、両日の社参後には当主および供のものたちへ冷物・夕顔の汁・蕎

蕪にぶくの簡単な料理が振る舞われている。15日の「はうさいにな（蝸）」という巻貝を放つ神事を終えると、神輿が由原の社殿に帰っていったかんぎょ（還御）。義鑑の代までは、還御に先行して「わなれ木」のもとで神輿を待ち、そこで神に暇乞いをする慣わしであったが、近年は神幸・還御の行列に公私ずいひょうの随兵が毎年付き従っていると記されている。鄭舜功の「日本一鑑」によると、放生会の当日、大勢の兵士が武器を着飾って町外れで遊興すると記されており、宗麟の代の早い段階から神輿随兵が行なわれていたと考えられる。フロイスによると、この放生会の神輿行列に国主が加わることは「絶対の義務」とされるまで恒常的な行事の一つになっていた。また、宗麟自身が普請途中の大坂城の工事に携わる人々の多さを国元の武士に伝えるため、祇園会や放生会に集まる人々の数を引き合いにだすほど、このふたつの祭りが豊後で最もにぎわっていたようであり、「作法日記」によれば、喧嘩が絶えず死人がでるほど人々が熱狂していたことがうかがえる。

飲 食

【発掘調査で出土する多彩な食材】

府内のまち跡からは、多量の食器などとともに、魚介類、鳥獣や家畜の骨などが出土する。具体的には、マグロなどの大型魚やアワビ・サザエ・巻貝・赤貝・ハマグリ、イノシシ・犬・牛・スッポンなどである。これらは、調理後に棄てられたものと考えられ、こうした食物ゴミから、まちに暮らす人々の食生活の一端をうかがうことができる。

しかし、これらの資料だけでは、食材は判明しても食膳にあがった料理そのものの姿を復原することは難しい。したがって、当時の飲食の実態を知るには、出土遺物の様相に加えて当時の配膳の様子を描いた絵画資料や古文書などを参考にする必要がある。また、宣教師の記録等から戦国時代の府内に海外からもたらされた食料を知ることができる。貿易によって砂糖こんべいとう・金平糖につけい・香辛料ちようじ（肉桂・丁香こしょう・胡椒）などが積極的に輸入されており、これらは大変な貴重品であった。

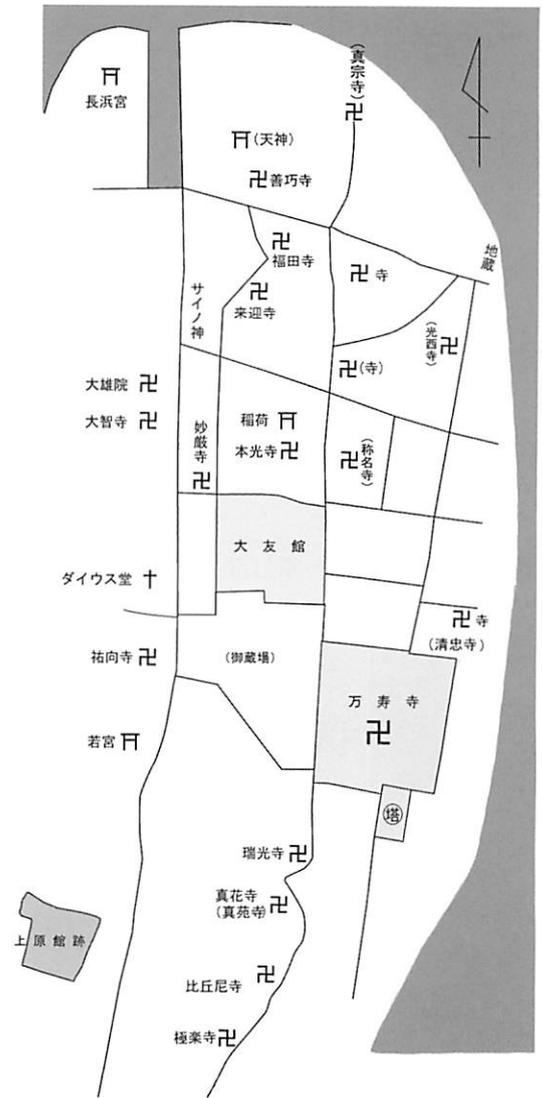
【古文書からの武家儀礼料理の復原】

「作法日記」に記された行事や儀式の際の献立をみると、大友家の正月の献立には「大汁（大根の輪切り）・焼き鳥・雁の汁・さしみ・鶴の汁」などがあり、デザートには「大唐・南蛮・高麗菓子」が出されている。また、支配地の武士からの正月の献上品には白鳥10、鶴20、雁30、水鳥100、雉100、兎・狸50があり、遺跡から出土する動物骨の種類以上に多彩な内容があったことが分かる。宗麟の治世の初めころまでは、毎月朔日しつじつ（1日）と15日に宿老と対面する儀式が定例として行われていた。このような儀式や各種の祭式の際には、雑煮・羊羹ようかん・むし麺・鯛・海茸・たら・海老・猪さばき・ちまき・あじのひぼかし汁・まんじゅう・そうめん・濁酒などがみられる。さらに、朔日の際には佐賀関産のさざえの壺いり酒が振舞われていたようである。3月3日は、猪、酒とともに「草もち」を、5月5日には「ちまき」、8月には「にこりさけ」とともに「そうめん」、9月の名月祝では、なすび、いも、青大豆（枝豆）を食したことが記されている。このように様々な年中行事・儀式の中で、季節の食材を使った料理が食べられていたことが分かる。宣教師の記録では、宗麟が息子義統を連れ、宣教師と会食をした際、食卓には「洋食」と「和食」が並び、宗麟は洋食を食べていた。西洋風の料理は、府内に住んだキリシタンも食していたようで、1557年（弘治3）の復活祭の時、府内教会で400人のキリシタンを食事に招き牛一頭を買って、その肉とともに炊いたご飯を振舞ったという。これはおそらく日本で最初の牛肉飯であったのだろう。このことに直接結びつくとは考えられないが、実際に府内のまちでは牛の頭骨が出土している。今から400年以上前の時代でありながら、武家儀礼料理は、今日の私たちが食べる食事に繋がる内容のものがあることに驚かされる。

5. 府内のまちの人々と様々な信仰

【府内古絵図にみえる寺社】

府内のまちには多くの寺院や神社などがあった。当時の府内を描いた「府内古絵図」が現在3種類伝わっている。この中で惣大工の系統に伝わっている絵図が現存するものの中で最も古く、オリジナルの絵図に一番近いと考えられる。記述内容の信憑性も高く、昭和62年に作成した『大分市史』中の付図「戦国時代の府内復原想定図」もこれを参考に作成している。この「府内古絵図」の中の府内のまち域には、万寿寺以下寺院の名前が記されているものが14寺あり、同様に神社は稲荷以下3社を確認することができる。その他、サイノ神や地藏などがみられる。寺院は、妙厳寺が通りに面する以外、そのほとんどが通りから中に入った町裏に寺地を置いている点をひとつの特徴とする。また、まちの主要な出入口には宗教施設がある。北西の出入口には長浜宮があり、北東の出入口には地藏が置かれている。まちの南西には若宮八幡が鎮座するが、これは上原館の鬼門除けの機能もあわせもっていたと考えられる。さらに、古絵図には描かれていないが、最も南の出入口の要として祇園宮がある。一方、「西小路町」にあるサイノ神（塞の神）は、本来、地域の境界や道の辻に置かれて疫病や邪悪なものへの進入を防ぐ神として信仰されたものであった。



「府内古絵図」にみえる府内のまちの寺社と教会

()は他の古絵図に記載されたものである

【府内のまちの様々な宗教】

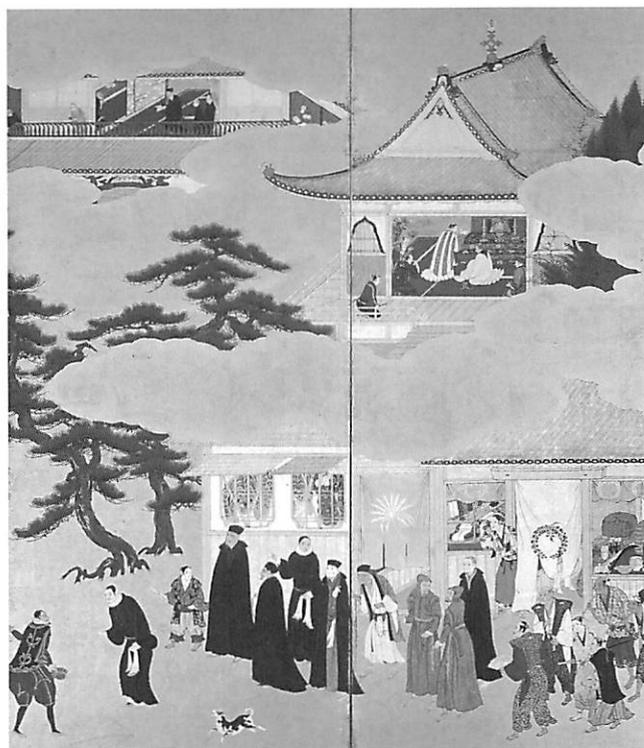
府内のまちに所在する多くの寺社の中で、最も権勢を誇ったのが万寿寺を筆頭とする禅宗諸寺院である。万寿寺と同じ臨済宗寺院には、福田寺、瑞光寺、大智寺、大雄院がある。称名寺は大友氏時（8代）の帰依によって1341年（暦応4）に開かれたとする時宗寺院であるが、寺伝によれば永禄（1558年～1569年）のころに国主の命によって府内のまちから沖の浜に移り、1596年（慶長元）に再び旧地の「名ヶ小路町」に移るとある。このことを具体的に示すように最も古い古絵図には称名寺の記載がない。他に日蓮宗寺院には本光寺がある。浄土宗寺院には来迎寺があり、古絵図に描かれた場所とほぼ同じ位置に現在まで続いている。古絵図に描かれた寺社の中で最も創建年代が新しいのが浄土真宗寺院である善巧寺であり、1581年（天正9）ころの創建と伝えられ、古絵図に描かれた府内のまちの時代を示す根拠のひとつとなっている。このように、様々な宗教の寺社が数多くあった府内のまちの中であって、フランシスコ・ザビエルの来府を契機に布教がはじまる新来のキリスト教は、こうした多様な宗教のひとつであった。

【町の人々の祈り】

当時は、天災や厄病が流行し、特に都市部での被害は甚大であった。府内のまち跡の発掘調査でもこうした不安を取り除こうとする町人の懸命な「祈り」を示すものが多数出土している。建物を造る際の地鎮を目的とした土師器を埋納した跡や、井戸を埋める時に竹筒を立てる「息抜き」と呼ばれる祭祀の跡のほか、地藏菩薩や懸仏、犬形土製品、猿形土製品、猿形木製品など、

信仰や呪術に関わる遺物が出土している。これらは、町人の「祈り」の多様性を端的に示しており、災難疫病を除き、福を招じようとする現代社会にも通じる当時の人々の切なる願いをあらわしている。

【キリスト教会施設の拡充】 1553年（天文22）に最初の教会が建てられたことはすでに述べた。以下では、イエズス会の宣教師の記録により府内のキリスト教教会および信者についてみていくことにする。1555年（弘治元）には教会の隣接地に乳幼児を養育する育児院が設置されている。信者が増加すると施設の拡充が計画され、1556年（弘治2）、教会の隣接地を購入、宗麟からも家数軒が与えられた。新教会は10月末までに完成したらしく、11月1日諸聖人の祝日に落成式が執行された。1557年（弘治3）アルメイダ書簡には、この時造られた修院はかつて宗麟の家であり、同じものを造ろうとすれば2,000クルザードかけてもできないであろうとある。また、1560年（永禄3）フェルナンデス書簡では府内教会は元々「国主の宮殿」であったとされている。この2つの記録からは、宗麟が与えた家数軒とは自身が住んでいた館で、それを改築して教会としたといえる。宗麟の元居館とは、家督相続以前に住んでいた館だったのであろうか。



キリスト教会と宣教師（南蛮屏風 神戸市立博物館）

教会が新築・移転すると、1557年（弘治3）に、これまで使用していた教会敷地は2分割され、病院と墓地が建設された。病院は旧教会を改築し、治療には当初アルメイダと日本人の元僧侶パウロ修士があたった。この病院には多くの患者が集まったため、1559年（永禄2）向い側に新しい病棟が建設された。その後病院の運営は「慈悲の会」に任せられ、会員12名の住宅が病院の周囲に建てられた。旧修院は貧者の家（のち慈悲院）に利用された。拡充された墓地に関連して、教会推定地区の南側で17基の木棺墓が確認されている。その内1基は仰向けで足をまっすぐ伸ばした状態で埋葬されており、キリスト教信者の墓と考えられている。この一帯が教会に付随する共同墓地であったと考えられる。

【教会と町】 教会ではクリスマスや復活祭などの祝日にミサなどさまざまな儀式が行われており、それらにともなう西洋文化が府内に紹介されている。1557年（弘治3）の復活祭の時には日本人による聖歌隊が聖歌を歌っている。その翌日には信者400名に牛肉を炊き込んだご飯が振舞われている。また、1560年（永禄3）のクリスマスでは、聖書から題材をとった物語に日本風の歌をつけた劇が演じられている。音楽でいえば、1562年（永禄5）サンチェス修士が15名の子どもに歌とヴィオラ・ダ・アルコという弦楽器の演奏を教えている。教会では毎日お祈りの時間になると鐘を鳴らして信者に知らせていた。1560年（永禄3）ころのトルレス書簡によれば、酒を買いに行っていた信者の少女が鐘の音を聞いて、酒壺を置いてその場にひざまずき祈りを捧げたという。発掘調査で明らかとなった真鍮製のチェーン・指輪の出土や、府内独自のメダイの製作などは西洋文化がここ府内で華開いたことを如実に物語っている。

【巡察師バリニャーノと府内】

日本での布教
状況を視察する

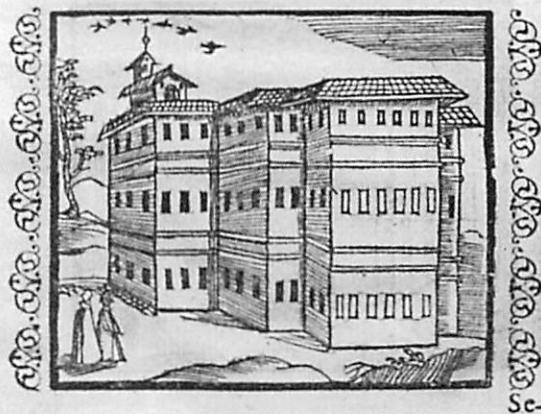
ため来日した巡察師バリニャーノは日本人聖職者を養成する教育機関の設置に乗り出し、1580年（天正8）宗麟に面会して、府内にコレジオ、臼杵にノビシャドを設置する許可を求めた。コレジオはノビシャド（修練院）での教育を終えた者が学ぶ高等神学校で、1581年（天正9）府内教会の近くに設置された。

1582年（天正10）バリニャーノはローマ教皇に謁見させ、かつヨーロッパを見聞させることを目的に4名の少年を九州のキリシタン大名の^{みょうだい}名代として派遣した。これが天正少年遣欧使節である。

府内教会は1556年（弘治2）の拡充以後、コレジオ設置まで新しい施設は造られていない。この間信者は順調に増加しており、手狭となっていた。1585年（天正13）有名な茶入を豊臣秀吉に売却して多額の収入を得た宗麟は、これを財源に新しい教会を建設しようとしたが、実現できなかった。

1586年（天正14）末、島津軍が府内に侵攻し、町は焼き払われた。しかし、教会は被害をまぬがれ、翌年府内に着陣した秀吉の弟羽柴秀長は修院に宿を取っている。ところが1587年（天正15）6月、秀吉がバテレン追放令を出すと、宣教師たちへの迫害が始まり、府内教会も破壊された。

*Collegio della Compagnia di Gesù nella Città
di Funai, nel Giappone.*



府内コレジオ（『グレゴリオ13世伝』 大分市教育委員会）

資 料 編

府内関係史料リスト

「日本一鑑」にみえる豊後関係の記録

「當家年中作法日記」にみえる大友氏の儀式・祭礼

『大友興廢記』

イエズス会宣教師の主な記録

資料編は上記の文献史料の中から、「大友宗麟」、「大友館」、「府内のまち」に関することについて抜粋したものである。

府内関係史料リスト

※「出典」に略記した史料集の正式名称は下記のとおり。

「県史料」：大分県史料／「熊本中世」：熊本県史料 中世編／「宗麟資料集」：大分県先哲叢書 大友宗麟資料集／「旧記雑録後編」：鹿児島県史料 旧記雑録後編／「宮崎中世」：宮崎県史料 史料編中世／「荘園集成」：豊後国荘園公領史料集成／「大友府内」：大分県立先哲史料館特別展「大友府内」展示図録

【中央】

史料名(差出人)・年月日・宛名	西暦	内容	出典
足利義昭御内書 (元亀元年)二月廿三日 大友義統	1570年	豊芸無事の儀、先代已来遅々の条、言上の通り尤もに候、然りといえども、凶徒退治をなし候間、寛宥の思いをなし、相ともに馳走感悦たるべく候、	大友家文書 県史料26
織田信長書状写 (元亀元年)二月廿八日 大友宗麟	1570年	豊芸の間の儀につき、重ねて上意を加えられ候、これにより愚庵御下向候、万端を抛うたれ一和ありて、天下の儀御馳走尤もに候、	大友家文書 県史料26
織田信長朱印状 天正七 十一月廿七日 大友義統	1579年	周防・長門両国の事、全くこれ進止あるべし、聊かも相違あるべからずの状、件のごとし、	大友家文書 県史料26
近衛前久書状写 (天正8年)月日欠 宛名欠	1580年	好便の条啓せしめ候、仍って豊薩両国和睦の事、去年御朱印を以て申し下さる上は、たとえご存分候といえども、意趣を差し置かれ無事の段尤もに候か、(中略)はたまは御馬差し下され候、上方においても無類に候間、別してご秘蔵あるべく候、	大友松野文書 県史料25
豊臣秀吉書状 (天正13年)九月廿七日 大友義統	1585年	吉光骨啄刀の儀所望なし候由、秀吉前にて之を放つ者ども、宮内卿法印・千利休居士兩人承り候て、その方へ相伝え候の処、早速給い候の儀、ひとしお満足斜めならず候、	大友家文書 県史料26
豊臣秀吉直書写 (天正13年10月2日) 宛名欠	1585年	勅定により筆を染め候、仍って関東残らず奥州の果てまで、綸命に任せられ、天下静謐の処に、九州の事今に銚橋の儀然るべからず候条、国郡境目相論互いの存分の儀は、聞こし召し届けられ、追って仰せ出でらるべく候、先ず敵味方双方ともに、弓箭を相止めるべく候由御慮に候、その意を得らるべき儀尤もに候、自然この旨を相守らず候は、きつと御成敗を加えらるべく候間、この返答示しなし候、一大事に候、分別ありて言上せらるべく候也、	大友松野文書 県史料25
豊臣秀吉大坂移座祝儀物覚 天正十四年正月廿六日	1586年	秀吉公大坂に至り御座移さる御祝儀として 天正十一年 真光寺隨身 一青楓絵一幅 玉潤筆 山水 [割注]代三千貫・銀子六十貫目・六箱 天正十三年 真光寺隨身 一吉光御腰物 骨喰 [割注]一方不動、一方クリカラ、刃直刃ホソミ 関白殿より御所望也[割注]代二千貫・銀子四十貫目・四箱 (中略) かの使安国寺 宮本右兵衛入道宗賦 一小壺茄子 [割注]ツクシナスヒト云う、天下一也、四の内博多紹悦所持也 代六千貫・銀子百二十貫目・十二箱 天正十三年乙酉 御使右に同前 一新田肩衝 [割注]四の内天下一也、博多大串宗久所持ヲ休庵様御所望也 代三千五百貫・銀子七十貫目・七箱 右小壺・肩衝の事、真光寺・浦上長門入道・葛西周防入道、古川福田寺においてこれを渡す、三ヶ年中に天下の名物豊州より罷り上り候事、奇特の神變の由、貴賤批判の由申し候也、 右四種の員数一万四千五百貫也、銀子二十九箱・二百九十貫目 今度小早川・吉川上洛に付いて、両家の沙汰と云々 天正十四年正月廿六日 これを記録す	大友松野文書 県史料25
大友宗麟書状 (天正14年)卯月六日 古荘丹後入道他2名	1586年	徳と筆を染め候、仍て昨日五大坂に到り出頭を遂げ候、(中略) 一宮内卿法印へ立宿の儀仕るべく由に候間、辰の剋程に法印へ罷り着き候、御門内御普請の様子、諸国よりの馳走の夫、幾千万とも申すなきばかりに候、その国の祇園会・放生会四つ五つ合わせ候ても、人数はこれ程あり難く候条、凡そ校量あるべく候、(中略) 一法印より牛の剋程に出頭を遂げ候、普請半ばの事に候間、漸道を凌ぎ出で候、先ず鉄の御門を見候て、天を仰ぎ申し候、(中略)宗滴(宗麟)御対面なされ、則御振廻に候、(中略)その後金屋の御座敷御見せ候、三疊敷き、天井・壁その外皆金、あかり障子のほね迄も黄金、赤紗にてはり申し候、見事さ結構申すに及ばず、(中略)御茶宗易(千利休)たてられ候、その後関白様、宗滴は茶にすきかとお尋ねなされ候、利休居士中々数寄の由、申し上げられ候へば、さらは一服たて休庵(宗麟)へ参らせんするよしにて、御茶を遊ばされ候、御手前の見事さ、申すも中々疎ましき様に候、さて、宗滴へ下され候、(中略)その後天主見物いたすべく由仰せ出だされ候間、御座敷退出仕り候、関白様御案内者なされ候、御舎弟美濃守殿(羽柴秀長)も半作の時御覧候てよりは、終りに御見物なく候、宗滴に御かかり候て御拝見の由にて候、天主重々の様子、これまた言説に及びまじく候、書載などは隙を明け候、橋敷き以上九つ奇特神変不思議との申す事に候、三国無双とも申すべく候や、下より三重め杉の櫃十四、五程、	大友家文書録 県史料33

		上に書付あり、かなに御小袖、或いは白あや、或いは紅小袖上々と書付候、驚目に候、一階の下は皆御蔵にて候、その下に長櫃十五、六、これも御小袖入れられ候、少めされたるも有り見え申し候、その上に綿蔵、或いは紙蔵上下にあり、又手火矢玉葉の蔵あり、一階宛にあかきカツハ四つ・五つかけ置かれ候、以上廿ばかりもこれあり候と覚え申し候、下三重めより上には、大手火矢口筒六挺づつこれ有り候、五重・六重めには長刀二つ候、何れも朱柄にて候、(中略) 金銀の蔵数を尽くし御教え候、誠に驚目に候、宝物の入れ候所を銘々に御教え候、(中略) さて、天主の上に御座候て、近国近方の在々所々を一々御教え候、誠に手を取りうしろに御手をかけられ、色々の御雑談ともに候、(中略) 納戸の様なる内、金子三十貫目程候、これははしたに遣わし候などと仰せ聞かせられ候、(中略) 拝見の以後、御茶下され候、種々の御菓子申すに及ばず、さて、秘蔵の脇刀二つ所持候、二つの内、これが一の秘蔵にて候、休庵に進じ候とて、御手づから拝領候様子、書載にあたわず、面目の至り、外間実儀過ぐべからず候、(中略) 直ぐに美濃守殿へ参り候折節、(中略) はるばる宗滴の手をとられ候て、何事も何事も美濃守のごとく候間心安かるべく候、内々の儀は宗易、公儀の事は宰相(秀長)存じ候、御為に悪しき事はあるべからず候、いよいよ申し談ずべしと諸万人の中を手を取り組み、御入魂中々忝く存じ候、(下略)	
豊臣秀吉朱印状案 (天正14年)年月日未詳	1586年	(前略) 三月朔日出馬に候、今少しの間に候条、聊かも卒爾の動きなく、その城堅固に申し付けらるべき事、専一に候、(中略) はたまた平釜これを送られ候、留め置くべく候といえども、その方数年持ちなれ秘蔵の由に候間、返し遣わし候、志の程悦に入り候也	大友松野文書 県史料25

【館】

大友義鑑書状 (年未詳)十二月廿五日 波多備後守		門の材木、早速運送祝着に候	岐部文書 県史料10
大友義鑑書状写 (天文13年)閏十一月十八日 帆足右衛門大夫他6名	1544年	土蔵の材木、切符を以て申し候、各急度馳走に預かり候は、祝着たるべく候、殊の外急用に候、各油断あるべからず候、	大友家文書録 県史料32
大友義鑑書状写 (天文16年)閏七月廿四日 埴田越前守・小田原三河守	1547年	志士知名へ役所・台所上葺の儀、申し付け候、然らば料口口事、催促を以て急度馳走肝要に候、聊かも緩ぎあるべからずの儀口、	大友家文書録 県史料34
大友義鑑書状写 (天文17年)閏七月廿三日 津久見左馬助 田北勘解由左衛門尉	1547年	遠侍戸悉損し候、急度申し付けられ、両戸引き結構馳走有るべく候、聊かも緩ぎの儀有るべからず候	小野尾文書 県史料11
大友義鑑書状写 (年未詳)三月廿八日 小田原左京亮他3名		乾屋敷普請辛勞察し存じ候、近日馳走の段如何に候、	大友家文書録 県史料34
大友義鑑書状写 (年未詳)十二月廿八日 小田原三河守・埴田越前守		女中屋作に就き、各別て辛勞の儀に候の条、黄金一枚進じ候、	大友家文書録 県史料34
陶隆房等府内参入日記 天文廿一年正月五日	1552年	天文廿年十二月廿七日、竹多津浦に御屋形様迎え候御船着岸候人々、陶安房守隆房・杉勘解由判官隆相・飯田石見守興永三人也 同天文廿一年正月五日、彼三人府中に入らる也 同十六日、大友へ御成り、御弔役隆相也、何か御供也 客居 御屋形様(中略) 主居大友殿様(以下略)	永弘文書 県史料6
某手日記 (弘治3年五月)廿一日	1557年	一同廿一日癸酉、大友殿御座スウスキ焼失候、女中方ばかり残る也、上様相違なく候(以下略)	永弘文書 県史料6
大友家文書録綱文 永禄元年閏六月十八日	1558年	義統は(中略)永禄元年戊午閏六月十八日、豊後府内上原館において誕生六年癸亥、宗麟居を臼杵丹生島新城に移す、長寿丸(義統)上原館に留任	大友家文書録 県史料33
大友家文書録綱文 永禄五年	1562年	この年(永禄5年)、宗麟海部郡臼杵丹生島を相おさめ、新に築城す。上原館より移徙しおわんぬ。初め当家世々府内において館を構え之に居す。高崎山において築城し不具の守をなす。義鎮の治国に至り、館を上原に遷す。しかして今これに及ぶ。嫡男長寿丸(義統)をして上原館に居さしむ。	大友家文書録 県史料33
大友宗麟書状案 (天正元年カ)九月廿三日 朽網左京亮	1573年	土井廻屏の儀、諸郷に至り申し付け候、仍て埴田庄の内、口口領地諸点役免許の段、存知せしめ候と雖も、この度の事は所望のため、直に馳走悦喜たるべく候	大友家文書録 県史料33
大友宗麟書状 (天正元年カ)十月廿四日 若林弾正忠	1573年	土井廻屏の儀、諸郷庄に至り申し付け候、仍て安岐郷の内、其方領地諸点役免許の段、存知せしめ候と雖も、この度の事は所望のため、直に馳走肝要に候	若林文書 県史料35
大友宗麟書状案 (天正元年カ)十一月十一日 衛藤八郎	1573年	土井廻屏の儀、諸郷庄に至り申し付け候、仍て荏隈郷の内、口方領地諸点役免許の段、存知せしめ候と雖も、この度の事は口口口、直に馳走悦喜たるべく候	大友家文書録 県史料33
大友家文書録綱文 (天正元年)十二月	1573年	義統土井廻屏の事により、書を田北大炊助に授く	大友家文書録 県史料33
大友義統書状 (天正元年)十二月二日 田北大炊助	1573年	土井廻屏の儀、諸郷庄に至り申し付け候、仍て直入郷の内、其方領地分の事、諸点役免許の段、存知候と雖も、この度の事、馳走肝要に候	田北文書 熊本中世4

大友氏加判衆連署奉書 (天正元年カ)十一月一日 向刑部	1573年	笠和郷に至り、御土圀屏の儀につき、仰せ付けられ候、御免許衆の事、役所より言上の趣、披露を遂げ候の処、貴方領地諸点役御有免なされ候と雖も、御所望のため馳走御祝着たるべく候の由、申すべき旨仰せ出だされ候、早々勤役肝要に候、油断の儀あるべからず候、	向文書 県史料9
大友宗麟書状写 (年未詳)九月三日 若林弾正忠		安岐郷に至り、小門の儀申し付け候、然らばその方領地の事、前々より万雑諸点役免許の儀、承知せしめ候と雖も、馳走に預かりべく事、祝着たるべきの段申し候の処、用脚を以て直納喜悦に候、検断において不入の儀は、永々相違あるべからず候、存知のために候、	若林文書 宗麟資料集5

【貿易】

大友氏加判衆連署書状 (天正元年)八月廿五日 島津氏奉行人6名	1573年	今度南蛮に至り差し渡され候船帰朝せしめ、御領内において繋ぎ置き候の処、去る大風の砌少過の子細これ有る由到来により、貴殿に至り使節を以て申され候の処、未だ御返事あらず候の事、御心許なく候、(中略)然らば彼船南蛮国においても、この節の如き少難の儀これ有りと雖も、宗麟より差し渡さるる船の段存知有り、彼国守相談を以て廉直の扱い、あまつさえ使節を以て申し越され候処、万一御得心相滞るるにおいては、大國までの覚え如何の条、御遠慮を以て示し預かり候は祝着申さるるべく候、	島津家文書 旧記雑録後編1
島津氏奉行人連署書状案 (天正元年)九月日 豊州老中	1573年	破艘の儀につき、毎々御使書珍重に存じ候、(中略)纔かに思慮を廻らされ、船・銀子・鹿皮、南蛮国進物種々、目録を以て進じられ候事歴然に候、	島津家文書 旧記雑録後編1
大友宗麟書状 (天正4年カ)正月 城蔵人大夫	1576年	高瀬津(熊本県玉名市)に至り、石火矢着岸の条、今度召し越すべき覚悟に候、方角の儀に候間、辛勞ながら夫丸の儀申し付けられ、運送祝着たるべく候、人数過分に入るべきの由に候間、別して御馳走肝要に候、	南蛮文化館文書 宗麟資料集5

【町一般】

高田庄年貢徴符并請取状 天正十八年九月廿一日 平林兵部少輔	1590年	右合せ四町七反小二歩 右の前急度相調え、府内の如く運送肝要の由、御下知により調符件の如し	平林文書 県史料25
島津義久書状 (天正14年)十二月廿日 入田丹後入道	1586年	(前略)最前より御入魂の首尾を以て、府内表までたやすく所勘に属し、あまつさえ千斛(仙石)・長曾我部敗北の儀、自他国の覚え、大慶これに過ぎず候、	入田文書 宮崎中世1
樺山紹劔日記 天正十四年	1586年	高田という城の城戸口まで責めつけ、府内は前の祇園の川原まで追い責め、中々京衆北軍の体をなし紙面に尽くしがたし、一日抱え候て次の夜、京衆・地下の者あとさきに府内を逃げ去る。	薩藩旧記雑録 旧記雑録後編2
吉川元長書状 (天正15年)三月廿二日 西禅寺	1587年	一、この表何の遊興なすもこれなく候、豊後府内も乱後とは申しながら、散々の事に候、一所も心の留まりこれなく候、	吉川家文書 荘園集成5上

【町支配】

大友吉統書状 (年未詳)七月廿九日 岩屋与兵衛入道・竹中宮内少輔		山香郷濟物、検使中より調納の刻、兩人蔵奉行として、堅固に請け取り置かれ肝要に候、	竹中文書 荘園集成4上
大友義統書状 (年未詳)六月十二日 税所越中守		府内屋敷、祇園御神領分の儀、その方格護あるべく候、然らば東の築地外の通りに(至り)、町人召し移し、屋敷料を以て、右社頭上尊等、馳走あるべく由、尤も肝要に候、仍って諸点役の儀、免許せしめ候趣、巨細口上申し候、	日野文書 県史料9
大友義統条々事書 天正十年正月廿二日 柴田礼能	1582年	一、万寿寺築地の内并に西の屋敷両所、所望せしめ候の事 一、一府の内、万寿寺町屋敷の事、残る所なく預け置き候事 一、百姓中前々の証文これ有ると雖も、毎事礼能存分に任せらるべき事 一、諸成敗の事、たとえ人の被官たると雖も、主人に至り礼能相理り、存分に任せらるべき事 一、町役并点馬諸公事等の事、前々の如く馳走励まるべき事 一、地下人等内訴を企てると雖も、曾て許容あるべからざる事 一、公役等の事、聊かも緩ぎなく所勤あるべき事	大友松野文書 県史料25

【町住人】

田原紹忍書状 (年未詳)十一月九日 清成式部少輔・岡部宮内入道		一符の内上市岩田与三兵衛入道事、計屋の儀に候条、上毛郡・下毛郡売買人、彼者の所へ罷り着き肝要の段、申し付けらるべく候、	綱瀬文書 県史料8
大友氏奉行人連署奉書 (年未詳)九月廿七日 椋間村諸給人		大神宝会京都御買物の事、府内商人へ仰せ付けられ候、然らば各申し談ぜられ、先ず以て出銭三千疋、来月上旬に府内下役人に至り、調べ渡さるべき由、仰せ出だされ候、聊かも緩ぎあるべからざる儀に候	個人蔵 大友府内
陳氏系図	1515年	陳覚明、永正十二乙亥年四月上旬、豊後府内に住居すと云々	五条氏文書 大友府内
余慶寺梵鐘銘 元龜二年七月十三日	1571年	豊後国大分郡府中今小路総道場 願主大明台州府盧高・平羊県陽愛有	
仙石秀久筑紫陣注進状 天正十四年十一月三日	1586年	府内の町家数五千ばかり御座候、その町々のおとな共質物百五十人ばかり取り候て、番に堅く申し付け候、	尊經閣古文書纂

「日本一鑑」にみえる豊後関係の記録

「日本一鑑」は1556年倭寇禁圧を日本に要請するため豊後府内に来航した中国人鄭舜功が約半年間の豊後滞在中に見聞した日本に関する情報をまとめた著書で、「桴海図経」・「隴島新編」・「窮河話海」の三編で構成されている。

明時代における日本研究第一級の史料と評価されながらも、これまで版本として出版されたことがなく、写本でしか伝わっていないため、その内容はあまり知られていない。

ここでは、神戸輝夫氏（大分大学名誉教授）が「鄭舜功著『日本一鑑』について（正）・（続）」（大分大学教育福祉科学部研究紀要 第22巻第1号）で紹介された豊後関係の記録を抽出し、神戸氏に監修していただいた現代語訳を掲載した。

【沖の浜について】桴海図経

中国・広東を出発、日本を目指し、途中大風に流されながらも、豊後の澳濱（沖の浜）に到着した。そこから馬に乗り、豊後国主大友義鎮（宗麟）と面会した。

【割注】 出発するにあたり、江蘇・浙江・福建の沿岸は倭寇の活動が激しいため、広東から出航し、日本国王に倭寇鎮圧を要請することにした。ところが、日本の海域で大風にあい、沖の浜に漂着するように到着した。沖の浜は豊後国内、釜江（蒲江）の西にある。豊後は日本を分割した内の一国である。領主の姓名は源義鎮（大友義鎮）といい、日本国王（足利将軍）の一族である。義鎮は豊後・筑後・肥後・肥前・筑前を支配しており、また日向国内の一部も支配している。これを六国という。支配下の港も多い。また、盗賊も多い。各地で略奪を働き日本から中国へ来る者がいるが、そのことを義鎮はあまり知らない。

【中国から日本への航路－夷海右道の豊後関係地名】桴海図経

※鄭舜功は中国から日本の京都へ至る道として「夷海右道」・「夷海上道」・「夷島陸道」を紹介している。「夷海右道」は大隅半島から日向灘を北上し、豊後水道に入った後、四国の太平洋側をとおり、紀伊半島を北上し、大阪湾に入る航路。「夷海上道」は薩摩半島から九州西岸を北上し、下関から瀬戸内海を通る。最後の「夷島陸道」は薩摩半島から陸上を京都までのぼる道である。ここでは「夷道右道」に登場する豊後関係地名をあげる。

竹島（臼杵市）、豊後、彦岳山（佐伯市）、坂関（大分市）、高島（大分市）、臼杵（臼杵市）、釜江（蒲江・佐伯市）、四浦（津久見市）、古河（大分市）、澳濱（沖の浜・大分市）

【坂関割注】 その海ではよい魚が獲れる。長さは2尺（約60cm）ほどで、たいへんおいしい。

【澳濱割注】 港は浅くて船の停泊には適さない。ここから府内までは陸を行って5～6里（中国里で約2km）あり、みな入り組んだ道である。

【関】隴島新編

佐嘉関は土佐（四国の総称）と豊後の間にある。坂関は豊後にある。

【島】隴島新編

- ◆蒙島（葛島か・大分市佐賀関）は一つの山である。佐嘉関ともいう。土佐の海中にある。
- ◆高島（大分市佐賀関）は豊後の海の中にある。かつて豊後国主が住んでいたことがある。
- ◆小路島は一つの山である。豊後の海中にある。
- ◆竹島（臼杵市）は豊後にある。
- ◆蓑島は一つの山である。豊後の海中にある。
- ◆加作縫島（大分市生石の笠結島のことか）。
- ◆家島（大分市家島か）。

【院】 隴島新編

龍源院と瑞峯院はともに山城国(京都府)にある。大徳寺瑞峯の有力支援者は豊後国主大友義鎮である。瑞峯院の住職は怡雲(宗悦)という。豊後国内の人々は僧俗問わず、京へ行けば、ここに立ち寄る。

【寺】 隴島新編

- ◆万寿寺は寺の名である。豊後にある。
- ◆龍護寺は佐伯庄(佐伯市)にある。豊後国主の菩提所である。寺の住職清授は嘉靖丙辰(1556年)、大友義鎮の返礼の使節として鄭舜功の帰国に同行した。治安が目的であった。
- ◆到明寺(臼杵市野津)は豊後にある。大友義鎮の返礼副使である清超がいる寺である。
- ◆太智寺(大智寺・大分市)は豊後にある。寺僧の清涼・祥玉は学問を尊ぶ。

【庵】 隴島新編

松月庵は大智寺の右にある。僧清梁がここに住んでいる。

【割注】清梁は大友義鑑の時に明国に貿易を求める使者として派遣された。

【所】 隴島新編

隆府所・隆府(高国府・隆国府、大分市)から宗像まではみな豊後の土地である。日本の中位の国である。地名はたいへん多く、詳細は把握していない。ここでは豊後の地名のみをあげる。

古府、勢家、澳濱、笠和、駄原、荏隈、豊饒、塩九升、津守、下部、高田、牧、萩原、丹生、佐賀、婁土(瀬)、臼杵、佐伯、紡方、大佐井、小佐井、入田、志賀、家中、佐志生、寧目、白谷、浪野、一万田、朽網、白仁、田北、津久見、三重、井田、野津、宇田枝、戸次、清田、賀来、瀧河内、稲田、横瀬、狭間、真那井、田原、立田、田布、観見、朝見、高崎、別府、石垣、小坂、竈門、里屋、迫間、頭成、日出、加地、山河、八坂、大神、朝来(也)、藤原、木付、都甲、安岐、真、武蔵、伊美、来繩、櫛木、岐部、役見、吉弘、富来、富賀田、濱澳、宗像、真那井、下郡。

【時令】 窮河話海

八月は彼岸といい、牡月、葉月ともという。木の葉が落ちる季節のため名付けられた。朔は悪といい、また白露ともいう。二十四節気の白露節は八月にあたる。十五夜には国の都で、放生会と呼ばれる八幡神(岩清水八幡宮)の祭りがある。また、大和では大明神(春日大社)、伊勢では天照神(伊勢神宮)の祭りがある。みな日本の先代国王である。日本の人はこれを三社日と呼んでいる。この日豊後では大勢の兵士が武器を着飾って、町外れで遊興する。

【関津】 窮河話海 卷2

豊前から長門に行くには赤間関(下関)がある。豊後から土佐に行く途中には坂関があり、土佐から日向へ行くには佐嘉関がある。

【珍宝】 窮河話海

- ◆鉄は豊後・越中(富山県)・備中(岡山県)・陸奥(青森・岩手・宮城・福島県)から産出するものが良質である。刀をつくるのに適している。質の悪い鉄では鋤を作る。これを鎌鉄という。
- ◆碁石は豊後の島々から取れる。白石は法螺貝など、黒石は石から作る。
- ◆勘合符は洪武年間と永楽年間の二度与えられた。明に入貢するには必ず勘合符が必要であった。日本の中位の国が使節を派遣するには銅千貫、銀にして四千両が必要である。その一部を賄賂にあて、残りで勘合符を購入し、使節が明に入貢できた。

【器用】 窮河話海

- ◆碁 碁盤の高さは1尺(約33cm)に満たない。面の広さは1尺程度である。杉に似た木でできている。碁石の黒石は石製。白石は法螺貝などで作る。豊後の海中で多く獲れる。
- ◆紙 豊後・越前などすべてで作られる。紙の材料は山桑の皮を使う。木は硬いものがよく、繭作りには適していない。

- ◆鎧は甲のこと。甲は山城（京都府）・大和（奈良県）・豊後・周防（山口県）・毛利などで作られる。胴は皮で作る。または鉄に黒漆を塗り、光をさえぎり、色とりどりの紐でつなげる。体全体を覆う物がある、それぞれ名前がついている。ただし、足にはない。金刃をたいへん貴ぶ。
- ◆刀 豊後の刀は富賀田（大分市高田か）で作られる。山城（京都府）に次ぐ産地である。豊後大友氏の重臣臼杵鑑続は古い名刀を持っている。長さは三尺ほど（約1m）。値段は銭70万文、銀にして2800両にもなる。
- ◆火縄銃 初めはポルトガルで作られた。その国の商人が種子島の日本人に作り方を教えた。その後坊津（鹿児島県）、平戸（長崎県）、豊後、和泉（大阪府）などに伝わり、製造されている。日本の鉄は脆くて、適していない。多くはシャム（タイ）産の鉄を買って作っている。また、福建産の鉄も適しており、密貿易で手に入れている。

【集議】窮河話海

豊後大友氏の家臣は日中に政治を行う。みんな集まって会議を開く。私鄭舜功は常に会議の間に倭寇禁圧の中国皇帝の論を説明し、彼らは倭寇禁圧を決定した。中国皇帝の宣諭内容を大友氏の重臣に説得する仕事は私ひとりの責任とされ、重臣会議に臨んだ。日本人をよい方向に導くことは、忠信仁義の心が不可欠である。

【流述】窮河話海

- ◆嘉靖丙辰（1556年）、冬十二月、日本の西海修理大夫・六国刺史・豊後土守の大友義鎮が僧の清授を船に乗せて使者として送ってきた。これより先に無官であるわたくし鄭舜功が宣諭を奉じる使者として日本に赴いていた。この時になって返答の使者が国典を請い、豊後に帰って忠実に法に従おうとしたのである。
- ◆日本の西海修理大夫・源義鎮が僧の徳陽を派遣して入貢を求めてきた。これより先に使者が日本に招諭した。なおかつ王直も中国に帰順するように招いており、それに応じた動きであった。

【奉貢】窮河話海

- ◆嘉靖丙午（1546年）、豊後国主大友義鑑は幕府から勘合符を入手し、僧梁清を使節として入貢した。中国側では入貢の時期にあわない事を理由にこれを受け入れなかった。
- ◆嘉靖丙辰（1556年）、西海修理大夫六国刺史豊後土守である大友義鎮は僧清授を派遣し、中国国王宣諭の返答使とした。（中略）この処理に当たった者はみな真実を見極めず、古い誤った先例を引用して、使節清授を四川省茂州の治平寺に幽閉することを申請した。
- ◆丁巳（1557年）、大友義鎮は僧徳陽を派遣して来貢させた。

【市舶】窮河話海

悪徳中国商人が通訳などを介して、貿易にきた日本人と交渉し、資金を得て、景德鎮に行き、陶磁器を買い、その底に日本の年号を入れさせて暴利を得ている。

【授節】窮河話海

私鄭舜功は中国国王の宣諭を奉じて日本へ行った。すると「日本西海修理大夫六国刺史豊後土守」の大友義鎮は僧清授を私が帰国する船に同船させ、返答使として派遣し、国典をもらい帰国して、倭寇禁圧を実行することを申請した。先によい方向へ進もうとする心を知り、後の患いを除くようにすることを考えるべきである。どうしてこの処理に当たった者が、真実を見極めず、古い誤った先例を引用して、使節清授を四川省に幽閉することを申請するのか。そのようであるから、日本人の心を阻害し、倭寇が絶えず、中国周辺でたいへんな患いが生み出されるのである。私鄭舜功は、皇帝に敢えて進言いたします。日本の倭寇を鎮圧し、皇帝の威信を明らかにし、返答使を哀れんで、そして平和を守っていただきたい。そのために、ここで書物から先例を調べ、過去の日本国王への礼遇のあり方を詳しく紹介する。

【接使】窮河話海

私鄭舜功は大友義鎮、家臣臼杵鑑続、長生、鑑治、志賀親守、臼杵鑑速、吉弘鑑直、国僧清梁等に中国皇帝の倭寇禁圧の論を明瞭に伝えた。その結果、返答使を鄭舜功が帰国する船に同船させることを話し合った。

「當家年中作法日記」にみえる大友氏の儀式・祭礼

「當家年中作法日記」は大友家で執り行われていた年中行事の内容を記した史料である。奥書によれば、豊後を没収された大友氏第22代吉統（宗麟の長男）が幽閉中の常陸国水戸にて、文禄4年（1599年）10月に後代のために書き記した。

ここでは主に館内部の様子がかがえる儀式や府内の町人や地域との関わりがある儀式・祭礼について抽出した。原文はかな交じりで書かれており、意味がわかりにくい個所が多いため、適宜漢字になおした。なお、全文は『増補訂正編年大友史料』31に所収されている。

【12月31日 正月祝大歳の夜納】

右の祝い、大おもてに新しき俎板にすわる。このまな板は惣大工、嘉例に進上仕り候、この俎板の脇にかなかけ三枚あり、一つにはさたい（さざえカ）、一つにはするめ、一つには昆布を入れ置く也、又かなへをも俎板の脇に置く也、また板の上に、瓶子置き様、左右に置き、中に銚子冷酒を置く也、右の祝い物番衆の事、奥の蔵番仕り候、

【1月1日未明 梅干茶】

梅干にて茶参る、これは歳之夜、御台番6人の内、1人御内に宿近き者に、分別を以て申し付け、夜の内に参り候て、梅を一の台に渡し候、茶は局たて候て、寝所にて飲む也、この梅由原宮師（柞原八幡宮）、又真光寺よりも参る也、かち栗は津守村・犬飼山の栗也、かの村地頭方役人松崎左京亮進上申し候、

【1月1日 陶物調進】

陶物、一府（府内）并に荏限郷より調う也、由原大島これを調う、口伝なり、

【1月1日 せんす万歳】

参る次第の事、一番朝日介一類同鶴舞也、二番ちやうの四郎一類、三番渡守同かうの舞也、四番さるひき、五に松囃子、何れも対面の前なり、

【1月1日 対面の次第】

一番年寄衆、二番に親類衆、（中略）、宮仕え衆の事、着到を以て年の夜記録所西の方天井長押に押し候て置く也、（中略）侍衆盃給い候て以後、同朋、その次猿楽、その次かくこ衆・中間衆、その次地下の者、その次力・まやのもの、執当参り候、力より後はさい（敷居）の内には参らず候、縁にて盃給う也、諸職人の事、匠御作・桶結御作・塗師御作、これは鍛冶番匠と同前にさい（敷居）の内に入り候、諸職人も、それぞれに依りては縁まで参りあり、

【1月3日 しゃく】

しゃくとて、往古より対面なし、（中略）、椀飯過ぎ候て、晩には入り祝い申し候、高田庄より、今日の椀飯勤め申し候、朔日・二日に替わり殊のほか馳走候、東北国の珍肴は申すに及ばず、近年は大唐・南蛮・高麗菓以下進上也、白鳥十、鶴二十、馬三十、水鳥百、雄（雁カ）百、兎・狸五十、以上三百竿参り候、

【1月4日 寺家衆参る】

未明諸寺家衆参られ候、一番蔭山衆（万寿寺）、その次同慈寺・大智寺・心源寺・瑞光寺・その外禪家衆也、その次称名寺・真光寺・妙巖寺、これは出世次第也、その後來迎寺、その次法花宗也、円寿寺衆は何れも十一日に一束一本（杉原一束・扇一本）にて参られ候、小寺衆はこうしなど也、諸寺家皆々一束一本也、（中略）、さて侍衆盃過ぎ候て一府（府内）地下人参り候、杉原一束・さきひろの扇一本ずつ進上申し候、なかんずく、古川の者一束一本選ばれ候て、請け取り候、

【1月5日 宿老・聞次内々参る】

宿老・聞次衆の内々簾中へ参り候、このあいさつには公文所内々にて候、右内々衆よりはしたおこ迄引き出物持参候、雑煮にて盃也

【1月7日 宮師参る】

由原宮師（柞原八幡宮宮師）参り候、塗輿にて大門の前まで参り候、

【1月11日 吉書】

早朝吉書也、烏帽子・素袍にて候、一番社家吉書也、秘密の儀多々これあるにより別紙に記し置く也、宮仕聞次衆也、肴三献参る、(中略)、社家の吉書調べ、その後御座の吉書也、吉書調べ候て、雑煮参り、盃を給い候、宿老何れも列座也、吉書様子、祝の役口伝あり、吉書過ぎれば惣大工斧立て仕り候、

【1月14日 由原宮花献上】

薄暮の時分、由原より花参られ候、小花一瓶、御曹司へ参られ候、以前はかがり火たかせ候て参り候、大門より参られ候、遠侍の大庭にて行事あり

【1月16日 評定始め】

評定始也、勿論宿老参上候て、条数御前より調べ、聞次を以て申し出で候、奉書少々右筆相調べ候、その後雑煮にて盃あり、座敷は宿老まで也、

【毎月1日・15日 宿老対面】

宗麟御代始めまでは、毎月朔日・十五日に宿老に対面候つ、朔日にはささい（さざえカ）のつぼいりにて御酒也、是に箸をはうちふ申し候、このささい、佐賀関よりいつも参り候、三四澄まされ候、その次第のごとく、祇園会の山もわたり申し候、正月の松囃子も六月十二日の松囃子四番目元日に参り候間、中ころより臼杵へ越年申し候、それを迷惑がり候て鬨取りの時、殊のほか口よく申し候、このくじを取り候ものは、一町一町の地下おとなその年の山頭人罷り出で候て取り候、御台番六人出で候て、くじをとらせ候、惣じて一府（府内）の町人、先祖以来法体させず候事は、有力・無力をいはず、筋目の町人まわりまわりに町役仕り候、法体候へば、彼公役仕らず候条、望み申し候へども、到明寺殿（大友義鑑）代まではきびしく法式に候、近年は種々取り合せの方ども候て、多分有力の者共、法体仕り、右の役のがれ候条、相残る町人、殊のほか迷惑がり候、これも用捨鼠鼠の者候故、不肖なるものはくるしみ申し候、これまた然るべからざる儀に候

【1月29日 大おもて節】

膳くみ簾中の節同前、四目の金鳥と筏とのかわり迄也、嘉例に分国衆へ肴所望候、なかんずく、筑後・筑前・肥後より珍肴参られ候、悉く公文所調べられ候、よって調奉行おとなしき衆二、三人申し付け候、五、六日も公文所へ居られ、公文所談合申され候、上五目迄次三日迄、五百膳相調べられ候、

【6月15日 祇園会】

祇園会（弥栄神社）の事、六月朔日より宿老奉書を以て棧敷奉行を申し付け候、近年は大津留大和入道・田吹山城入道・松崎左京入道・木付治部丞にて候つ、屋形棧敷のむかうは蔭山（万寿寺）也、10間の棧敷也、左右は宿老はじめ、分限通りの衆次第次第也、諸寺家同前にうらむかへにかけてうち候、少身に候へども、筋目の衆多分打ち申し候、引き付けあるべし、又神輿をかき候ものは、往古より津守村公領内より出で申し候、山は四町より四本、万寿寺大工の山一本、山崎一本、惣大工一本、右七本は相定まり候、中ころより惣大工へ肴免候也、立願候へば、いか程も山をわたし候、往古は祈禱かたがた以て直ぐに一本立て申し候、かの調べ方は一郷一庄へ申し付け候その外かざり入り目等の儀は、奥の番、又

は藏方、ことにより公文所・細工所よりも出で申し候、社参規式の事、先ずさきに、房共、ついでかまにて、ほうを持ち候て、多人数参り候て、はつ式を仕り候、その次馬廐の者、これもついでかまにて引き申し候、火氈の鞍覆いを引き候、その次に兄部（このこうべ）長刀を持ち、その次小人5人、その内からをえらび、野太刀を持たせ候、その次猿蓑、その次広津掃部助弓靱にて参る、弓はしけとう也、靱は虎・豹の皮、又は何にても候へ、珍しき皮をかけられ候、熊皮又はかけ返しも苦しからず候、弓持ち候者、近年は宿老・与力、又戸次・高田給人の内、人体を選び申し付け候、その次奥参り候、奥は赤漆に赤銅の金物也、奥の左右に同朋、うちわ持ちは右の方へ、奥に添い候て参る、素袍のかみしろ・袴着也、この内に緒方給人原尻進上申し候、その次奥の番衆也、うちわの絵、せきはうとちやうりやう、両白に武者絵を描く也、奥の後は中間衆也、その次太刀持ち参り候、又刀を御奥の内に立て置き候、その次近辺の衆次第次第に供也、さて警固は一府政所役也、自然さし合い候へば、佐伯・南北の国衆まわりまわり申し付け候、警固は棧敷の前・左右に置き申し候、警固は早朝より罷り出で、帰館以後罷り帰る也、祭礼の規式諸郷庄よりこれを調う、税所よくよく存知候也、10間棧敷、笠和郷・山香郷にて一年替わりに調う也、

【7月14日 孟蘭盆】

公房様御代々・当家先祖各へ、供しもの相定め候、(中略)、公房様御代々・当家先祖、又は末々の一類は申すに及ばず、所々において戦死の衆・忠節の衆、過去帳に注し置かれ、ことごとく自身水を手向け候、到明寺殿（大友義鑑）までは、十四日五日諸寺家へ参り候て焼香候つ、近年白杵へ移り候故、名代にて候つ、灯笼の事は、兼日申し付け、両夜大門の左右に灯し候、これも奉行人四、五人申し付け、灯笼着到付けさせ候、十五日の夜灯し候て、以後皆々焼き捨て候、奉行は奥の番にて候、

【7月12日・26日 大風流】

十二日・二十六日、大風流あり、これも先祖の吊の儀也、中衆の風流と申し候は屋形風流にて候、市衆・町衆と申し候て、殿中衆二つ仕り候、又本庄・寒田代々一つ仕り候、地下人五つ仕り候、惣て四町にて候へども、風流ばかり古川の者格別に仕り候、またしとろと申す囃子物を戸次庄衆仕り候、これは風流の後仕り候、まわりに百人ばかり、烏甲大口そばつきを着し、大つつみにて、むてにはやし候、中に五十人ばかり、扇獅子を舞い候、何たる事も歌わず、はやすばかりにて候、(中略)、風流について、分限通りのものならじと候て、過分の振る舞いあり、豊饒の時は、是を専らに仕り候故、金銀の箔、ただに日本物のことは申しに及ばず、唐土・天竺・南蛮・高麗の綾羅錦繡を以て飾りたて、国に無相応の遊びにて候つ、彼といい是といい、風流かくのこと、永代とも停止肝要に候、風流以下こそりたる国都別はめつせざる事なし、後代よくよく分別入るべき事也、

【8月15日 放生会】

放生会（柞原八幡宮）社参の次第、祇園会同前也、(中略)、近辺に有り合い候衆、柄杓を請け取り、塩をくみ、御手水に進上申し候を、奥の内よりそのまま使い候、さ候へば、供衆悉く潮にて手水を使い、直ちにわなれ木近きなわてに、壘一壘敷き候て居候、これ大津留調え候、御供衆は左右にかわり、宿老は向のなわてに敷皮にて堪忍候、房は左右に罷り居り、政道申し候、さて、神御下り前に、大津留先の出で立ちにて、鹽冷酒持参候て、手水をかけ申し候、大津留は浜の検校也、神御下の儀式祭礼の次第相定まり候、よくよく宮師・大宮司記し置く也、御幸の時は神功皇后の神輿の後也、十五日還御の時は先也、随兵は立願候へば、公私共毎年も渡る也、大神宝会の時は馳走の衆定まり也、大神宝会の事、挟間村八百貫よりこれを調える、買い物は府内商人の内一人申し付け候、京都において相調える也、右村諸給人の事、往古は大神宝会前後三年づつは公役有免せしめ候、その故高崎城普請にも貫渥を相せんせられ、公役申し付け候、十四日五日社参申し候、

『大友興廢記』

杉谷宗重が著した豊後大友氏400年の歴史書。寛永12年（1635）に成立した。全22巻からなるが、内19巻が大友宗麟の時代の記述にあてられている。杉谷氏は代々佐伯氏に仕え、大友氏の豊後除国後伊勢に移り住んだいい、宗重は80歳をこえる父と同年輩の老翁から聞き取りして本書を著した。この興廢記は伝聞史料ではあるが、当時の史料で裏付けられることも多く、ある程度の信憑性がある。ここでは大友館、中央政権との関係、府内の商人などに関する記述を抽出し、現代語訳した。

【大友家年中儀式の次第】（巻1） 館の儀式

- 一、12月、立冬前の土用が明ける夜、御屋形様が広間にお出になり、屏風の陰で少し眠られる。近習の侍、御膳番はみな広間に居並ぶ。少し眠られている間に、その夜の当番衆は物まねをする。一人は鶏の物まね。「日本国の富と宝物を取ってこうろう」という。その次の一人は犬の物まねをする。「私は門を守っている。あなたはどこの国からきたのか。びょうびょう」という。その後「夜が明けました」と申し上げ、御屋形様を起こして差し上げる。その時、銚子を持ってきてお酒を飲まれる。その次に餅売り、饅頭売りのまねをする。昆布売りのまねをする者は、昆布が取れた場所がいかにすばらしいかをいいながら、扇で膝をたたき、足で拍子をとる、色々な曲を踊って昆布を売る。これを見ている者は皆笑う。役者は恥ずかしがり、お互いにどっと笑う。本当に賑やかな儀式である。
- 一、元日から3日まで、府内の町から松ばやしが館に来る。松ばやしとは眉を書いた稚児が多くの衣装を着て、羯鼓（雅楽で使う打楽器）を打ちながら踊る。笛や鼓、太鼓で拍子をとる。
- 一、11日の早朝に老中が出仕してくる。（中略）次に御評定初めが行われる。その後御能初めがあり、「弓八幡」一番が演じられる。大夫は松満、毎年恒例である。奥方さまから薄物の小袖が大夫に下賜される。上級家臣たちも着ている小袖・狩衣・袴などを大夫に褒美として与える。
- 一、1月11日に府内から松ばやしが来る。三が日と同じである。また同じ日に上の原から獅子舞が来る。獅子の幕は金欄でできている。笛・小鼓・太鼓・太鼓でお囃子をとる。
（中略）
- 一、19日、奥方様から御屋形様と重臣、近習衆へ料理が振舞われる。
- 一、29日、御屋形様から上級家臣・近習衆へ料理が振舞われる。
- 一、3月3日家臣から御屋形様へ食材が献上される。山間部からの献上品は、雉・山鳥・兎・狸を百ずつ、何本もの長い木につけて、その木を一人一人肩ののせて出てくる。小鳥も百ずつそろえ、鳥獣を付けた木に接いで出てくる。またその時々のお菓子を同じ髭籠に入れ百ずつ木に付けて、それをやはり鳥獣の木に接ぎ、その接ぎ目を一人ずつ肩ののせて出てきて、広庭を3回廻り、その後で台所に納める。田北からの献上品はこれに木に付けた白兎一匹が加わる。白兎は朽網山におり、毎年1匹ずつ捕まえる。また、海岸部からの献上品は魚と貝類などで木に付けるのは同じである。
- 一、5月5日家臣からの食材献上がある。儀式は3月3日と同じである。
- 一、6月1日家臣からの食材献上がある。旬の品々が献上される。儀式は同じ。その後獅子舞がある。
- 一、6月14日は祇園会で、神輿が巡行する。京都祇園会と同じように山車が出る。同日松ばやしが来る。
- 一、8月1日、支配下の国々から馬が献上され、広庭につながる。
- 一、同月15日、由原八幡宮の神事(放生会)がある。由原から一里離れた生石に御旅所がある。上級家臣は馬に乗り、同じ衣装で神輿のお供をする。また、御随兵といい徒歩でそれぞれの衣装で二人ずつ並んで神輿に付き従う。61年に一度大神宝会が行われる。神輿は六年に一度新調され、古い神輿は国内の八幡社に下げ渡される。国主は生石の近くまでお出になり、棧敷席で見物される。左の上座には小笠原氏、右の上座には田村氏、いずれも公家衆が座り、上級家臣たちはそれぞれの位により座席が決まっている。
- 一、おなれきり、10月亥日のお祝いは寒田の家臣が勤める。3寸(約10cm)ほどの餅に五色の衣をつけ、これで包み、菊の枝一本を添えて、亥の日のお祝いに伺候した武士に下賜される。これを「おなれきり」のお祝いと呼んでいる。

【大友家政道の事】(巻4) 館及び町の定め

(前略)

- 一、大手門より内側では、志賀・佐伯・田村・臼杵の四家以外は輿と馬に乗ることは堅く禁止する。
- 一、府内において、昵近の武士以外は長草履・木履の着用は禁止する。ただし、出家した者は除く。また、医師・六十歳以上の者・女性も許す。庶民は足半草履を着用すること。

【宗悦成立の事并道雪物語の事】(巻10) 府内商人

豊後府内の町人に中屋宗悦という豪商がいた。府内に居住しながら、大坂・堺・京都の中心部に屋敷を持ち、一族の者や使用人を代理として派遣していた。中国船が入港してきた時には、最初に船荷の口開きを担当し、普通京都や堺の大商人が共同で買い取るところを、宗悦一人で大半を買い取るほどの豪商であった。(中略) 元来府内の者で酒を海辺の地域に行商していた。

【信長公鬼月毛という名馬を豊後へ遣わさるる事】(巻11) 中央

永禄年間の末、織田信長が天下の実権を握り、その威信を国内に広げる勢いが聞こえてきたので、豊後より大友宗麟公はお祝いのため使者を派遣した。その後、信長より鬼月毛という名馬が贈られてきた。この馬の顔つきは普通の馬より大変長く、8・9寸(約24~27cm)もあり、骨太で筋肉が盛り上がっていた。眼は朱をさしたようにいつも怒っており、常にいななき、足を動かし、歯ぎしりをして、人にも馬にもかみ付くので、鬼月毛と名付けられた。宗麟公はこの馬を誰か乗りこなせと命じられた。元室町幕府13代将軍足利義輝の近習であった小笠原晴宗の息子大学兵衛は究極の荒馬乗りで有名であった。誰もが彼でなければ乗りこなせないであろうというので、宗麟公は大学兵衛に命じられた。翌朝大学兵衛が馬場で待っていると、鬼月毛には金覆輪の黒い鞍を置き、紅の大房に真紅の綱を八本つけ、舎人八人、さらに鎖を二本付け、合計十人で引き出したが、とてもおとなしくせず、大きな声でいなないて飛びはねて馬場に入ってきた。宗麟公もお出になり、諸侍や町人なども多数見物に集まり、あたりは騒然としていた。大学兵衛は6尺あまり(約180cm)の大男で、ゆらりと鬼月毛にまたがると、手綱をしごいて、さまざまな馬術の秘術をつくして、これを乗りこなした。宗麟公はたいへん感心され、大学兵衛の父晴宗へ使者をだし、酒肴などを贈られた。馬は大学兵衛に預けられ、いよいよ脚が早くなり、九州随一の名馬となった。鬼龍馬の飛ぶような姿を見ようと、調教の日には見物人が多く集まった。その速さは七町ほど(約760m)の馬場を人が四、五回呼吸する間に簡単に往復するほどの駿足であった。

【治国数の事并唐船渡海の事】(巻13) 貿易

天文10年(1541)7月27日、中国船が豊後神宮寺に入港し、中国人280人がやってきた。同12年8月7日には5艘入港。同15年には佐伯の浦にも来航した。中国船は永禄年間には幾度となく入港した。天正3年(1575)の夏には臼杵に来航し、数々の珍物をもたらした。まず猛虎4匹に、大象・孔雀・オウム・麝香猫などである。それ以外にも絵画や名筆の書、綾錦、沈香、狸々の皮などがあつた。

【遣唐使の事】(巻13) 外交

天正12年(1584)の夏、大友宗麟公は家臣の内植田玄佐を中国に派遣した。金銀などさまざまな贈り物をつけ、玄佐は1艘の船で数千里の海を渡り、中国に到着し、皇帝に宗麟からの書簡を差し上げた。皇帝はこれをご覧になり、日本からの正式な使節と同様に待遇した。

【流言の事】(巻13) 貿易

天正4年(1574)の夏、南蛮国から大砲が到来した。肥後国から修羅(木のそり)で臼杵の丹生島城まで運ばせた。宗麟公はたいへん喜ばれ、この大砲を国崩しと名付けられた。その後、誰言うことなく、南蛮国より届いた大砲を国崩しというのはよいことでないと国中で噂となった。

【宗麟公御所持の茶湯道具并絵讃名物の事】(巻13) 館・宗麟

※この項目では大友氏が所持していた茶道具と絵画が書き上げられている。それを一覧表に整理した。

1. 茶道具

番号	品名	種別
1	似たり茄子	茶入
2	二見	水差し
3	志賀	茶壺
4	肩衝(新田肩衝)	茶入
5	花真壺	
6	せいかくの壺	
7	肩衝有明	茶入
8	瓢箪茶入(大友瓢箪)	茶入
9	珠光茶碗	茶碗
10	驢蹄茶入	茶入
11	小肩衝	茶入
12	肩衝	茶入
13	大肩衝	茶入
14	文琳小茶入	茶入
13	合子	合子
14	束之肩衝	茶入

2. 絵画

番号	作家名	作品名
1	牧 谿	漁夫の絵
2	玉 潤	市の絵
3	玉 潤	青楓の絵
4		枯木の絵
5		古木の絵
6	仁 斎	梅竹の絵
7	印陀羅	不明
8		釈迦三幅
9	舜 挙	花鳥図
10	雪 潤	長文珠の絵
11	虎 堂	墨蹟
12	恵 崇	山水図
13	楊月潤	竜虎の水墨画
14	張思恭	釈迦三幅
15	李安忠	鷹図
16	葵 山	猿図
17	任氏明	花鳥図
18	顔 輝	達磨図
19	怒 斎	松竹梅図

【骨啄刀の事】(巻18) 中央

宗麟公が所持していた吉光骨啄の刀は、世に隠れなき重宝である。嫡男義統公へ譲られていた。これを太閤秀吉公の御前で、宮内卿法印と千利休が披露したところ、秀吉公は昔より国を治める者は名譽の劍を持つとされる。ぜひ、その骨啄の刀を所望したいと仰せられた。そこで、宮内卿法印と千利休が天正17年(1589)内々に手紙を出し、大友家が所持している骨啄の刀のことを秀吉公が聞きつけられ、所望したいようだ、献上できるでしょうかと問い合わせた。義統公はこれを知り、早速献上するように返事なされた。そして、使者に持たせ進上した。秀吉公の喜びようはたいへんなものであり、使者を豊後へ派遣し、その書状には以下のものであった。(書状略)

この骨啄の刀は大友家代々の宝刀である。建武3年(1336)の頃、足利尊氏が九州に下向した折、大友6代氏時は尊氏に味方し、この刀を尊氏に献上した。骨啄というのは、戯れに人に向かって切るまねをただけで、骨がくだけてしまうところから名付けられた。尊氏はこの刀を得て、將軍位を得ることができ、代々足利將軍家の家宝となった。ところが、何れの頃か多賀豊後守が所持していた。永禄8年(1565)5月19日、三好三人衆・松永久秀らが13代將軍足利義輝を謀殺した際、多賀豊後守は戦死し、松永久秀がこの刀を得て、秘蔵することとなった。この刀は大友家先祖伝来の家宝であったので、久秀へ使者を派遣して、金銀約3000両で譲り受けたいことを願い出た。久秀は未練があったものの、その頃宗麟公は九州六カ国を治める太守であったので、これを受け入れて、刀を宗麟に差し出した。(中略)骨啄の刀は、建武の頃から永禄8年まで229年の年月を経て、ようやく大友家に戻ってきたというのに、今秀吉公に献上したのは、大友家衰退の始まりか、おぼつかないことだと人々が噂した。

イエズス会宣教師の主な記録

キリスト教の日本布教に携わったイエズス会の宣教師たちが海外に発信した書簡や報告書が伝わっている。また、その一人であったポルトガル人宣教師ルイス・フロイスが、晩年にそれらを基に初期の日本布教についてまとめた著書『日本史』がある。ここでは、これらの中から大友宗麟や戦国時代の豊後府内に関する主な記述を抜き取り、年代順にまとめた。宣教師の記録は、かなり誇張や矛盾した記述がみられるものの、日本側の史料にはない内容も記述されており、当該期の歴史を知るうえで貴重な史料といえる。

なお、書簡・報告書については『十六・七世紀 イエズス会日本報告集』（松田毅一監訳 同朋舎発行）から、『日本史』については『フロイス日本史』（松田毅一・川崎桃太訳 中央公論社発行）から引用・掲載した。また、本文中の（ ）は訳者の注記で、[]は編集に際し説明のために加えた。

1 天文14年(1545) 【貿易】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P96)

……予〔大友宗麟〕が十六歳の時、父なる国主(大友義鑑)と共に府内の市にいたが、予はキリシタンになる希望を抱いた。思えば、デウスが今になってこの(キリシタンになる)恩恵を授け給えるのは、当時予が行なった小さな奉仕に端を発しているのであろう。その頃、府内近くの港にシナ人のジャンク一艘が、六、七名のポルトガル商人を乗せてやってきた。その内、重立っていたのはジョルジェ・デ・ファリアという裕福な人であった。……その後、当地にディオゴ・ヴァスと称するポルトガル人が来た。彼は当地に五年間滞在し、すでに日本語を理解し話していたが、この人は絶えず一冊の書物もしくはコンタツをもって午前と午後に祈りを捧げていた。

2 天文20年(1551) 【貿易】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第4巻 P351~P352)

……シナから日本へ定航船が来航するようになった当初、一人のポルトガル人が三年間予〔宗麟〕の庇護のもとにあり、彼は予の兄弟である山口国主〔大内義長〕が鉄砲により一方の腕に受けた傷を治療した。予は絶えず本心を覚られぬよう隠して、彼にポルトガルとインドの状況や政治、特に修道士の規則と生活について詳しく尋ねた。予はそのポルトガル人の語ったことが真実と異ならぬかを確かめるため、二十六年前に予の異教徒なる一家臣をインドに派遣した。同人はかの地で見たことにより(触発され)キリシタンになって戻ってきたが、彼によりポルトガル人が語ったことは実際よりも控え目であることが判り、このことを伴天連方の愛により確かめた。この伝言を持参するキリシタンはその名をロレンソ・ペレイラといい、正しく二十六年前インドに行った彼本人である。

3 天文21年(1552) 【貿易-航路】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P108)

……同月〔1552年8月〕の二十二日、その地〔種子島〕より、一艘の小舟に乗って、豊後と称する国へ向かい、船上では多くの危険に見舞われたが、主(なるデウス)は片時も(我らを)見放さなかった。九月七日、豊後の市に到着すると、国主〔宗麟〕は(家臣に)命じて我らの宿泊する家一軒を我らに与えさせた。翌日、我らは彼のもとを訪ねたが、彼は偉大な領主であり、多数の家臣を有していた。我らはインドの副王からの贈物である板金製の胴衣一着と、そのほかの品々を持参したが、彼はこれにたいそう喜び、我らを大いに歓待した。

4 天文21年(1552) 【貿易】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P108~P109)

……我らは殿下〔宗麟〕がインドの副王に書状をしたため、この創造主の教えを説くため渡来する司祭らを領内に迎えるであろうとの旨を伝えられたことを知っており、……殿下よ、御賢察あれ、もし、殿下が我らを領内に迎えようと望まれるならば、そのための命令を発せられたい。……国主〔宗麟〕は、我らの語るところを甚だ好ましく聴いて答え、山口にはすでにキリシタンがいて、司祭が在留していることを知っているが、自領にキリシタンがいないのは非常に遺憾であり、……また、インドの副王と度々書簡を交わすことを望むが、書簡をしたためる上で仲立ちとなるべき司祭が領内にいなければ、書簡を

発することができず、インドの人々も彼と通信することができないので、われ等が彼の所領に留まってキリシタンをつくるため援助するであろうと述べた。

5 天文22年(1553) 【貿易】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P110~P111)

・・・一五五三年二月四日、バルタザール・ガゴ師とジョアン・フェルナンデスが出立し、私も彼らと共に豊後へ向かい、同月の十日に到着した。司祭はさっそく、国主〔宗麟〕に会いに行き、国主は彼に休養するように伝えた。翌日、司祭は再び彼のもとを訪れ、インドの副王への書状をしたためた。この書状により、(国王は) 彼が贈った品々に対して謝意を表し、自国に訪れる司祭らを大いに庇護し、彼らに住居を与える旨を伝え、さらに、司祭が領内に在留することに満足しており、ポルトガル国王がインドに遣わした総督や副王と通信するための手立てを、司祭の仲介によって得た次第や、これを久しく以前から希望しながら、書状を送る際の仲介者がいなかったために、今日までなし得なかったことを知らせ、また、何事においても、ポルトガル国王に仕えることが望みであり、今は従前よりもいっそうそのための準備が整っているので、領内でキリシタンを作るための司祭を派遣して便宜を計ることを要請した。

6 天文22年(1553) 【府内一町】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P111~P112)

・・・我らが山口より豊後に到着した時、国主を殺そうとする三人の有力な大身のため同地は騒乱状態にあった。そして、一五五三年の四旬節の第二日目になると、騒ぎはいっそう由々しい状態になり、・・・その一人は名を服部(右京亮)殿(Fatorindono. F. Fattoridono)といい、ほかの者は一万田(鑑相)殿(Hichimandono. F. Ychimadadono.)、ならび宗像(鑑久)殿(Enucamadono. F. Nucamadono.) といって、称号を有する大身であったが、国主は彼ら、および妻子、親戚の全員と、そのほか多数の人々を殺させた。・・・間もなく、謀叛人の家々に火が掛けられ、これが大いに広がったので、商人や貴人の家およそ三百軒が焼け、火は我らの財貨を置いた家にも迫った。

7 天文22年(1553) 【府内一職人・暮らし】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P114)

・・・鍛冶職人である他のキリシタンはデウスのことに非常に熱意を注いでいるので、絶えず街頭で説教しているが、誰かキリシタンになることを望む者があると、すぐさまその人をキリシタンにするため、司祭のもとに連れて来るのである。彼の熱意は一通りでなく、日本人が大いに威儀を正す日に、ふいごと炭を持って、我らの修道院に仕事をしに来た。・・・私はすでにキリシタンであって、創造主の教えを奉じており、ポルトガルの司祭たちの住まいのために釘を造るのであると答えた。他の身分あるキリシタンは、我が修道院を建てる際、労働に携わることはできないが、自分たちに可能な仕事をなすであろうと言い、炉を幾つか入手すると湯を沸かし、働く日本人のために、彼らが日頃飲んでいる粉を混ぜた物(Connfeiqao)を作った。これにより、彼らは他のキリシタンが石を運ぶのと同じ働きをした。

8 天文22年(1553)～同23年(1554) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P114)

・・・この修道院は、国主〔宗麟〕が本年我らに与えた地所に建てられたが、はなはだ好適な場所にあった。司祭は、一五五三年のマグダレーナの(祝日の)前日の金曜日、同所に非常に高い十字架一基を立て、キリシタン一同とポルトガル人二名がその場に参列したが、これをキリシタン宗団は多大な熱意を込めて行った。当市および、その近郊のキリシタンは六百、乃至七百人であり、デウスの教えは大いに弘まりつつある。

9 天文22年(1553) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P244)

・・・尊師もご存知の通り、当修道院は彼〔宗麟〕が我らに与えたものであるが、かつては彼の家であり、すべて杉材で造られている。もし我らがこれと同じものを造ろうとすれば、二千クルザードをもってしても果たし得ないであろう。

10 天文24年(1555) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P188)

・・・本年(1555年)、当地にいるルイス・デ・アルメイダは、ここ豊後の慈悲の聖母の修道院のために、貧者の病院に寄付を行なうほか、麝香に投資する百クルザードをポルトガルに送付している。この金子はリスボンにいる司祭らに宛てたものであり、これによって、なしうる限り優れた絵と細工の彫像を作らせるためである。彼は作るべき彫像と額について書状をしたため

ている。我らの主（なるデウス）への愛により、右の伝言（書簡）がかの地に届いたならば、それに従って影像が製作され、この豊後の教会に届けられるよう、彼ら（司祭ら）が責務を果さんことを。

11 弘治2年（1556） 【府内教会】 （『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P236～P237）

・・・我らは同国主〔宗麟〕の同意を得て、広くて好ましい地所を購入した。この地所は、かつて国主が我らに与えた別のはなはだ良い地所の側にある。我らは、国主がこの豊後においてパルタザール・ガーゴ師に与えた他方の地所を二つに分け、一つは死者のために用い、いま一つには国主の許可を得て病院を一軒設けた。国主や領内の人々はこれを大いに喜んだ。その病院は二つに区分されており、一方は当地に数多く見られるレブラ患者に当て、他方は種々の病人のために用いられる。

12 弘治2年（1556） 【宗麟一臼杵】 （『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P250）

・・・（主君に対して）密かに企てられた謀反のために人々は動揺したので、来訪者はそれほど多くなかった。我らが到着する数日前、国主（大友宗麟）は謀反を指図した大身数名を殺させ、彼自らは安全に対処するため、或る城のような島〔臼杵丹生島〕に引き籠った。

13 弘治2年（1556） 【府内病院】 （『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P254～P255）

・・・司祭は当地の窮状を見て、病院を建てれば我らの主（なるデウス）へ奉仕することになるであろうと考えた。彼らはそれを良いことだと知ってはいるが、貧者と交わることを穢れや卑しいことと考えているので、病院は彼らの間では新奇なものである。我らがその件を国主〔宗麟〕に話すと、彼はすでにそうすることを決心していたが、機が熟していなかったので実行しなかったのだと言った。我らは直ちに実行に移し、今教会がある地所に隣接し、かつての教会があった所に、二室を有する大きな家屋を建設した。

14 弘治2年（1556）頃 【府内一暮らし】 （『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P256）

・・・この頃、全市で自警が行なわれ、我らも同じことを始めたが、我が誓は神の御加護にほかならないことは我らの主（なるデウス）が知り給うことである。警護のため、キリシタン数名が修道院に来て泊まった。

15 弘治3年（1557） 【府内一暮らし】 （『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P259～P260）

・・・復活祭の翌日・・・（その日は）特定の大きな祝祭の日であったので、我らはすべてのキリシタンを（食事に）招いたが、およそ四百名余りであった。というのも、彼らの多数はすでに立ち去り、またほかの多数も、山の人々なるが故に来なかったからである。この食事のために我らは牝牛一頭を買い入れ、その肉とともに煮た米を彼らに出したが、皆大いに喜んで食した。

16 永禄元年（1558） 【府内病院】 （『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P288）

・・・ここ豊後の市に我ら二つの地所を有している。すなわち、（一つは）下の地所で、ここには当初一軒の家屋を建てて教会としたが、今は当地の病やそのほか各種の傷を負う者の病院になっている。また、この地所のすぐ向いに、本年、他の種類の病のため、石を土台とした木造の大きな家屋を一軒建てた。その家の中央には祭壇が据えられている。・・・同家屋はそれぞれの側に八つの病室を備え、患者が多い時には十六名を収容することができ、各室には戸があって閉ざされるようになっている。また、この家屋には隣接した住居が一つあり、病人の世話をする医員に供せられている。家屋の周囲には縁側があって、病人は皆ここに出て公に治療を受ける。これは外傷患者に対するもので、そのほかの内科の薬（*mezinhas de fisica*）については一人の年老いた日本人がいて、適宜、薬を与えることに専念している。

17 永禄2年（1559）頃 【府内病院】 （『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P276）

・・・病院の事業は、当地方にこのような慈善事業がないため、日本全土にとって少なからず（伝道の）鐘になっている。・・・我らの薬は主の思召しにより驚くほど病に効く。十五年、二十年と病にかかった人が三十日や四十日で健康になるほどであり、この種の人は数多くいるので、五十里、六十里の所から人々が当病院へ治療に訪れ、この噂はすでに都にも広まっている。・・・土地の主だった者の内、貴人や仏僧らが治療に訪れる。この夏、六十名を超える人たちが大病から快復した。

18 永禄3年(1560)頃 【府内一暮らし】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P345)

・・・当地にある我らの鐘によって定例の祈祷の時刻を知らせていたが、跪いて祈祷する際の信心があまり強いので、・・・一人のキリシタンが私に語ったところによれば、数日前、彼が己れの年少のキリシタンの侍女に少量の酒を店に買いに行かせたところ、酒を凶っていた時にアヴェ・マリアの鐘が鳴り、彼女はこれを聞くとすぐさま酒の壺を置き、跪いて祈り、パーテル・ノステルとアヴェ・マリアを五回唱えるまで立ち上がらなかったということである。

19 永禄3年(1560)頃 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P351)

・・・当修道院には六名の日本人がおり、四名は大人で二名は子供である。大人の一人はロレンソという名で、ガスパル・ヴィレラ師とともに都にいる。ベルショールと称する他の大人はルイス・デ・アルメイダ修道士に伴って行った。この兩人については後で述べるであろう。四名は我らとともにこの豊後に滞在している。大人も子供も彼らの言葉に翻訳した福音書や説教の大部分を暗誦する。・・・大人の内パウロと称する者は医師であり、我らとキリシタン、ならびに(治療を)求めて来る異教徒のために必要な薬を調合することに従事しているが、それ故に報酬を受けることはまったくない。

20 永禄3年(1560)頃 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P359)

・・・これ[朽網の教会]は国主[宗麟]の宮殿であった当市の教会に勝るとも劣らず立派なものである。

21 永禄3年(1560)以前 【教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第2巻 P19)

・・・我らは日本に教会を九つ有しており、もっとも小さいものは三百名のキリシタンを、またもっとも大きいものは二千名を擁しているであろう。この内の四、五カ所は従前、仏教寺院として使われていた固有の家屋であり、今では我らの主なるキリストと聖母の像とともに祭壇が飾り付けられている。博多の市ではコスメと称するキリシタンが自らの費用で新たな教会を一カ所建立し、これには三百クルザード費やしたであろう。

22 永禄4年(1561) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P370)

・・・今や日本の中心である豊後の教会については、主の御慈悲により、すでにキリシタンになっている者、ならびに新たになろうとしている者が非常に増加している。

23 永禄4年(1561) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第1巻 P371)

・・・夜になると、多数の蠟燭を伴う行列が、我が修道院の下の地所にある慈善院まで行なわれた。同所には今、立派な十字架一基が建っており、その周囲には石の段が据えてある。人々はそこにしばらく留まって祈りを捧げ、教会には墓を警護する日本人らが武装して留まった。

24 永禄3年(1560)～永禄5年(1562) 【貿易】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第2巻 P22)

・・・我らの友人である豊後の国王(El Rei)(大友宗麟)は、我が主君なる国王が幼少であることを知ったので私のもとを訪れた時、国王宛てとして一振りの立派な短剣を私にこ^もとずけた。これには金の蛇状の飾り紐を巻き、甚だ良い趣向の飾りを施した鞘が付いており、同様に(インド)副王宛てには一振りの剣を贈った。これらはすべて先の暴風雨において損傷したので修理のため日本に戻されている。当(一五)六二年、インド副王(に)武具を幾つか贈った。すなわち、絹で飾り金を塗った、立派な造りの美しい鎧が数体と頸甲、その他の附属品に加えて、戦争に用いる銅製の面が一つ、金を塗って飾りを施し、幾つか鍔の付いた兜が一つ、両手で用いる太刀のような長刀^{ながなた}が二本であった。この長刀とは剣を付けた長さ一ブラサ以上の柄に装飾を施して銀を塗ったもので、副王伯爵はこれをたいそう喜んだ。

25 永禄5年(1562) 【府内病院】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第2巻 P31)

・・・この我らの病院(espiritual)には、日々治療に来る者の外に百名以上が収容されており、我らの主なるデウスは寛大な恵みを垂れ給うて、差し迫った病のため生きる望みを失った多くの人々に完璧な健康を授け給うた。

26 永禄5年(1562) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第2巻 P32)

・・・目下、私は病人を治療したり、また、デウスが嘉し給うて完全なる荘厳さのもと諸聖儀がなされるよう、当修道院にいる日本人とシナ人の少年十五名に読み書きや歌、ヴィオラ (violas darco) を教えることに従事している。

27 永禄6年(1563)頃 【宗麟】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第2巻 P122)

・・・この日本地方は主たる二つの島から成っており、両者は三分の一里ほど隔たっているであろう。この第一の地域に三人の国主がいる。彼らは実際に国主であり、そのように呼ばれている。その第一にして最も有力なのは豊後の国主(大友宗麟)である。すなわち、十万の兵士を動かすことによる。残る二人は有馬の国主と薩摩の国主であり、薩摩には我らのメストレ・フランシスコ(・ザビエル)師が一年間滞在した。

28 永禄6年(1563)頃 【宗麟一臼杵】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第2巻 P141)

・・・彼[パウティスタ師]は臼杵の町に国主[宗麟]を訪ね、国主は彼に会って深い満足の意を表し、いつものように歓待した。

29 永禄6年(1563)頃 【宗麟】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P87~P88)

・・・この豊後国主[宗麟]は同宗旨の庇護と知識において己が名声を広めることを望み、そのために都にある紫(野)と称する禅宗の中心的僧院(大徳寺)に立派な建物(瑞峯院)を造り、その維持のため当地より多額の収入を充てた。また、当地臼杵の城の前にも非常に立派な僧院(寿林寺)を別に建てたが、これには多額の経費をかけ、同所に住ませるため都から著名な学者(怡雲宗悦)らを迎えた。

30 永禄6年(1563) 【中央】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第2巻 P306)

・・・諸国王の間に不和が生じると、公方様[足利将軍]は調停のために彼らを使節として派遣するのであり、彼らはこれによって多額の金銭を得る。二年前、豊後の国主[宗麟]と山口の国主[毛利元就]の和睦を調停するために豊後に赴いた一人は、協定の際、豊後国主が山口国主から奪った二カ国を取得しうよう便宜を計ったことにより、(豊後国主は)三千クルザードもしくはそれ以上を(その公家に)与えた。

31 永禄8年(1565) 【府内】【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第3巻 P37)

・・・当豊後[府内]の修道院は我らが日本に所有するもっとも古い修道院である。本年、当地には司祭二名と修道士二名が駐在している。ここ[府内]は日本でも大きな市の一つであり、はなはだ人口が多く、キリシタンになる者が絶えないので我らの主(なるデウス)への奉仕が少なからず行なわれている。

32 永禄9年(1566) 【府内】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第3巻 P224)

・・・豊後の市[府内]で異教徒の祝祭があり、国主[宗麟]は居住地から同市に赴いたが、祝祭が始まると国主は慣例に従って招待され、豊後の教会に来た。・・・司祭が臼杵の町の新教会から豊後の市の教会に向いて同所の修道院で国主を歓待しようとした時、囃らずも国主の娘たちが新教会を見るため臼杵に赴くことを望んだが、その時、同教会には説教師が不在であった。

33 永禄10年(1567) 【貿易】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第3巻 P253)

・・・もし予[宗麟]が山口の国主[毛利元就]に対して勝利を望むとすれば、それは司祭らが当初、受けていたよりもいっそう望ましく、かつ多大な恩恵をもって彼らを再びかの地に入らせるためであり、予の望みを実現するには貴下の援助が必要である。すなわち、それは硝石が当地に来ぬよう、いかなる手立てによっても禁じることであり、ただ予の領国を防御するため、カピタン・モールに命じて毎年予のもとに良質の硝石十ピコを持参させることである。予はこれに対して百タエル、もしくは貴下が命ぜられるものを与えるであろう。

34 永禄11年(1568) 【貿易】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第3巻 P257)

・・・貴下、および(イエズス)会の司祭らの仲介により(インド)副王が大砲一門を(予に)贈ったことを聞いたからである。同大砲はマラッカからの航海中に失われ、これは予〔宗麟〕の不運であったが、あたかも大砲が無事に届いたかのように貴下のお蔭と感謝している。大砲が予のもとに届くという当方の幸運は失われたとはいえ、それがために別の大砲を受け取る希望を棄ててはいない。・・・予が再び大砲を求めるのは、予が海岸にあって敵と対峙しており、防衛のために大砲を大いに必要としているからである。

35 元亀2年(1571)以前 【府内一寺院】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第4巻 P146)

・・・豊後国には国主〔宗麟〕が住んでいる府内(Funay)の市に多数の大きな僧院があり、とりわけ二つの僧院はきわめて美しいものである。そのうち一方は百五十名の仏僧とはなはだ収入の豊かな一宇の御堂を有する。創建以来かなり時を経ているので新しくはないが、境内は非常に広く、内部には果実や花(rosas)、目を楽しませる種々の物を用いた庭が数多くある。この僧院は豊後(歴代)の国主たちの墓であり、このため収入に恵まれている。・・・もう一方の僧院もこれほどではないにしろ非常に大きく、五十名の仏僧を有する。彼らは禅宗と称する宗派に属しており、生死以外に何も存在しないと考へ、これを説いている。・・・この寺院には幾つか古い偶像があり、門の入口には非常に大きく恐ろしい木造の巨人像が二体ある。・・・(寺院の)内には庭や草木、数々の花があつて爽快であるが、とりたてて述べはしない。・・・当市には尼寺が二つあり、その一方は高貴な婦人のためのものである。・・・もう一方の尼寺は仏僧らの寺院に隣接しており、或る祭礼においては夜間に仏僧と尼僧らは各々の側に(別れて座し)声を合わせて祈りを唱える。朝晩の祈禱が終わると、すべての仏僧は尼僧とともに寺院内の祭壇前に進み出て、我らがイエズス・マリアと称えるように彼らの偶像の名を称えながら踊る。また、全員がそのために作られた鉢を鳴らし、この音に合わせて踊る。

36 天正6年(1578)頃 【中央】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P76)

・・・(信長の船は)大砲三門を備えているが、これがどこからもたらされたのか私には想像もつかない。何となれば、豊後国主(大友宗麟)が鑄造させた数門の小型の砲を除けば、日本の何処にも他に砲がないことを我らは把握しているからである。

37 天正6年(1578) 【宗麟】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P99~P100)

・・・彼〔宗麟〕は聖フランシスコの日、奥方ジュリアと共に、はなはだよく調った大きな船に乗って土持領に向け出発した。その船には、白い緞子に赤い十字架と錦糸で飾りを付した旗と多数の十字架の軍旗を備え、彼や同乗した武士は老いも若きも皆、コンタツを携え、頸に影^{グェロニカ}像を懸けていた。相当の艦隊がこれに同伴したほか、多数の大身が彼を迎えるため、陸路によってかの地に向かった。

38 天正6年(1578) 【宗麟一義統】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P100)

・・・豊後の嫡子(義統)について述べねばならないが、彼はこの国々の継承者で、すでに二年以上前から統治している。年齢は今、二十二歳前後であろう。家臣を寛大に扱うので人望はきわめて厚い。

39 天正6年(1578)頃 【府内一暮らし】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P105~P106)

・・・府内の市には、豊後に従属する国々の中でももっとも名高く立派な祭りが二つある。その一つは戦の神である八幡に、また、いま一つは他の神に捧げるものである。国主〔宗麟〕はいずれの祭りにも、絶対の義務により、赴いて行列に加わらねばならない。第二の祭りでは、彼は四、五万の武装した兵を伴い、己が威厳のいっさいをもって臨み、盛大な儀式を行なう。嫡子が第一の八幡の祭りに赴く時に至り、国主と嫡子〔義統〕は府内に向けて当所を出発した。異教徒は誰しも、国主と嫡子が共に行列に加われば、祭りに与える恩恵はさらに大きくなるであろうと考えたが、国主と嫡子は邸を出ると教会へ午餐をとるため赴いた。彼らは同所で修道士らと楽しんで当日を過し、祭りについて少しも話さなかった。たちまち人々は互いに二人はキリシタンになるため修道院に行なつたのだと言い、彼らの祭りを少しも意に介さないことを大いに悲しんだ。第二の祭りになると嫡子は行くことを望まず、第一の祭りに加わらなかったこと以上に人々を驚嘆させた。

40 天正6年(1578) 【宗麟-田原親賢】 (『フロイス日本史』7 P223~224)

〔田原親賢は(敵と)最初に遭遇した時のこと、親賢はまだ自分の陣営に籠っていたが、槍や刀の噪音、鉄砲の轟音、襲撃する者どもの喊声を聞くと〔彼は一同からこの上もなく嫌われていたとはいえ、(国主〔宗麟〕の)奥方の兄弟、国主の義兄弟、嫡子〔義統〕の伯叔父、また国の全老中のうち統治上の最高権威者といった高貴な身分にある者として〕、合戦においては真先に立ち向かい、そして上記の身分からしても、ふつう日本人が戦において示すように、あらゆる英雄的行為において万人に秀でるよう務める(べきところ、そうする)どころか、心の底まで卑劣で下賤で恐怖心にとりつかれており、己れに課せられているあらゆる義務のことも、衆人の目が自分に注がれていることも忘れ果てた。・・・後ほどその友人である臼杵の一キリシタンにその時の心境を語ったが(それによると、当時彼は)恐怖のため胆をつぶし怯え切り、少しばかり脇道に入って血尿をもよおしたくらいであった。

41 天正6年(1578)頃 【府内-職人】 (『フロイス日本史』7 P288)

・・・(国主〔宗麟〕は)著しい(霊的)利益をもたらす一工夫を愛好する習わしがあった。それは^{レリカリアオス}聖遺物入れとか立派なメダいや、多数の美しいコンタツを絶えず製作させることであった。そしてそれらのあるものには、金の縁や十字架を付けたほどであった。

42 天正7年(1579) 【府内】 (『フロイス日本史』7 P261~P262)

・・・(一五)七九年一月十一日に、〔田原〕親宏は司祭の許に使者を寄こし、(それによって次のことが判明した)・・・(老中たちは)幾つかの覚書を作成し、それを嫡子〔義統〕のところに届けることに決めた・・・それ〔覚書〕らはすでに〔田原〕親賢の要請に基づいて、他の老中たちに署名されている(とのことであった)・・・第二(の覚書)は、彼、すなわち親賢は、府内の市を統治する最高の権力者であったので、その市の教会にはおびたしい人の出入りがあったのに鑑みて、自分にそれを取り締る許可を与えよ(というものであった)。

43 天正7年(1579) 【府内-港】 (『フロイス日本史』7 P278)

・・・沖の浜のプラスという世帯持ちの、はなはだ信心深い我らの(親しい)キリシタンが、ペトロという(教名の)兄弟とともに武装して駆けつけた。彼らは半里以上も遠いところから急遽駆けつけたのであって、(こう)言った。

44 天正7年(1579) 【府内】〔臼杵〕 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P158~P159)

・・・彼〔田原親宏〕についてはすでに述べたが、豊後の諸大身中、最も重立った人である。彼は諸国が反旗を翻し、豊後が窮迫しているのを見ると、これを機に、数年前に国主〔宗麟〕が彼より没収して(田原)親堅〔親賢〕に与えた多大な封禄を取り戻そうと欲し、若い国主(義統)にも老国主(宗麟)にも全く告げることなく、或る日突然に彼がいた政庁所在地を出発した。・・・この大身が(政庁を)発ったことは、特に、諸国の大身が謀反を起こしたとの知らせが日々届くこの時期にあつては、諸人のはなはだ恐れるところであり、従つてこの親宏が謀反を起こすのは確かなことと思われた。・・・彼〔親宏の娘を娶った婿〕もまた反旗を翻すことは疑いなしと思われた。そこで、政庁所在地である臼杵の市の大半と、豊後で一番大きな府内の市では、人々が立ち退き始め、各人はできる限り家財を救おうと努め、これを他の場所に移した。というのも、両市は中心的な市であるから、右の大身が事を起せば第一に両市を攻撃するに違いないからであった。

45 天正7年(1579) 【臼杵】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P174)

・・・正月の少し前に、親宏はここ臼杵で行なわれた協議に加わっていたが、国主〔宗麟〕と嫡子〔義統〕に一言も告げることなく、いっさいを投げ出し、祭礼を行なうため急ぎ私邸に向かうと言ひ残して豊前に近い邸へと立ち去った。

46 天正7年(1579) 【府内】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P242)

・・・この時、すでに国主〔宗麟〕と嫡子〔義統〕は彼〔田原親宏〕の陰謀を知っていたが、事はすでに隠せぬほどに進行していたので、〔田原〕親賢と称する右の大身の一子〔親宏〕が反旗を翻し、海と陸から府内を急襲するため、自ら軍勢を率いて出陣した。府内には、国主フランシスコと嫡子がごく少数の人員と兵力を伴って滞在していたので、もし、彼が豊後の非常に重

立った大身である別の邪悪な人物と申し合わせた日に来（襲し）たならば、間違いなく府内と豊後国主は完全に滅ばされていたであろう。

47 天正7年(1579) 【宗麟一義統】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P244~P245)

・・・大身らほもし豊後の統治が国主フランシスコ〔宗麟〕の手に戻らなければ、彼ら自身も豊後とともに破滅することを理解するに至った。そして彼らは、ふたたび国主フランシスコが少なくとも三年間は政治を司り、子息は政治を父に譲って引退し、嫡子〔義統〕が最も寵する家臣の四名は悪しき助言によって嫡子を惑わしたがため、ただちに国外に追放すること、ならびに、これを行なった後、彼らは一体となって親貫との対戦に赴き、豊後にあるべき状態を戻すことを決意した。・・・老国主は己れが長としてふたたび政治を司るとの方策をいかにしても受け入れようとはしなかった。彼は子息の名誉を支持し、嫡子が政治を行ない、彼はなしうる限り助言と権威をもって彼を助けることを主張し、・・・結局、事は老国主が希望する通りに決定され、大身ら親貫との戦に備えるため別れると、豊後の情勢は幾分鎮まり始めた。

48 天正8年(1580) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P251~P252)

・・・また、府内の修道院を今後は学院^{コレジオ}とし、同所で修道士らが勉学を続け、修練所を出た者が年齢と時間の許す限り在学することが定められたが、これは他の人たちに説教すべき日本人が(イエズス)会の者として相応しく、その職務を十分に果たしうするためには精神と学問を有することがきわめて必要と認められるからである。

49 天正9年(1581) 【府内】【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P299~P300)

・・・この国〔豊後国〕には学院^{コレジオ}一ヶ所、修練院^{インシニョ}一ヶ所及び司祭館二ヶ所がある。学院は同国の首都である府内の市にあり、当市には国のいっさいの政治を司っている嫡子(大友義統)が二ヶ月前から住んでいる。学院には(イエズス)会員が十名おり、その内三名は司祭で、一名はラテン語の教師である。彼らの中に日本人修道士のパウロがいるため、ラテン語の授業のほかにも毎日、日本語の授業がある。

50 天正8年(1580)~天正9年(1581) 【府内】【宗麟一義統】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第5巻 P337)

・・・巡察師は有馬でしたように、日本少年の神学校^{セミナリオ}を当地に設立することはできなかったが、豊後の首都府内に学院を、また府内から五里の所にある臼杵の市に修練院を設けた。

府内には常に国主フランシスコ(大友宗麟)の息子(義統)がいるため、国主は通常、臼杵に居住している。

51 天正9年(1581) 【宗麟】 (『フロイス日本史』 8 P18~P19)

・・・豊後の国境(からすぐ近い)豊前の国には、かの(有名な)宇佐の宮の僧院がありました。(全)日本で著名な僧院で、多数の巡礼者を集め、莫大な収入を誇っていました。国主フランシスコ〔宗麟〕は、この悪魔の礼拝所が姿を消すことをひとしお念願して来ましたが、ついに火が放たれ、そのすべてが灰燼に帰してしまいました。・・・以上がフランシスコ・カブラル師の書簡の記事である。

52 天正10年(1582)頃 【府内】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第6巻 P24)

・・・臼杵の城下〔豊後全土でもっとも強固であり主要なる城下町の一つで、かつてはここに政庁が置かれていたが、現在は国主フランシスコ〔宗麟〕が家族と共に住んでおり、彼の子息である国主〔義統〕は政庁と共に府内へ移り、爾来三年になる〕には昨年、(書簡に)認めた通り修練院があり、同所は巡察師がかつて迎え入れた日本人六名とポルトガル人六名の(合わせて)十二名の修練士をもって昨年の降誕祭の前日に開設された。

本年、修練院がその附属の建物をも含めて落成したので、修道院は設備が増えて非常に便利になり、国主フランシスコが建てた教会に大いなる輝きを添えた。

53 天正10年(1582)頃 【府内】【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第6巻 P31~P32)

・・・府内の市^{まち}はおよそ八千人の住民を擁し、・・・この市は豊後全国の首都であり、同市には現在、若い国主(大友義統)

がその政庁と共に居住している。すでに（書簡に）認めた通り、昨年、この市に学院を一カ所開設したが、現在まで（イエズス）会員が十三名駐在しており、（その内）三名は司祭で、その他は修道士である。・・・当学院は我らの主（なるデウス）が御許に召し給うたポルトガル国王ドン・セバスティアンの恩寵によって建てられたもので、同国王は学院のために年額千クルザードを寄付し、マラッカの税関から支払われることになっていた。

54 天正 10 年（1582） 【府内】（『イエズス会日本報告集』 第三期 第 6 巻 P35）

・・・豊後国中でもっとも豪華で大いなる伽藍をもつ主要な寺院が当市〔府内〕の最良の地にあった。この寺院は我らが臼杵の教会に礎石を据えた週の或る夜、火を發し、寺内より一物も持ち出せぬまま全焼した。・・・また、府内のかの寺院にはふたたび住む者がなかったので、国主フランシスコ〔宗麟〕の助言により、この件は若い国主〔義統〕が同寺院の収入を武士たちに分け与え、その地所は一人のキリシタンの武士に与えるように処置された。

55 天正 10 年（1582）頃 【府内教会】（『イエズス会日本報告集』 第三期 第 6 巻 P63）

・・・今日までに日本へ渡来した事物の内、日本人がもっとも好んだこと（の一つ）はオルガン、クラボ、ヴィオラを弾奏することであった。そのため我らは今では二台のオルガンを、一台は当安土山に、またいま一台を豊後に所有しており、各地にはクラボを備えている。少年たちが（これらを）学び、ミサやその他の祝祭ではヨーロッパの祝祭における歌手その他の設備の不足を彼らによって補っている。

56 天正 11 年（1583） 【宗麟】（『イエズス会日本報告集』 第三期 第 6 巻 P194）

・・・彼〔宗麟〕は同地〔津久見〕の主人となった翌日、さっそく、修道士二名を呼び、同地方にある三つの僧院の仏像をことごとく破壊し、一つ残らず焼き払うことを命じたので、これを実行した。

57 天正 12 年（1584） 【府内教会】（『イエズス会日本報告集』 第三期 第 6 巻 P235）

当一五八四年の初めに豊後国の（イエズス会）とキリシタン宗団に関わる諸事の状況、および府内の市のサン・パウロ学院と臼杵の修練院にいる者の数を年報に詳しく記した

58 天正 12 年（1584） 【臼杵】（『イエズス会日本報告集』 第三期 第 6 巻 P236）

・・・臼杵は世子（義統）が政庁と共に居を構えているところなので、国主フランシスコ（宗麟）は世子および国の大身たちの心を動かすには同所で諸聖務を行なうのが良いと考え（たので）、修練院長は修道士たちと共に聖柩を造ることを引き受け、国王は信心から、日本人が殊に信仰する聖土曜日（の）の聖水盤を（造ることとした。）国主が同所に建てた新しい教会ははなはだ大きかったにもかかわらず、枝の日曜日にはあまりにも多数が参集したので国主はより大きな教会を造らせなかったことを悔やんだほどである。

59 天正 12 年（1584） 【府内】【府内教会】（『イエズス会日本報告集』 第三期 第 6 巻 P244）

・・・今、国主フランシスコ〔宗麟〕は府内の市に古くからある慣例を新たに破ることを企てた。これは幾年も前から同市では一人の市民も、また土地の者もキリシタンとなっていないことで、彼らを促すため国主は我らの学院の入口に非常に立派な門を建てると共に、以前にはなかった通りを学院に近い大通りに向けて設けさせた。また、町内の者に聴聞を命じたが、キリシタンとなることは強要せず、もし、公然と、或いは密かに他の人々の洗礼を妨げる者があれば、これを理由に国外へ追放することを命じた。その町の領袖である十三名が聴聞を始めたが、彼らはすでに洗礼を受け、さらに百名近くが説教を聴いている。

60 天正 12 年（1584） 【府内】（『フロイス日本史』 8 P50）

・・・学院からはキリシタンたちの要請によって、国主フランシスコ〔宗麟〕に、一寺院を壊してよいかどうか伺いを立てさせた。実はキリシタンたちはその寺院の敷地を墓地として、そこに一基の十字架を建てたがっていたのである。国主はそれを許したので、その寺院はさっそく取り毀たれ、その跡には盛んな祭典と行列を催して十字架が建立された。

61 天正 12 年 (1584) 【中央】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 6 巻 P281)

・・・羽柴の海軍の司令官は都生まれのキリシタンで名を(小西)アゴスチノ(行長)といい、教会の親しい友である。彼は敵の出陣を知るとただちにおよそ七十艘の艦隊を率いて堺の前に来た。彼は我らのガレオン船に似た船に乗り、これには多数のモスケット銃と、豊後の国主〔宗麟〕が信長に贈った大砲一門を備えてあったが、敵軍が通る和泉国の海岸を急襲し、多数の敵兵を殺した。

62 天正 13 年 (1585) 【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P3)

今、豊後地方に住むイエズス会の会員は、府内の学院、臼杵の修練院、およびニヶ所の司祭館で三十五名おり、そのうち八名は司祭、十四名は日本人修道士、十三名はヨーロッパ人修道士である。

63 天正 13 年 (1585) 【宗麟】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P7~P8)

・・・国主フランシスコ〔宗麟〕は、何年か前、四カ国が彼の息子の嫡子に服従するのを拒んで住民が反乱を起してからは貧しくなったので、日本で非常に珍重されている彼の或る品を売るため堺の市に送った。それは柘榴位の大きさと小さく、釉ぐすりをかけた茶碗で、或る種の葉を挽いて粉にしたものを入れるために用い、一般に何かの度毎に熱湯を加えて飲むためのものである。この貴重な宝物のことを、日本の最大、最良の地の領主羽柴筑前殿が聞き、日本中で有名な器だったため非常に欲しがり、その器のために一万五千クルザードを出すことにし、さらに好意を示すためその代金を非常に遠い豊後まで、陸路山口の国を通して運ぶよう命じた。

64 天正 13 年 (1585) 【府内】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P12)

・・・国主フランシスコ〔宗麟〕が府内に来たが、これは嫡子が国内の主要な領主たちと、彼にとって重要な事を話し合うためにそこにいたためであった

65 天正 13 年 (1585) 【府内一暮らし】 (『フロイス日本史』 8 P70~P71)

・・・府内の近くの地で、国主フランシスコ〔宗麟〕が若干の収入を得ている津守では、土地の住民たちがデウスのお話を聞きたがっていた。・・・(丘)上には(別の大きい)十字架を建て(る)ことにし、(その)ために周囲が二、三ブラサもある二本の松の木を(伐採が)禁じられている松林から(特に)伐って来る許可を国主フランシスコに乞うた。彼らはいとも容易にその許可を得、府内の市で仏僧や異教徒たちをあつと言わせようと、松の木を伐り出した場所から真直ぐの道を通ればもっと近かったのに、一同は協議の上、府内では年に一度の祇園祭りという異教徒たちの盛大な行列の時だけに用いられる車の上に、その松材を乗せて運搬することにし、なおまた、各地のキリシタンたちにも連絡して手伝ってもらい、自分たちのうちの何人かは、額(に入った)聖)画を携え、横笛、その他、奏樂や祝祭(に用いる)樂器を持って材木の上に乗って行くことに決めた。このようにして一行が市街に入ると、人々は、かくも盛大に、そして皆から(讚)嘆されながら十字架を建てようとする新しいキリシタンたちの熱意を眼前にして、町中が騒然となった。

66 天正 13 年 (1585) 【府内一柞原八幡宮】 (『フロイス日本史』 8 P95)

・・・嫡子〔義統〕は府内に接したところに戦の神、八幡を祀る美しい神社を有している。彼は、この神を特に信心していて、この神社)に広大な地所を割り当て、戦における成果のすべてをこの神の加護に帰した。

67 天正 13 年 (1585) 【府内一柞原八幡宮】 (『フロイス日本史』 8 P139)

・・・それまで、戦局は彼〔義統〕にとって有利に展開して来た。彼につねに伴っている占い師は、彼に、それらの戦果はすべて日本の戦の神である八幡の御加護によると言っていたが、彼はその(占い師の)勧告に従って、本年、(八幡)祭を挙行した。それは過去に催されたものに比べてはるかに盛大であった。

68 天正 14 年 (1586) 【中央】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P135)

・・・大坂では、次いで関白殿〔豊臣秀吉〕が豊後の国主フランシスコ(大友宗麟)を招待するため、金の座敷を組立てさせ

ることになった。彼が去ると、司祭たちに見に来るようにとの伝言が来た。この座敷の精巧さ、豪華さ、完全さは驚くべきものであった。

69 天正 14 年 (1586) 【宗麟－義統】 (『イエズス会日本報告集』 第Ⅲ期 第 7 卷 P144)

・・・副管区長 [ガスパル・コエリュ] 師は、津久見 (そこ [臼杵] から三里の所) に、国主フランシスコとその奥方および子供たちを訪問するために行き、その後で臼杵の城に嫡子を訪ねた。

70 天正 14 年 (1586) 【府内】 (『フロイス日本史』 8 P193)

・・・嫡子 [義統] と伯叔父の親賢、および関白 [豊臣秀吉] から派遣された二人の主将は、遠く豊後を離れたところで、さして重要でもないことに従事していた。彼らは豊後での出来事について報せを受けると、府内の市にやって来た。そして、彼らは準備し全力を挙げて敵を攻撃し破滅させ、彼らを国外に放逐しようとするどころか、まったく平然と府内に留まることとし、敵が来攻した場合に備えて防塞を築くのに汲々たる有様であった。彼らは国内で敵が荒しまくっており、すべてが焼き払われ、婦女子の大群が各地から捕虜となって拉致されて行くのを毎日耳にしながら、それについてはそ知らぬ風を装っていた。そうしたことに耳をかそうとはせぬ(ばかりか)、したい放題に酒宴を張り遊興に耽っていた。

71 天正 14 年 (1586) 【府内】 (『フロイス日本史』 8 P204~P208)

・・・既述のように(豊後の)国中に謀叛の動きが見られ、領国の大部分が敵の掌中に陥り、領民たちは互いに掠奪し合っている現状であったから、府内の学院の司祭や修道士たちは、(従来)以上に、間近く差し追った生命の危険に曝されていた。学院の人々を、祭服、書籍、教会の銀(製品)・聖像といった主要な家財とともに一刻も速やかに安全な場所に移す必要があった。だがそれを実行するためには大いなる障害があった。すなわち嫡子 [義統] と仙石殿 [仙石秀久] が、府内の市からは、何びとも外出したり家財を搬出したりしてはならぬ、これに違反する者は死刑に処し、家財を没収すると布告せしめていたからである。かくてこの告示はただちに実施され、数名はごくわずかばかりの家財を持ち出そうとして処刑されたのであった。・・・府内の重立った商人、その他、市の富豪は、その財産の大半を密かに持ち出して、そこにあった別の船に積み込み、港から自由に出してもらおうとして、[仙石殿の家来である] かの盗賊に大金を贈賄していたのである。

72 天正 14 年 (1586) 【府内－城】 (『フロイス日本史』 8 P212~P215)

・・・(豊後国主の)嫡子(義統)は、薩摩軍が攻めて来た時に身を守り得るために、他の二名の(関白の)主将とともに上原と称するある場所に一城を築くことに決した。だが彼らは心して真面目に築城の作業に従事しなかった。彼らの不用意ははなはだしいもので、(日夜)饗宴や淫狼な遊びとか不正行為に現をぬかしていたので、その城(の備え)は笑止の沙汰であった。・・・府内の学院にいた我らの同僚たちはそうした動きを見て、上原の新しい城に身を寄せた。同城へは、それより先に家財を送っていたのであり、・・・その晩は城内で過した。・・・(同夜は)豪雨に見舞われたので、敵は市を攻撃して来なかった。朝になって、司祭は一同がいるところは、後日薩摩の連中(まで)が語っていたように、人間が住む城というよりは、野獣の洞窟にも等しいものである

73 天正 14 年 (1586) 【府内－港】 (『フロイス日本史』 8 P216~P217)

・・・修道院を出ると、一同はそのあたりの田畑から大勢の人々が出て来るのを見て驚いた。・・・まだ府内から出てしまっていないうちに、市から半里離れたところにある、船の碇泊地、沖の浜の村落が焼けるのが見られた。・・・つねに(仲間の)人々を後方に残したまま進んで行った。そして後ろを振り返って見るたびに、すでに府内から立ちのぼっていた火炎がますます拡大するのが認められた。・・・そのようになった原因は、嫡子 [義統] と他の殿たちが、なんら通告することもなく突如として逃走し、秩序を欠いたことにあった。そして哀れな民衆と府内の市民およびその周辺の住民が、その犠牲となったのである。

同夜、(府内の)市を脱出した老若男女は無数であった。ある者は船で逃げ、他の者は死物狂いで深い山の中に逃れた。だが府内の川の対岸にいた敵はそれに気づいて、彼らを襲って苛酷な損害を与えた。

74 天正 14 年 (1586) 【府内】 (『フロイス日本史』 8 P219)

・・・これらのことは、同じ夜に生じたことである。府内の市は、その晩、夜通し燃え続けた。こうして府内は壊滅し、豊後(では)、異教徒の三寺院を残すのみでほとんどすべてが焼けてしまい、我らの修道院もすべて破壊されたり掠奪されたりした。・・・捕虜として連行された人々の群も甚大であった。

75 天正 15 年 (1587) 【府内】【府内教会】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P175~P176)

・・・それから敵は進んで、突然府内に入り、すべてのものを焼き破壊したので、その住民になされた破壊、敵が背後にあつて焼かれた家々から逃げる男女、子供たちを見るのは悲惨な思いであった。府内は人口八千人に近かったが、日本の家屋は木造で、多くは板又は藁葺きの屋根なので、何か所かに火が付くと、短時間ですべてが灰になってしまう。ただ二、三の末寺のみが残ったが、これは瓦屋根であり、少し離れた所にあつたので火が達しなかつた。我らの修道院も同様に離れていたため残ったが、後に、ここに尊敬されている一人の仏僧を置いた。

76 天正 15 年 (1587) 【府内】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P176)

・・・この間、上(方)からさらに多くの兵が豊後を支援するために到着した。関白殿〔豊臣秀吉〕が派遣する兵は益々増えて行き、彼自身も近いうちに來ることに疑いはなかつたので、薩摩は豊後を放棄して自分の家へ引き込むことを余儀なくされた。しかし薩摩の兵が豊後を破壊した以上に、上(方)から來た関白殿の兵は多大な破壊や荒廃をもたらし、結局この地を台無しにしてしまった。すべての不幸が一つも欠けないようにするためか、その後にペストのような伝染病がこの国を襲い、治療の方法がなく、無数の人が死んだ。

77 天正 15 年 (1587) 【府内教会】 (『フロイス日本史』 8 P220~P221)

・・・こうしているうちに、都の地方からは関白の弟美濃殿(羽柴秀長)が大軍を率い、その総司令官となって日向に向かうため(府内に)到着し、我らの修道院に投宿した。・・・美濃殿はさっそく家屋の周囲に、壕のついた非常に厚い竹垣を造らせた。

78 天正 15 年 (1587) 【宗麟】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P183 ~P184)

・・・関白殿〔豊臣秀吉〕は、都に帰ろうとした時、・・・この戦いで彼に仕えた武将たちに報奨を与えるため、九カ国を分配するに際して、彼に最上と思われる方法で分け、嫡子(義統)には領していた豊後を、国主フランシスコ〔宗麟〕には、日向を与えた。しかし国主フランシスコは疲れて老いを感じており、領国の征服のため、また苦勞するよりも、己の靈魂の救済を考える方を望み、どうしてもそれを受けたがらず、感謝の言葉を述べて辞退した、というのも、その国に入れば、老後は不安におびやかされ、戦さが絶えないだろうと思っていたからである。

79 天正 15 年 (1587) 【宗麟】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P186)

・・・国主フランシスコ〔宗麟〕は、豊後の津久見で六月十一日(六月二十八日)(*onze de Junho, F. 28 de junho)に逝去した。

80 天正 15 年 (1587) 【宗麟】 (『イエズス会日本報告集』 第三期 第 7 巻 P190)

・・・我らの良き真の友国主フランシスコ〔宗麟〕は、多くの不幸と勞苦、特に豊後の破壊を経験した後、非常に弱くなったと感じ、臼杵の城の長い期間にわたる籠城で疲れ、通常邸を置いている津久見に行くことにした。しかし、豊後全体を荒らしている病いのため、その病いにかからぬよう、それほど早くは行けなかつた。そして数日前からすでに熱があり、津久見に着いた時には病状が悪化して、到着して三日のうちそこで亡くなった。

大友宗麟関係年表

中央政権の動き	大友氏の動き	大友氏と覇権を争った 戦国大名の動き
1534 織田信長、生まれる	1530(享禄3年) 大友宗麟、生まれる	1535 島津勝久、府内沖の浜に逃れる
1537 豊臣秀吉、生まれる	1545 このころ、初めてポルトガル人が府内を訪れる	1550 龍造寺隆信、本家を継ぐ
1551 織田信長、家督を継ぐ	1550(天文19年) 二階崩れの変で父大友義鑑殺害される。 義鎮(宗麟)、家督を継ぐ	1551 大内義隆、陶隆房により暗殺される。
	1551 ポルトガル船、初来航 ザビエル、府内訪問	
	1555 中国人鄭舜功、府内訪問	
	1556 府内病院が開設される	
	1557 府内教会にて、日本人による聖歌隊が結成される	1557 毛利元就、大内氏を攻め、大内義長、自害する
	1559 義鎮(宗麟)、九州6ヶ国の守護となる	
	1561 門司城攻防戦にて、大友氏、毛利氏に大敗する	
	1562 義鎮、宗麟と号し、剃髪し、白杵に移る	
	1564 將軍足利義輝の調停により、大友氏と毛利氏、和睦を結ぶ	
	1566 毛利氏、和睦を破り、再び北部九州に進出する。大友氏と激戦を繰り返す	
1567 信長、美濃攻略。岐阜を本拠とする。 宗麟、織田信長に、「赤壁賦図盆」を贈る		1569 北部九州の毛利軍、撤退する
1568 信長、足利義昭を奉じ、上洛。義昭を15代將軍とする		1571 毛利元就、死去(75歳)
1570 信長、大友宗麟に毛利氏との和睦を勧める	1570 大友宗麟、筑後高良山に出陣し、龍造寺隆信の本城佐嘉城を包囲。隆信、大友軍の本陣に奇襲をかけ、勝利する(今山合戦)	1574 島津義久、薩摩・大隈を平定す
1573 室町幕府、滅亡する	1573(天正元年) 宗麟、家督を長男義統に譲る しかし、後見役として引き続き領国支配に 関与する	1577 島津義久、日向南部を攻略する
1576 信長、安土城を築造する	大友館の「土廻廻屏」が造られる	
	1578 日向高城耳川合戦にて、大友氏、島津氏に大敗する	
	1581 府内にコレジオができる	
1582 信長、本能寺の変にて死去	1582 天正少年遣欧使節が派遣される	1582 島津氏、肥後を攻略する 1584 龍造寺隆信、島原沖田畷にて島津氏と戦い、戦死
1585 豊臣秀吉、関白となる 秀吉、大友・島津両氏に即時停戦を命じる		
1586 4月宗麟、大坂城に参上し、停戦令・国分令の受諾を表明 7月秀吉、停戦令を無視した島津氏平定のため軍事動員令を発動する 10月島津氏、豊後へ侵攻、12月戸次川原の合戦、府内の町焼き払われる(その後復興)、占領状態のまま越年する		
1587 5月島津義久、秀吉に降伏。九州の戦国時代に終止符が打たれる	1587(天正15年) 大友宗麟、死去(58歳)	
1590 秀吉、全国平定		
1592 秀吉、朝鮮国に侵攻する(文禄の役)。大友吉統(義統)も出陣する		
1593(文禄2年) 大友吉統、朝鮮での失態を理由に秀吉により豊後国を没収される。		
	1595(文禄4年) 大友吉統(義統)水戸にて「當家年中作法日記」を記す	

中世大友再発見フォーラムIIの開催について

今から約430年前の戦国時代末期に整備された大友館跡は平成10年に庭園跡が確認され、平成13年には一部が国史跡に指定されました。現在、指定地は全体の約51%になっています。また、平成17年3月には大友氏の菩提寺でもある万寿寺跡を含む旧万寿寺地区も追加指定され、指定名称も「大友氏遺跡」に変更されました。

大分市では、史跡指定を記念して、平成13年度にフォーラムを開催いたしました。その後5年が経過し、この間、史跡の保存・整備に向けて関係住民の皆さんのご理解とご協力を得ながら歩みを進めています。そこで、今回、これまでの調査によってわかったことを中心に、市民の皆様方へ大友氏遺跡のことを知って頂くために「府内のまち 宗麟の栄華」をテーマに中世大友再発見フォーラムIIを開催します。

《参考文献》

- 鹿毛敏夫2006『戦国大名の外交と都市・流通－豊後大友氏と東アジア世界－』 思文閣出版
小泊立也1997「豊後における中世時宗の展開」『史料館研究紀要』第2号 大分県立先哲史料館
坂本嘉弘2006「中世大友城下町跡の発掘調査」『日本考古学』第21号 日本考古学協会
田北学編1962～1979『増補訂正編年大友史料』(一～別巻下)
松田毅一監訳1997『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(株)同朋舎
松田毅一・川崎桃太訳1977『フロイス日本史』 中央公論社
大分市史編纂委員会1987『大分市史』中
大分市史編纂委員会1987『大分市史』下

本資料集の作成にあたり、次の機関及び各位から多大なご協力・ご指導を賜りました。厚くお礼申し上げます。(順不同・敬称略)

京都国立博物館、国立歴史民俗博物館、広島県立歴史博物館、米沢市上杉博物館、神戸市立博物館、福岡市博物館、松浦史料博物館、京都大学総合博物館、野村美術館、御花史料館、大分県教育庁文化課、大分県立先哲史料館、大分県教育庁埋蔵文化財センター、津久見市教育委員会、柳川古文書館、根津美術館、柞原八幡宮、豊国神社社務所、西寒多神社、福厳寺、瑞峯院、政秀寺、勝光寺

中世大友再発見フォーラムII 府内のまち 宗麟の栄華

編集・発行／大分市教育委員会文化財課

印刷／三恵印刷株式会社

発行日／平成18年10月8日

中世大友再発見フォーラムⅡ

平成18年10月8日(日) 会場:コンパルホール 文化ホール 入場無料

12:00～ 受付

13:00 開会

主催者代表あいさつ 大分市長 釘宮 磐

来賓あいさつ 伊藤正義文化庁記念物課主任文化財調査官

開催趣旨説明 大分市教育委員会 教育長 秦 政博

13:20～14:40 特別講演「織田信長と大友宗麟」 苅谷 俊介さん(俳優)

苅谷 俊介(かりや・しゅんすけ)さん

俳優と考古学研究者の二つの顔を持つ個性派俳優。俳優活動では、「大都会」「西部警察」をはじめ、NHK大河ドラマなどのほか、映画・CMに出演中。その合間をぬって遺跡の発掘に携わり、遺跡や遺物に関する執筆も精力的におこなっており、「土と役者と考古学」等の著書を出版。日本考古学協会会員。

14:50～16:20 パネルディスカッション

テーマ「府内のまち 宗麟の栄華」

コーディネーター

豊田 寛三さん(大分大学教授、大分市文化財保護審議会副会長)

パネリスト

苅谷 俊介さん(俳優)

河原 純之さん(元文化庁記念物課主任文化財調査官
大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会委員長)

伊藤 正義さん(文化庁記念物課主任文化財調査官)

三浦 祥子さん(大分市歴史資料館協議会委員
元アドバンス大分編集長、ハヌマン代表)

鹿毛 敏夫さん(新居浜工業高等専門学校助教授
大分市文化財保護審議会委員)

閉会挨拶 大分市教育委員会 教育総務部長 三股 彬

主催/大分市・大分市教育委員会

後援/大分合同新聞社、NHK大分放送局、OBS大分放送、TOSテレビ大分、OAB大分朝日放送、
OCT大分ケーブルテレコム、エフエム大分、シティ情報おいた、大分県教育委員会